



幼な子らをキリストへ

郡山キリスト共同教会
福井 文彦

「幼な子らをそのままにしておきなさい。わたしのところに来るのをとめてはならない。天国はこのような者の国である」 マタイ19・14

8月初旬に東北教区のティーンズ・バイブル・キャンプが、国立那須甲子少年自然の家で開かれました。数年前から参加者の対象が中高生のみから小学6年生以上にと広げられ、今年の小学生の参加は11名でした。3日目の夜のキャンプファイアーでは十字架のメッセージが語られ、個人的な取り扱いの時を持ちました。私は小学6年生数名の男の子どもが受け持ちました。そのうちの一人はクリスチャンホームの子どもで洗礼を受けていましたが、すっかりしない原因は罪の解決を得ていないことであると示されたのです。聖書を聞いて、悔い改め、血潮を仰いで祈りました。その子どもとは同室で、寝る前に「スツキリした」とニッコリして就寝し、翌朝の目覚めの顔はとてもさわやかでした。

十数年前に『教会から子供がいなくなる』というタイトルの本が出たことがあります。確かに、以前のように映画会、子ども大会、クリスマス会等を開いても子どもたちは集まってきました。しかし、クリスチャンホームの子どもたちがいなくなったわけではないのです。ところが、その子どもたちが小学校の上級生から中学生にかけて教会学校から離れて行くのです。「いつか帰ってきますよ」と慰めるだけではすまされない、心の痛む問題です。しかし、教会はこの課題と取り組み、何とかして乗り越えていかなければなりません。

その現状を打破するために、牧師や教師の意識の改革、靈性や情熱など資質の向上の必要も

あります。また教会、教区で取り組まなければならない課題もあり、教会学校教師研修会などの学びも必要です。しかし、もう一つの大切なことは家庭の役割ではないでしょうか。申命記6章7節には「努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならぬ」とあります。また、冒頭のみ言葉の背景は、子どもが一人で、また友だちに連れられて来たのではなく、「父母に連れて来られた」のです。

その事を思う時、両親の信仰の確立とあり方は、子どもの救いと信仰の継承に欠かせない大切な事ではないでしょうか。前掲の申命記のみ言葉は、聖書の真理の伝達と信仰の継承とは、まず家庭の中で行わなければならないと教え、それは親の責任です。日常生活の中で親から子へと教えられ、伝えられ、継承されていく一面が大切だと言えます。家庭での宗教生活が形式的で厳しすぎないように。両親の信仰が生きた信仰であるように。子どもの宗教教育についてうかつにならないように。そのために両親は主日の礼拝と交わりを中心に、個人的な祈りとみ言葉によって養われ、聖霊によるバランスのとれた信仰生活を送ることが大切です。

子どもの救いと信仰の継承のために、教会学校教師も教会も「神様から両親に委託された真理の伝達と信仰の継承」という重要な使命のため、「何をなすべきか、何をもって援助できるか」を考えることです。その一環として教会学校教師は家庭の訪問、父母との交わりを持つことが必要です。教会学校の働きは教師と教会全体の働きとして取り組んで行きたいものです。

牧羊者

目次

巻頭言	1
教師養成講座 旧約聖書丸ごと早わかり(3)	3
信仰に生きた王たち 《10月教案》	9
信仰を導いた預言者 《11月教案》	24
クリスマス 《12月教案》	36
牧羊ひろば(辰野教会)	51
おわりに	52

教師養成講座

旧約聖書丸ごと早わかり(3)

鎌野 直人

はじめに

前回(二〇〇六年度Ⅱ巻)では旧約聖書の歴史書をヨシユア記から列王紀まで概観しました。今回は、イスラエルの王国の歴史をダビデより捕囚からの帰還までを復習した後、歴史書の残り(歴代志からエステル記)を概観してみよう。

I イスラエルの王国の歴史

1 統一王国(紀元前一千ごろ〜926年)

紀元前一千年頃、古代中近東を治めてきた西のエジプト、東のアッシリヤ、バビロニア各帝国が共に弱体化した結果、イスラエルの民が住むパレスチナ一帯は権力が真空地帯化し、地域の小国がその勢力を伸ばす可能性が生まれてきました。また、地中海から侵入してきた人々(「海の民」と呼ばれる)がパレスチナの海岸沿いに定住し、「ペリシテ人」と呼ばれるはじめました。

そのような時代に誕生したのが、ダビデによるイスラエル統一王国です。ダビデの王国はパレスチナ一帯を支配するに至りましたが、海岸沿いのペリシテ人とは平野部と山地部の間地点を取り

合い、頻繁に衝突を起していました。

続くソロモンの治世、イスラエルは東西を結ぶ主要な街道を支配しましたので、諸国との交易を通して繁栄を享受することができ、王宮は国際色が豊かなものとなりました。

2 分裂王国(紀元前926年〜721年)

しかし、紀元前926年、ソロモンの死後、統一王国はユダ部族を中心としたユダ王国(南王国)とエフライム部族を中心としたイスラエル王国(北王国)に分裂しました。

北王国は経済的にも、資源的にも優位な領地を持っていました。ただし、宗教面では神殿のあるエルサレムを都とする南王国にありません。そこで、北王国最初の王であるヤラベアムは王国の南の端ベテルと北の端ダンに礼拝所を建造し、そこにイスラエルの神をあらわす像として金の子牛を置き、その前で犠牲をささげました。宗教的にも民を北王国に留めようとしたのです。

オムリ一族(アハブなど)が北王国を治めていた紀元前9世紀前半、地中海沿いのフェニキヤとの深い交易関係のゆえに、王国は経済的に栄えました。しかし、フェニキヤ土着の宗教であるバアル礼拝が北王国に積極的に導入された結果、宗教

的には暗黒時代に入りました。ただし、この時代に活躍したのが預言者たちです。

紀元前845年にエヒウによってクーデターが起こり、オムリ一族による王朝は終焉を迎えました。それと同時に、メソポタミヤ北方のアッシリヤはその力を回復し、パレスチナにその侵略の手を伸ばしてきました。ただ、アッシリヤの力が一時的に弱っていた紀元前8世紀前半、ヤラベアム二世の頃、北王国は経済的な繁栄を享受することができました。

紀元前745年にティグラト・ピレセルがアッシリヤの王として即位した後、アッシリヤはパレスチナに再度その勢力の手を伸ばしてきました。北王国はアラムと連合を組んでアッシリヤに反抗しましたが、その試みは失敗に終わり、ついに帝国の属国となります。ティグラト・ピレセルの死後に北王国は反乱を企てましたが、企ては失敗しました。その結果、都サマリヤは紀元前721年にサルゴンの手によって陥落し、人々はアッシリヤへと捕囚されました。北王国の滅亡です。

3 ユダ王国時代(紀元前720年〜586年)

北王国が波乱万丈の歴史を送っている中、南王国は山中に位置していたため、他国からの侵入が少なく、比較的安定な歴史を送り、ダビデ一族の王が継続して国を治めていました。しかし、紀元前701年、ヒゼキヤ王の時代、アッシリヤはエルサレムを完全に包囲します。しかし、奇跡的にも南王国はこの危機を乗り越えました。

アッシリヤはその後弱体化していきます。その結果、パレスチナへの影響力は次第に弱まり、7世紀末のヨシヤ王の時代、ユダ王国は最後の繁栄を享受しました。しかし、その後、エジプトの侵攻により、ユダはエジプトの属国となります。紀元前605年にバビロンがメソポタミヤの覇権を取った後には、ユダ王国はバビロンの属国化と反逆を繰り返します。そして、ついに598年、第一次バビロン捕囚が行われます。バビロンによって立てられた王によって、しばし王国は命を保ちました、再度反旗を翻した結果、586年エルサレムはバビロン軍の前に陥落し、多くの高貴な民はバビロンに捕囚され、ユダ王国の歴史はその幕を閉じます。

4 捕囚とそこからの帰還（紀元前586年）

強大な国というイメージをもつバビロンですが、その天下は決して長くはありませんでした。^{539年}、その都バビロンはクロス王に明け渡され、パレスチナの覇権はベルシャに移ります。そのような状況の中で、エジプトへの侵攻を狙っていたクロスは、親ベルシャの地域をパレスチナに拡大するため、ユダの人々がエルサレムに帰還し、神殿を再建することを許します。そして、第一次エルサレム帰還が行われ、神殿の再建が進められますが、様々な抵抗によってその基礎工事のみしか完成することはできませんでした。

続くダリヨス王の時代、サマリヤの総督たちの妨害に遭いつつも、捕囚から帰還した民は神殿を再建します（515年）。更に、アルタシャスタ王の時

代、エズラとネヘミヤの指導の下、エルサレムの城壁が築き直されます。そして、モーセの律法に則った統治を行うことにより、中心都市エルサレムをもつベルシャ帝国の一州としてユダヤはその独自性を発揮できるようになりました。

この時代、多くのユダヤ人が各地からエルサレムに帰還しましたが、帰還せずにそれぞれの地に残って過ごす者たちも多くありました。そのような人として特記すべきはエステルとダニエルです。

II 歴代志上下

1 内容

先に学んだ列王紀上下には、バビロン捕囚の観点から、イスラエルならびにユダが滅びた原因が詳しく綴られています。その一方で、ここで取り扱う歴代志上下は、ほぼ同じ時代を記述してはいませんが、バビロン捕囚から帰還し、神殿とエルサレムの再建に取り組んでいるユダの民に向かって、これからどのような民となるべきかに焦点をあてています。また、神殿に関する記事に多くのスペースを割く一方で、ダビデ王の罪とその影響や北王国での出来事の多くが割愛されている点もサムエル記上下、列王紀上下と大きく異なります。

2 分解

① 系図（上1～9章）

1章はアダムからノア、そしてアブラハム、イ

サク、イスラエルまでの系図と共に、この一族に関わりがある世界諸民族やイスラエル近隣の国々の王の名が掲載されています。2章から8章にはイスラエルの子どもたちの系図が、本来は第四子であるユダから始まり、十二部族すべてについて記されています（ただし、ベニヤミンの系図は二回）。なお、ユダの系図（2・3～4・23）、レビの系図（6章）、ベニヤミンの系図（8章）に多くのスペースが割かれています。それらは、これら三つの部族が歴代志上下において、さらには捕囚から帰還後のエルサレムにおいて重要な位置を占めていたからだと考えられます。なお、9章にはイスラエルびと、祭司、レビびと、門番の名前が記されていますが、これらは捕囚から帰還して、エルサレムに定住した人々のもと考えられます。

② ダビデによる神殿建設準備（上10～29章）

初代の王サウルの死を受けて（10章）、ダビデは全イスラエルの王として即位し、すぐさますべてのイスラエルの民と共にエルサレムを取り、そこを都としました。続いて、彼はキリアテ・ヤリムに置かれてある神の箱をエルサレムに運ぶ計画を立てました。しかし、神の民心になつた神の箱の運び方ではなかったため、その計画は失敗に終わり、神の箱はしばらくオベデ・エドムの家に留まることとなりました。その後、ダビデは神の箱をかき上るべきレビ人を整えて、ついにエルサレムに主の契約の箱をかき上ることができました。レビびとたちはエルサレムで主の箱に仕え、そこ

で感謝と賛美をささげる一方、祭司たちはギベオンにある主の幕屋に仕え、ソロモンによつて神殿が建築されるまでそこで燔祭をささげました。

ダビデは神殿をエルサレムに建設する計画を立てましたが、神はそれを認められませんでした(17・4)。しかし、敵に対する勝利、ダビデ王家の確立、そして、ダビデの子による神殿の建設を主はダビデに約束され、これらの約束は確かに成就していきましました。

人口調査を行ったダビデが主の怒りを買ったことをきっかけに、神殿建設の準備がはじめられました。神殿建設地としてオルナンの所有する打ち場を選んだダビデは、物資と働きびとを備え、ソロモンに神殿を建設するように命じ、彼に油を注いで次の王に任じました。また、レビびとと祭司を組織し、神殿における音楽、門守、倉庫管理などの働きに彼らを任命し、さらには神殿の細部にわたる計画をソロモンに与えました。

歴代志上下を読む時、神殿建設はダビデが計画、準備したものであつて、ソロモンはそれを忠実に実行に移したに過ぎないことがわかります。戦いにおいて多くの血を流したために建設を許されなかったダビデに代わつて、平和の人ソロモンが神殿建設を実現したのです(22・8〜10)。

③ ソロモンによる神殿建設(下1〜9章)

王国において地位を確立し、主から知恵と軍備と富を与えられたソロモンは、主のために神殿を、そして自らのために宮殿を建て始めました。ツロ

の王から資材の援助を受け、イスラエル在住の他国人を労働者とし、エルサレムのモリアの山に神殿を建設しました。神殿完成後、契約の箱はシオンから神殿に移り、この事に感謝して祭司とレビびとたちは主を賛美しました。その時、主の臨在の栄光が、シナイの荒野において幕屋が完成した時と同じように(出エジプト40章)、神殿に満ちました。

ソロモンの奉献の祈りの後、天から火が下つてささげものを焼き尽くし、主がこの神殿を受け入れられた事が明らかにされました。そして、主はこの神殿を選び、聖別し、ここでささげられる祈りに耳を傾けると約束してくださいました(歴代志下7・12〜18)。ソロモンは、モーセが命令したように定例の祭りを守り、父ダビデが定めたように祭司とレビびとにその務めを果たさせました(8・12〜15)。

列王紀上ではソロモンの心が主から離れていったことが記されていますが(列王紀上11章)、歴代志下はこの事については沈黙しています。ただ、彼が他国の指導者たちからの称賛を受け、富と知恵において誰にも劣らない者となつたことのみを記しています。ただし、主から翻つた時に起こる災厄についての主の言葉は記されており(歴代志下7・19〜22)、この言葉は続く王たちの治世において、残念ですが現実となつていきます。

④ ユダの王たち(下10〜36章)

ソロモンの子レハバアムの愚かな選択によつて

イスラエルの人々はレハバアムを拒絶しました。ヤラバアムを王として迎えた北王国の部族は「ダビデの家にそむいて今日に至つた」(10・19)と述べられています。更に、北王国の民が金の子牛を頼み、ダビデの子孫を王とする国に背き、アロンの子孫を祭司とせず、レビびとを主の働きに用いていない、と南王国の王アビヤは非難しています(13・8〜10)。主を捨て、ダビデを捨て、エルサレムの神殿を捨てた事こそが北王国の罪です。

南王国はどうでしょうか。ダビデの子孫を王とし、エルサレムの神殿において礼拝を守つていました。また、アサ(14〜15章)、ヨシャパテ(17章)、ヒゼキヤ(29〜31章)、ヨシヤ(34〜35章)は宗教改革を断行し、主を求め、過越の祭りを行い、律法の言葉に耳を傾けました。特にヒゼキヤとヨシヤは、ソロモンの栄光の時代に王国を立ち返らせました。しかし、そのような王たちであっても、外国の王と同盟を結び(アサ、アハズ)、北王国の王と共闘し(ヨシャパテ、アハズ)、神殿以外での礼拝を奨励し(ヨラム、アハズ)、偶像崇拜を行いました(ヨアシ、アマジヤ、アハズ、マナセ)。一度は主に背いていた王が主に立ち返りもしましたが(レハバアム、マナセ)、当初主の言葉に従順であつた王が晩年になつて主に背いた例も数多くあります(アサ、ヨアシ、アマジヤ、ウジヤ)。これらの不従順の結果、女預言者ホルダがヨシヤに語つた言葉は現実となり(34・23〜28)、災厄が王国に訪れます。

最後の王たちの姿は悲劇的です。エホアハズ以

降、すべての王は死を待たずに退位させられ、多くが他国へと捕囚されました。そして、最後の王ゼデキヤはエルサレムと神殿の破壊に直面しました(35章)。彼らが主の送られた使者たちの言葉を軽んじ続けたからです(35・15～16)。しかし、70年の荒廃と安息の後、ペルシャ王クロスがエルサレムの神殿再建を命じる事によって、預言者エレミヤを通して語られた主の言葉が成就しました(35・22～23)。

歴代志に登場する王たちに起こった出来事に共通するのは、主に従う者には報酬があり、主に背く者には裁きがある、という原則です。たとえ主に背いていたとしても、それに気がついて悔い改め、自らを低くする時、主は赦しと祝福を与えてくださいます(レハバアムやマナセ)。「あなたがもし彼を求めるならば会うことができる」(上28・9)とのダビデの言葉が本書を一貫して流れています。

III エズラ記

1 内容

エズラ記は捕囚の民のエルサレムへの帰還から始まります。これは、メソポタミヤから地中海沿岸を治めていたバビロン帝国が滅び、ペルシャ帝国がそれに替わって世界を治め始めた(紀元前539年)からこそ起こった奇跡です。本書は、エルサレムへ帰還した民が様々な抵抗の中で神殿を再建し、さらに律法の書を携えたエズラが帰還して、

改革を行ったことが記されています。なお、旧約聖書のほとんどの部分はヘブライ語で書かれています。本書の4・8～6・18だけはアラム語(ヘブライ語の親戚に当たる言語)で書かれています。

2 分解

① 抵抗の中での神殿の再建(1～6章)

ペルシャ王クロスがバビロン帝国の都を平和裏に占拠した時、彼はエルサレムの神殿を再建し、バビロン王ネブカデネザルによって奪われた神殿の什器すべてを携え上げとの勅令を発布しました。そこで、多くのユダヤの民、祭司、レビびとはエルサレムに帰還しました。その中には、祭司エシユアとダビデ王家の血を引くゼルバベルがおり、彼らは帰還した民の指導者となりました。そして、エルサレムに祭壇がついに築かれ、主への祭りが再開されました。更に、神殿の基礎の工事も完成しました。

ところが、バビロンに捕囚されずに残っていた者たちが神殿の再建を妨げたために、神殿再建そのものの工事はダリヨス王の治世まで延ばされてしまいました。ちなみに、エルサレム復興の働きが妨害されたのは、この時だけではありませんでした。アハシユエロスがペルシャ王であった時代(ダリヨス王の時代の後)にも、町の城壁の再建を止めようとする妨害は起こっています(4・6～23)。エルサレムに帰還した民は幾度にも渡る抵抗に立ち向かわなければなりませんでした。

しかし、エシユアとゼルバベルは、預言者ハガ

イとゼカリヤを通して語られた主の言葉によって励まされ、神殿の再建を再開しました。川向こうの州(ユーフラテス川の西岸の州)の知事たちはこれに反対し、ペルシャ王ダリヨスに確認を取りました。ところが、クロス王の時代に勅令が確かに出されていたことが調査により明らかにされたので、王は知事たちにユダヤ人たちの働きを助けるよう命じました。こうして、神殿は無事に完成し、その奉献式が執り行われました。

② エズラによる共同体の復興(7～10章)

アルタシャスタが王であった時、祭司の家系にあり、モーセの律法に精通した学者エズラがエルサレムに帰還しました。モーセの律法に従ってユダヤの事情を調べることで、王から与ったさげものをエルサレムの神殿にさげること、律法を教え、それによる裁きを実践することが彼に使命として与えられていました。

ところが、エルサレムでエズラを待ちかまえていたのは、民が異邦の女を妻とし、子どもをもうけているという事実でした。これは律法に反することです。エズラは驚愕し、断食し、着物を裂き、主に祈りました。その祈りにおいて(9・6～15)、エズラは神の恵み深きいつくしみを覚えつつ、ユダの民の犯している大きな過を主に告白しています。祈りの後、群衆はエズラの所に来てその罪を告白し、異邦の妻とその子どもたちを追放する契約を結ぶことを誓いました。そして後、民は異邦の女を妻とした人たちを調べ終え、該当した人

たちは、妻をその子どもたちと共に離縁しました。

IV ネヘミヤ記

1 内容

ネヘミヤ記にもエズラ記同様にバビロンから帰還したユダヤ人たちがエルサレムを復興していくさまが書かれています。神殿は完成していましたが、まだエルサレムの町の城壁は完成しておらず、律法に則^{のっと}って民の歩みを改革する必要もありました。そこで、ペルシャにおいて高い位についていたネヘミヤがエルサレムに帰還し、改革と復興を実現していきました。なお、本書はネヘミヤが一人称で語っている部分が多くあるため、「ネヘミヤの回想録」と呼ばれることがあります。

2 分解

① エルサレム城壁の再建（1～7章）

ペルシャの都ササで王の給仕役（食事の毒味役）であったネヘミヤは、エルサレムの悲惨な現状を聞き、主に王アルタシャスタの前であわれみを得る事ができるよう祈り求めました。彼の祈りは聞かれ、ネヘミヤは王の許可をいただいて、エルサレムに帰還します。ところが、そこで彼を待ちかまえていたのは城壁の再建に反対するサン巴拉とトビヤでした。ネヘミヤは当初城壁の再建の願いを秘密にしましたが、後に同胞のユダヤ人に話しました。彼らはその意見を歓迎し、エルサレムの数多くの門の再建に着手しました。

民の協力によって城壁の再建は進みましたが、妨害もますます激しくなりました。そのような困難の中でも、祈りと知恵ある対応によって、ネヘミヤたちは困難な作業に取り組んでいきました。しかし、ユダヤ人の内にも問題がある事が徐々に明らかになってきました。同じ民の間で利息をとって金と穀物を貸していたのです。ネヘミヤは、そのような行動をやめることを進言し、民もそれに同意しました。その後も外部からの誹謗中傷^{ひぼうちゅうけう}は止まりませんでしたが、神の助けによって帰還してきた民は52日間で城壁を完成しました。

② 律法の朗読（8～10章）

城壁の完成後、民は広場に集まり、エズラがモーセの律法の書を読むのを聞き、それを良く理解しました。そして、仮庵の祭りを律法に従って守りました。更に、祝福をくださっている神への感謝とその律法に従わなかった自らの罪の告白の祈り（9・6～37）のあと、ユダの民は律法に従うとの契約を主と結びました。

③ ネヘミヤによる改革（11～13章）

その後、住人がたいへん少なかったエルサレム（7・4）に移住を申し出る人たちが起こされると共に、多くのレビびとと祭司が神殿の働きにつきました。ついに城壁の落成式が行われ、民は感謝と賛美と犠牲を主にささげ、大いに喜びました。この日、神殿の働きをつかさどる人々にその役割が割り当てられました。しかし、まだ改革すべき

点が多くあることが明らかになりました。異邦人が会衆の中にいる点、レビびとが受くべき分を得ていない点、安息日を守っていない点、異邦の女を妻としてめとっている点です。しかし、ネヘミヤはこれらの問題にも対処し、ついには聖なる主にふさわしい共同体をエルサレムに立てあげていきました。

V エステル記

1 内容

ペルシャ王クロスによる帰還命令の後、多くのユダヤ人たちはエルサレムに帰還せず、帝国各地に住んでいました。その中にはペルシャ帝国の王宮において高い位置を占めるようになった者もいました。エステルはそのようなユダヤ人の一人です。彼女はペルシャ王の王妃となり、その地位を用いることによってユダヤの民を救いました。そして、この救いを記念するためにプリムの祭りがユダヤ人の間で祝われるようになりました。本書にはそのいきさが記されています。なお、エステル記は旧約聖書の中で唯一「神」という語が使われていない書です。しかし、注意深く読み進めるならば、神の摂理のわざをあちらこちらに見いだすことができます。

2 分解

① アハシュエロスの酒宴（1・1～2・18）

ペルシャ王アハシュエロス王の時代、王宮では

王や王妃が主催となって酒宴が繰り返し行われていました。ある日、王妃ワシテの美しさを自慢するためにアハシエロス王は彼女を自分の酒宴に招きました。しかし、それを彼女が拒んだため、王は憤り、彼女が王の前に再び来る事ができないように勅令を出しました。

しばらくして、ワシテに対する王の憤りは収まりましたが、王に別の王妃が必要となりました。そこで、新しい王妃を選ぶため、美しく若き処女を都であるスサに王は集めました。その中にエステルがいました。彼女はいとこであるモルデカイに育てられていましたが、勅令により王宮に連れて行かれ、宦官ヘガイの管理下に置かれました。彼女はヘガイに、そして王にも気に入られて、ついには王妃に選ばれました。ただし、彼女がユダヤ人であることだけは、誰にも知らせませんでした（2・10）。

② エステルの酒宴（2・19～7・10）

王宮に仕える働きをしていたモルデカイは、二人の宦官が王を暗殺する計画を立てていることを聞き、その事をエステルを通じて王に告げました。その結果、王の安全は守られ、二人の宦官は処刑されました。しかし、王はモルデカイに対して相応の報酬を与えることを忘れていました。

さて、王宮ではアガクびとハマンが権力を持つようになりました。しかし、モルデカイがハマンに敬礼することを拒絶したため、ハマンはモルデカイと彼の属するユダヤ人を滅ぼそうと計画を立て

てます。そして、アダルの月の13日の一日に限ってユダヤ人を殺戮することを許可する勅令が發布されるに至りました。

この勅令が發布されたことを知ったモルデカイは、自らは荒布をまとい、エステルにこの事を知らせ、王のあわれみを請うように彼女に求めました。王からの召しを最近こうむらないので王の前に行くことを躊躇したエステルに対して、「あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとだれが知りましょう」（4・14）とモルデカイは訴えました。そして、エステルは「わたしがい死なねばならないのなら、死にます」（4・16）の覚悟の言葉をもって答えました。

その三日後、エステルは召しなしに王の前に出ました。しかし、彼女はみずからの願いを王に述べることはせず、ハマンと共に王がエステルの設ける酒宴に出ることだけを願いました。しかし、その酒宴においても彼女は願いを王に告げず、次の日にもたれる酒宴にも同じように出席して欲しいと申し出るに止まりました。

その夜、王と王妃との酒宴にまねかれ、絶頂にあったハマンは、モルデカイを木に掛ける計画を立てました。一方で、王はどうだったでしょうか。エステルが命をかけて王の前に来たにも関わらず、ハマンと共に二日続けての酒宴に来てくれ、と願うだけであることが気掛かりで、その夜は眠れません。時間潰しに王宮の記録を聞いている中で、暗殺計画を事前に通報したモルデカイになんの報酬もしていないことに王は気づきました。そこで、

王はハマンの提案に従い、モルデカイに王冠をかぶらせ、馬に乗せ、大臣によって顕彰させることにしました。ハマンは王が自分に対してこの報酬を与えるものと勘違いし、皮肉にも自分の最も憎むモルデカイをほめたたえる役を果たさなければならなくなりました。流れが変わってきたのです。

エステルによってひらかれた二度目の酒宴において、彼女はハマンが絶滅しようとしているユダヤ人は自分の民であることを王に告げ、悪しきハマンを王の前に訴えました。そしてハマンは自らが備えた木に掛けられ、処刑されてしまいました。

③ プリムの酒宴（8章～10章）

エステルは王に先の勅令を取り消すように願いました。しかし、一度発布した勅令を取り消すことはできないので、先の勅令が指定しているのと同じアダルの月の13日にユダヤ人たちはその敵にあだを返して良いとの勅令が新たに発布されました。ユダヤ人たちが滅ぼされる日が、彼らの敵が滅ぼされる日と変わりました。多くの敵がその日殺され、翌日もペルシャの都であるスサにおいてユダヤ人の敵が同じように撃たれました。その後、ユダヤ人たちはアダルの月の14日を祝宴の日、プリムの祭りの日と決めました。なお、モルデカイは帝国において王に次ぐ者となりました。

参考文献

Richard D. Nelson, *The Historical Books*, Nashville: Abingdon, 1998.

聖書 列王上3・16～28 テーマ ソロモン王の知恵

序論

(鎌野)

「教会とともに」を年題とする今年度の学びも今日から後半に入る。3カ月続いた使徒行伝研究を終えて、久しぶりに旧約聖書をひもとくが、期題が「信仰に生きた王たち」であることに注目してほしい。新約の教会を支えたのは臨在の主に対する信仰だったように、旧約の王たちを導いたのも主なる神への信仰であった。今月学ぶ5人の王たちは、みな違った課題を課せられていたが、信仰によってそれらを解決していった。まず最初に、紀元前960年、若くしてダビデ王の継承者となった2代目の王ソロモンに焦点をあてよう。彼の知恵がどのようなものであったかを示す逸話が、今日の聖書箇所に記載されている。

一、公平に裁く知恵

こともあろうに、普通の人々ではなく、〈ふたりの遊女〉が王のもとにきたことに留意したい。長老や役人では解決できない難しい問題だったゆえに、王の最終判断が求められたのだろう。当時の社会にあつて、遊女は決して芳しい職業ではなかったにもかかわらず、しかも、このように最高権力者である王に直接訴えるシステムができていたことは驚きだ（これらの点では、江戸南町奉行だった大岡越前守の似たような裁判の話とかなりの違いがある）。そして王は彼らの訴えを真剣に聞き、何ら差別することなく公平に対処した。

二人の話聞いたとき、王は、どちらがうそを言っているのか、その口調や表情である程度分かったかもしれない。しかし王は、主観的な判断で安易に裁きを下さなかった。正しく、公平に裁くために、知恵を用いたのである。

二、愛に基づく知恵

遊女にとつて、妊娠することは決して喜ばしいことではなかった。父親は不明なので一緒に住めず（だから家には彼女たちしかいなかった）、育児の経済的負担をどうするか、心配していたかもしれない。しかし二人は様々な困難を克服して、出産にまで至った。二人とも生まれた赤ん坊を愛していたはずである。だからこそ、一方の女は自分の不注意で赤ん坊を死なせてしまつても、あきらめきれずに、取り替えたのだ。しかしそれは赤ん坊を自分のもの、自分の所有物と考えることであり、正しい愛の姿ではない。

王が〈生きている子を二つに分けて、半分をこちらに、半分をあちらに与えよ〉と命じたとき、本当の母は、〈生きている子を彼女に与えてください〉と叫んだ。赤ん坊が生きていてさえくれたら、たとい自分が育てることができなくても良いと思つたからだ。それが正しい愛である。逆に、〈わたしのものにも、あなたのものにもしないで、分けてください〉という女は、赤ん坊を物のように考えていた。万が一、この女が本当の親であつたとしても、彼女は赤ん坊を正しく育てることはできないだろう。王は、赤ん坊に対する母親の愛を信じて、このような裁きをしたのである。

三、神から与えられた知恵

〈イスラエルは皆王が与えた判決を聞いて王を恐れた。神の知恵が彼のうちにあつて、裁きをするのを見たからである〉。ソロモンの知恵は、彼自身から出てきたのではない。それは神から与えられたものだ。即位の直後、主が夢に現れたとき、彼は自分が「小さい子供であつて、出入りすることを知りません」（7節）と、その未熟さを認め、「自分のために長命を求めず、また自分のために富を求めず、また自分の敵の命をも求めず、ただ訴えをききかける知恵を求めた」（11節）。主がその求めに応じて知恵を与えられたからこそ、遊女であつても公平に、また彼らの中にある愛を信じて、裁くことができたのだ。

自分の無能を知り、神の力に信頼することこそが信仰である。ソロモンが生涯、この信仰を持ち続けたなら、イスラエルの歴史は違ったものになつただろう。しかし彼は、周囲の国々の王女たちを妻としたため、晩年、「その妻たちが彼の心を転じて他の神々に従わせた」（11・4）。政略結婚は、信仰を否定することだったのである。

結論

ソロモンの知恵は確かにすばらしいものだった。しかし主イエスは、「ソロモンにまさる者がここにいる」（マタイ12・42）と仰せられた。確かに、「キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵」となられた（1コリ1・30）。主イエスを信じる者こそ、ソロモンにまさる知恵者である。謙遜にこの知恵を求め続けようではないか。

研究資料

(石田)

「ソロモンの知恵」と人の口にのぼるように、ソロモンが知恵ある王であったことは一般的にも知られている。そこから派生してソロモンは不思議な指輪を持っており、それによってどんな動物とも話しができたという伝説も生まれたほどである。今日の個所は、彼の知恵を具体的に伝えるエピソードである。実際にはおびただしい事例があったであろう。ソロモンの手によると言われている箴言にも、その賢明さが遺憾なく表されている。

テキスト

16 ふたりの遊女が王のところにきて、王の前に立った 王の前とは、いわば最高裁判所である。長老や役人たちがつかさどる下級裁判所では取り扱いかねる難題であったことがうかがえる。遊女でも王に訴えることができたほど、王の裁判はすべての人に開かれていた。イスラエルの王は、士師時代の「さばきづかさ」が発展したもので、行政、司法、軍事を一元的に支配していた。

17 ああ、わが主よ 王を神様扱いしているわけではなく、王に対して敬意を表す呼び方である。

18 わたしたちは一緒にいましたが、家にはほかにだれもわたしたちと共にいた者はなく、ただわたしたちふたりだけでした 当事者である二人以外に目撃者や証人のいない事態なので、裁判としては困難を極める。

20 はしための眠っている間に、わたしの子をわたしたのかたわらから取って、自分のふところに寝

かせ… 自分が目にしていないことであるにもかかわらず、相手の非であると断言しているのは、母親としての直感が働いたからであろう。

22 彼らはこのように王の前に言い合った 二人の争論が激しさを増し、水掛け論に陥っている。普通の第三者にとつては、当事者以外に証人がいないので、判断に困る事態である。ところがソロモンには、それを見分ける力があつた。

24 そこで王は「刀を持ってきなさい」と言った 当事者の言葉だけでは判断できないと見た王は、その場にいる誰にでも分かる方法で裁きをつけようとしている。

25 生きている子を二つに分けて、半分をこちらに、半分をあちらに与えよ ソロモンは、経験的にもわが子に対する母親の気持ちとはどんなものであるかをわきまえていたのであろう。この言葉が事の真偽を両断することになる。まさにソロモンのうちに神の知恵が働いている。

26 すると生きている子の母である女は、その子のために心がやけるようになって 実の母は、わが子が殺されるくらいなら、相手の女に渡してでも生きているほうがましだ、と焼けるような思いで王に申し上げた。一方、相手の女は、それをわたしたしものにも、あなたのものにもしないで、分けてください と冷たく言い放った。つまり赤ん坊は死んでもかまわないという意味になる。ソロモンは、このような二人の反応の違いをあぶり出すことによって、本当の母親を見抜くことができた。まさに「王のくちびるには神の決定がある、さばきをするとき、その口に誤りがない」(箴言16・

10)とあるとおりである。

28 イスラエルは皆王が与えた判決を聞いて王を恐れた これは人間の能力を超える判決であつたので、一同はソロモンに神の知恵が備えられていることを悟った。また、どんな悪事もソロモンの前ではあばかれてしまうという恐れを抱いた。神の知恵が彼のうちにあつて、さばきをするのを見ただからである ソロモンは事実、状況や前後関係

に対する靈感された洞察力をいただいていたと言えるだろう。新約的に言えば、これは御霊の賜物の一つである「知識の言葉」に当たるかもしれない(1コリント12・8)。正しい裁判をすべき王として、「聞きわけける心をしもべに与えて、あなたの民をさばかせ」(9)、「訴えをききわけける知恵」(11)が、彼の求めに従って与えられたと見るべきであろう。そのほか、ソロモンの知恵に関する聖書の記述は以下のとおりである。「神はソロモンに非常に多くの知恵と悟りを授け、また海べの砂原のように広い心を授けられた。ソロモンの知恵は東の人々の知恵とエジプトのすべての知恵にまさった。彼はまた箴言三千を説いた。またその歌は一千五首あつた。…諸国の人々はソロモンの知恵を聞くためにきた。地の諸王はソロモンの知恵を聞いて人をつかわした。」(4・29、30、32、34)。「シバの女王は主の名にかかわるソロモンの名声を聞いたので、難問をもつてソロモンを試みようとなぜねてきた。…王が知らないで彼女に説明のできないことは一つもなかった」(10・1、3)。

参考図書 『キリスト者学生会聖書注解』、『実用聖書注解』、『新聖書注解』、など。

聖書	列王上3・16～28
タイトル	ソロモン王
暗唱聖句	神の知恵が彼のうちにあって、さばきをするのを見たからである。
目 標	ソロモン王の知恵が神からのものと知る。

導入

(松浦み)

本日から、旧約聖書に登場してくる信仰に生きた王たちについて学びます。王たちがどのように神様を信じ、歩んでいったかを知ることによって私たちが神様の喜ばれる道を歩むためのヒントをいただくことができます。

2代目 ソロモン王

イスラエル王ダビデの後継者となったのは、ソロモンです。彼が父王ダビデの築き上げたイスラエル王国を受け継いだのは、まだ若者のときでした。ソロモンは父王ダビデから受け継いだ神殿建築の事業を導くこと、イスラエル王国を治めることなど、その責任の重さをひしひしと感じ、どのように王国を導いていったらよいのか、思案していました。ある日ギベオンで多くのささげ物を祭壇にささげて主を礼拝しました。その夜のことです。主は、夢の中に現れて、「ソロモンよ、あなたに何を与えようか、求めなさい」と語られたのです。ソロモンは何を求めたと思いますか？みなさんだったら何を求めますか？

ソロモンは「神様、あなたは父ダビデに代わって

私を王とされました。しかし、私は未熟なものです。正しく国を治めていけるように知恵と力をください」と求めました。神様は、ソロモンの求めを非常に喜ばれました。そしてこのように言われたのです。「ソロモンよ、あなたは自分のために長命を求めず、自分のために宝を求めず、また自分の敵の命をも求めず、ただ訴えを聞き分ける知恵を求めた。だから、わたしはあなたに限りない知恵を与えよう。それと共に、あなたの求めないもの、すなわち富と誉れとをあなたに与えよう」。ソロモンは非常に神様に祝福され、その王国は榮えに榮えたのです。

ソロモン王の非凡な知恵

あるとき、二人の遊女がソロモン王のもとにやってきて、声をそろえて王に自分たちの訴えを主張して王の前に立ちました。一人の女が「王様、私はこの女と一つの家に住んでいます。私は赤ちゃんを産みました。3日の後にこの女も赤ちゃんを産みました。ところが、この女は夜中に自分の子の上に伏したのでその子は窒息して死んでしまいました。そこで、この女は私の眠っている間に死んだ子を取り替えて私のふところに寝かせました。朝になって、私が乳を飲ませようとすると死んでいきます。しかし、よく見ると自分の子ではありませんでした」と。もう一人の女は、「いいえ、生きてるのが私の子で、死んだのはあなたの子です」と訴えます。初めの女は「いいえ、死んだのがあなたの子で、生きてるのは私の子です」。二人は王の前で言い合いました。二人の様子をじつと見ていたソロモン王は、突然家来に命じました。「刀をもつてきなさい！」そして、王

は「生きている子を二つに分けて、半分をこちらの母親に、半分をあちらの母親に分け与えよ」と命じました。すると、生きている子の母親は、「ああ、王様。生きている子を彼女に与えてください。決して殺さないでください」と必死に頼みました。もう一人の女は、「ああ、分けてください。丁度半分に！」と言いました。そこで、王様は赤ちゃんを取り上げ、本当のお母さんの手に渡しました。お母さんは赤ちゃんをしつかり抱きしめ、どんなに嬉しかったことでしょう。目に涙をいっぱい浮かべながら「王様、ありがとうございます」と言ったことでしょう。イスラエルの人々はソロモン王の判決を聞いて、ソロモン王の知恵に驚きました。神様がソロモン王と共にいられて、神の知恵によって裁きをするのを見たからです。

私たちにも与えられる知恵

ソロモン王はすごいなあ、私にも神様からの知恵がほしいなあ、と思いましたか？聖書には、求めれば知恵が与えられると約束されています。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人はとがめもせず惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば与えられるであろう」(ヤコブ1:5)。私たちの日常生活の中で、どうしたらよいかわからないとき、勉強がわからないとき、友だちとうまくいかないとき、どんなときでも「神様、私を助けて、神様の知恵を与えてください」と祈りましょう。神様は、疑わないうで信じて祈るとき、きっとあなたを助けてくださるでしょう。♪かみさまにかんしゃ♪ (こどもさんびか)



聖書 歴代下14・9～15 テーマ アサ王の祈り

序論

(鎌野)

ソロモンの死後、3代目の王レハベアムが主の言葉に従わなかったため、国は南北に分裂した。ダビデの血統を受け継いでいたのは南のユダ王国だったが、4代目の王になったアビヤも「その父が先に行ったもろの罪をおこな」つていた(列王上15・3。ここでは「アビヤム」という名で記されている)。しかし、彼の死後、紀元前九一〇年に即位した5代目のアサ王は、「主の目に良しと見え、また正しいと見えることを行った」(2節)。彼の信仰は、エチオピア軍が攻めてきた時の祈りの中に明確に示されている。

一、自分の弱さの告白

アサの治世は40年ほど続いた。その最初の10年間は平和な時代で、王は宗教改革を断行し、また要害の町を建て、軍隊を整備した。そして58万人の兵力を有するまでに発展した(1～8節)。父王アビヤの時代と比べると18万人も増強されている(13・3参照)。それでも、「百万の軍隊と三百の戦車を率いて」突然侵攻してきたエチオピア軍の前には、兵力の差は歴然としていた。そこで王は、ありのままの姿で神の前に出たのである。

アサは祈る。「主よ、力のある者を助けることも、力のない者を助けることも、あなたにおいては異なることはありません」。これは、自分たちが「力のない者」であることを正直に表明する祈りである。

る。もしエチオピア軍が50万人の兵力だったら、彼はこのように祈らなかつたかもしれない。神は、アサを謙遜にさせるために、あえてこのような大軍を送らせたのだろう。

現代の私たちも、試験に会ったときには、自分の弱さを認めざるをえない。病気や事故、事業の失敗、家族のいざこざ、信頼関係の破綻等によって失望落胆するとき、それは神が与えられたチャンスである。その時こそ自分の弱さを正直に告白しよう。これが信仰の第一歩なのだから。

二、神の強さの告白

また、アサの祈りは、神の助けは非常に大きいので、人間の力の大小は無関係であることを表明している。だからこそ、「どうぞ人をあなたに勝たせないでください」と訴えることができた。神ご自身が戦われるなら、人は勝つことはできない。それがアサ王の確信だった。

神の強さを認めることは、自分の弱さを認めることより難しいかもしれない。「神など存在しない」と言っている人など、なおさらである。しかし、死に直面する時など、本当に神はいないと強がりやを言っておれるだろうか。聖書は、この天地宇宙を創造されたお方の偉大な力をはっきりと宣言している(詩篇8篇、19篇等)。

自分が謙遜にならない限り、神の力の強さを知ることができない。試験の時こそ、目を上にむけよう。そして「わが助けは、天と地を造られた主から来る」と告白しよう(詩篇124・2)。神の力を認めることは、信仰の次のステップだ。

三、寄り頼みの告白

アサが「われわれはあなたに寄り頼み、あなたの名によつてこの大軍に当ります」と祈っていることに注目したい。彼は自分の弱さを認め、神の強さを認めた。それならどうすれば良いのか。ただ「寄り頼む」だけである。といつても、逃げ出すのではなく、主の名によつて勇敢に大軍に向かつていくのだ。主に寄り頼むことは、人を弱虫にするのではない。逆に、相手にチャレンジする勇気を生み出すのである。

この祈りの後、アサは軍を率いて戦いに出た。すると、「主はアサの前とユダの前でエチオピアびとを撃ち敗られた」。実際に戦闘があつたのか、超自然的な出来事があつたのかはわからないが、主ご自身が戦われたのは確実である。アサはさらに敵を追撃して全滅させた。敵軍は、「主と主の軍勢の前に撃ち破られた」。またゲラルとその周囲の町々をも占領できた。「主の恐れが彼らの上に臨んだからである」。これらは全て、アサが主に寄り頼んだ結果だった。

信仰とは、自分の弱さと神の強さを認めた上で、神に寄り頼むことである。自分と神とが人格的な交わりをもつなら、どんな試験にも立ち向かつていくことができる。主が私たちを一時も離れないで、戦ってくださいから。

結論

教会学校にも、色んな問題で弱っている子どもたちがいるかもしれない。彼らを励まそう。今日の暗唱聖句はきつと彼らを力づけることだろう。

研究資料

(石田)

アサ王の伝記とも言うべき記述が14～16章の3章にわたっている。これはユダの王の中でも、長い部類である。アサ王は、ダビデから5代目、南北分裂後3代目のユダの王である。レハベアム、アビヤと2代にわたって偶像に心を傾けた轍を踏まず、宗教改革を断行した。偶像を破壊して主なる神への礼拝を回復し、侵略したエチオピアの大軍を全滅させ(14章)、再び偶像を一掃して主なる神との契約を新しくし、それでも偶像礼拝をやめない祖母を皇太后の位から退けることまでした(15章)。しかし晩年は北王国イスラエルの侵略に際してスリヤ王の援助を求め、それをいさめた預言者を迫害したため、神より懲らしめを受け、病に苦しんだ(16章)。それでも彼は聖霊によって「アサの心は一生の間、正しかった」と評価されている(15・17)。彼の治世は父の3年に比べて41年の長きにわたり、彼が国を主に立ち返らせた功績は小さくない。

テキスト

1 その子アサが代って主となった アサとは、(与える)という意味らしい。「その母の名はマアカといつてアブサロムの娘であつた」(列王上15・10)とあり、父アビヤの母もこれと全く同じなので、実際は、マアカはアサの祖母である。母は早く亡くなったと考えられる。アブサロムはダビデの三男であるから、マアカはダビデの孫娘となる。アサの治世に国は十年の間、穏やかであつた 国家

的な平穏と繁栄は、単に環境的な要因にとどまらず、主の祝福に他ならない。「偶像を捨てて主を求め、おきてと戒めとに従順であるとき、平穏はその第一の実であり祝福である」(小島伊助全集第6巻)。

2 アサはその神、主の目に良しと見え、また正しと見えることを行つた 神がどう思われるかを意識して政治、というより祭政一体の(まつりごと)を行つた。

3 彼は異なる祭壇と、もろもろの高き所を取り除き、石柱をこわし、アシラ像を切り倒し 高き所は、偶像教の神殿であり、石柱は、祭壇のかたわらに立てられた偶像そのものを指す。アシラ像は、バアルの配偶神として、石柱に並んで木の柱に刻まれた。アサ王は、このような偶像礼拝の拠り所となるものを破壊させた。これは4節にあるように、主に對する熱心さのゆえである。

6 また主が彼に平安を賜つたので、この年ごろ戦争がなかった 北王国イスラエルとは絶えず緊張関係にあつたが、近隣諸国に征服されるような戦争はなかった。いわゆるパレスチナは、南北をエジプトとメソポタミアに挟まれているという地政学上、戦禍が絶えなかった。そこで10年だけでも(1節)平和が保たれていたのは、奇跡的な主の守りであることを、当時の人々は実感していたはずである。

7 われわれが彼を求めたので、四方において、(主は)われわれに平安を賜つた 近隣諸国との平和は、主なる神との契約に基づいて与えられる賜物であることを思い知っていた言葉である。

8 アサの軍隊はユダから出た者三十万人あつて、

盾とやりをとり… ユダとベニヤミンには兵役に登録されている者が58万人いたということ、全員を動員できたわけではない。ベニヤミンは伝統的に弓を得意としていた。

9 エチオピアびとせうが、百万の軍隊と三百の戦車を率いて 戦車三百は現実的な数字だが、軍隊百万という数字は、エチオピア軍の公称であるか、ユダ側の目に見えたおびただしさを表現したものであるかのどちらかであろう。いずれにせよ、アサ王をして真剣に祈らせる圧倒的な大軍であつたことは間違いない。

12 主よ、力のある者を助けることも、力のない者を助けることも、あなたにおいては異なることはありません アサ王は自分と軍隊を「力のない者」と認めており、主の憐れみをひたすら求めている。あなたの名によってこの大軍に当ります これは「わたしのうちに力強く働いておられるかたの力により、苦闘しながら努力しているのである」(コロサイ1・29)に通じる。

13 エチオピアびとは倒れて、生き残つた者はひとりもなかった。主と主の軍勢の前に撃ち破られたからである 信仰による完全な勝利である。

14 彼らはまた、ゲラルの周囲の町々をこごとく撃ち破つた ゲラルはベリシテ人の町である。おそらくエチオピア軍の侵略に乗じてユダを掠めようとしたのであろうが、返り討ちにあつた。

14 主の恐れが彼らの上に臨んだからである 古代の戦争は、それぞれの国を守る神と神との戦いであるとも考えられていたので、ベリシテ人はユダを守る主なる神の力に、委縮してしまつた。

聖書
タイトル
暗唱聖句

歴代下14・9・15

アサ王

主よ、力のある者を助けること

も、力のない者を助けることも、

あなたにおいては異なることは

ありません。 歴代下14・11

目 標
アサ王が全く神により頼んだ姿
に学ぶ。

導入

(松浦み)

先週学んだソロモン王の死んだ後、その子レハベアムが王となりました。しかし、レハベアム王は主の言葉に従わなかったため、国は南北に分裂してしまいました。ダビデの血を受け継いだのは南ユダ王国です。レハベアムの子アビヤ王も死にその子アサが王となりました(キリスト教書店で王と預言者リファレンスカードNo.52183が販売されている。参考資料に用いるとよい)。

5代目 アサ王

アサ王は王となったとき、父にならわず、初代ダビデ王のように主の目に良しと見え、また正しいと見えることを行いました。最初にすることは、偶像を打ち壊し、また偶像を礼拝する場所を取り除きました。そして、ユダ王国の人々が、先祖の神様、主を求め、主のおきてと戒めを行うように導きました。あるとき、アザリヤという人に神様の霊が臨み、アサ王に神様のお心を告げました。「あなたがたが主と共にいる間は、主もあなたがたと共にいられます。あなたがたが、もし、主を求めるならば主に会うで

しょう。しかし、主を捨てるならば、主もあなたがたを捨てられるでしょう」。アサ王はこの言葉を聞き、とても勇気づけられました。そして、国をあげて心をつくし、精神をつくして、先祖の神様、主を求めることを主に誓いました。ユダ王国は神様に守られ、平和な日々が続いたのです。第二にしたのは、要害の町を建て、軍隊を整備することです。アサの軍隊は、ユダから出た者30万人、ベニヤミンから出た者28万人で58万人の大勇士による軍隊が整備されました。

ピンチは神様により頼むチャンスするとき

ある日突然、平和な国ユダ王国にエチオピアの軍隊が攻めてきました。エチオピア軍は100万人の軍隊と300の戦車の大军です。アサ王の軍隊は槍を持つ者30万人、弓を引く者28万人ですから、どう見ても勝ちそうにありません。

その時、アサ王は神様に向かって呼ばわって祈りました。「主よ、力のある者を助けることも、力のない者を助けることも、あなたにおいては異なることはありません。主よ、われわれをお助けください。われわれはあなたに寄り頼み、あなたの名によってこの大軍に当ります」と。

戦いに行つたところ、エチオピア軍は主と主の軍勢の前に打ち破られ、アサ王の軍隊は大勝利のうちにエルサレムに帰って来ることができました。私たちもピンチに出くわしたとき、神様に寄り頼んで神様の力と助けを信じ祈り求めましょう。神様は祈りに答えて勝利を与えてくださるお方ですから。

志望校に合格した人の話

みなさんにとつては受験はまだまだ先のことがか

もしれませんね。現在高校1年生の男の子が、先日伝道礼拝のときこんな証をしてくださいました。「僕が名古屋高校の文理コース(大学受験コース)を第一志望としたとき、全然自信がありませんでした。しかし、昨年の夏から色々と高校見学をし、ここで勉強したいと願いが定まったのがこの文理コースでした。最終的な学校説明会に行つたとき、チャペルには十字架が輝き、大きな字でみ言葉が掲げられていました。「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です」(新共同訳フィリピ4・13)。「信仰に基づいてしつかり立ちなさい。雄々しく強く生きなさい」(1コリント16・13)。

新共同訳のみ言葉ですが、僕の心にも言葉の励ましが与えられました。そして、神様に祈つたのです。僕の方では、無理かもしれませんが、神様に寄り頼んで受験しますから、み心ならば合格させてくださいと。神様は僕の祈りを聞いてくださり、今、名古屋高校で学ぶことが許されています。学年礼拝では奏楽の奉仕もさせてもらっています。部活も勉強もとても充実した毎日です。これからも、さまざまな壁にぶつかるとき、神様に寄り頼み、祈りつつ、み言葉に励まされて毎日を送りたいと思います」。皆さんも、学校生活や家庭の中で、また様々なできごとの中でピンチに出くわすことがあるでしょう。そんなとき、神様を仰いでください。神様に祈りましょう。そうすれば、必ず神様はあなたに励ましと祝福の体験を与えてくださるでしょう。

♪語りませ主よ♪(友よ歌おう9)

(ゴスペルフォーク・ヒット集)



聖書 歴代下20・13〜30 テーマ ヨシャパテ王の勝利

序論

(鎌野)

アサ王の死後、その子ヨシャパテが南ユダ王国の6代目の王となった(紀元前八七二年)。彼もアサ王と同様、「その父の神に求めて、その戒めに歩んだ(17・4)」。彼は「民の中を巡り、先祖たちの神、主に彼らを導き返した。彼はまたユダの國中、すべての堅固な町ごとに裁判人を置いた」(19・4、5)。ヨシャパテとは「主はさばかれる」という意味なので、興味深い。彼の治世には、アンモン、モアブ、そしてセイル山の人々(彼らはみな死海東部から南部にかけて住んでおり、連合軍を作ったと思われる)が攻撃してきた。しかしヨシャパテは信仰によって彼らに勝った。その勝利の秘訣は以下の3つにまとめられるだろう。

一、預言への信頼

敵軍が近づいたとき、ヨシャパテも祈った。そこには、父王のアサと全く同様に、自分の弱さと神の強さ、そして神への寄り頼みが告白されている(20・12)。祈っていたのは王だけではなかった。一般の人々も家族そろって主の前に立っていた。その時主の霊が会衆の中でアサフの子孫であるレビびとヤハジエルに臨んだ。彼は、「恐れてはならない。おののいてはならない。これはあなたがたの戦いではなく、主の戦いだからである」と宣言したのである。ヨシユアへの主の励ましの言葉を思い出させる(ヨシユア1・9)。

ヨシャパテ王も民も、これを神からの言葉と受け取り、地にひれ伏した。そして翌日、王は民に「あなたがたの神、主を信じなさい。…主の預言者を信じなさい」と力づけたのだ。ヤハジエルは会衆の一人であり、決して有名な預言者ではない。しかし王は、彼の言葉を神からの預言と謙遜に受けとめ、それに信頼した。これこそ、戦いに勝利するための第一の秘訣だったのである。

二、神への賛美

王と民がひれ伏して主を礼拝した後、「コハテびとの子孫、およびコラびとの子孫であるレビびとが立ち上がり、大声をあげてイスラエルの神、主をさんびした」。彼らは神殿聖歌隊のメンバーであり、ヤハジエルの父祖アサフもまたそうだった(歴代上6・32〜43)。翌日、戦いに出るときにも、王は「民と相談して人々を任命し、聖なる飾りを着けて軍勢の前に進ませ、主に向かって歌をうたい、かつさんびさせ」たのである。

なぜなのか。それは、主が戦ってくださると確信していたからにほかならない。彼らは、すでに戦いに勝ったかのように、「主に感謝せよ、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」と歌った。預言の言葉に信頼したからこそ、賛美することができたのである。賛美は、戦いに勝利するための第二の秘訣であった。

三、主に従った行動

敵の連合軍は、南方から死海の西岸の狭い平野を通じて、死海の中央部分にあるエンゲデにまで

進んでいた(20・2)。ユダの軍は賛美しつつ、エルサレムの南にある「テコアの野」に行き、そこから南東の方向にある「エルエルの野」を通って進んだ。ここで、急坂である「チツの坂」を上って来る連合軍を迎え撃とうとした。ヤハジエルによって語られた主の言葉に従ったのである。

このとき、「主は伏兵を設け、かのユダに攻めてきたアンモン、モアブ、セイル山の人々に向かわせられたので、彼らは打ち敗られた。この伏兵が誰だったのかはわからない。しかし、主のなされたわざであることは確かだ。これがきっかけとなって、敵軍は「おのおの互に助けて滅ぼしあった」、つまり同士打ちして全滅してしまった。賛美して進んでくるユダの軍と、伏兵による混乱によって、連合軍の中に動揺が広がり、ひよっとして、どこかの国が裏切ったのではないかと、疑心暗鬼になったのかもしれない。にわか仕立ての連合軍にありそうなことだ。その結果、ユダ軍は何もしなかったのに、たくさん戦利品を得ることとなったのである。「あなたがたは戦うに及ばない」との預言どおりだった。主に従った行動こそ、勝利の第三の秘訣である。

結論

預言に信頼し、神を賛美し、主に従うとき、主は必ず勝利を与えてくださる。教会学校でも、しっかりとみ言葉を覚えよう。喜びをもって神様を賛美しよう。そして主に従っていこう。そのとき、サタンは打ち負かされ、すべての試練に勝利することができるようである。

研究資料

(石田)

ヨシャパテは敬虔なアサ王の子で、父の信仰を受け継いで、35歳から60歳まで25年の間まつりごとを行なった。彼に関する記述は父よりも長く、17〜20章の4章にわたっている。今日の箇所は、モアブ、アンモン、メウニの連合軍の侵略に対して、ヨシャパテが信仰による祈り一本で勝負し、圧倒的な勝利をいただいた記述である。ここには主のお働きが目に見える形で現れている。

テキスト

13 ユダの人々はその幼な子、その妻、および子供たちと共に皆主の前に立っていた。近隣諸国の連合軍はユダを攻め滅ぼそうとして大挙して来た。国家存亡の危機に際して、ヨシャパテは全国に断食を布告し、ユダの人々は、上下老若男女の区別なく、国を挙げて断食と祈りをもって主の前に出てきた(3〜5)。

14 その時主の霊が会衆の中でアサフの子孫であるレビびとヤハジエルに臨んだ。王と民の必死の祈りが答えられて、主の霊がヤハジエルに臨んだ。アサフの氏族だから、神殿で聖歌隊として奉仕していたが、祭司でも預言者でもなく、会衆の一人に過ぎなかった。思いがけない人が預言するために選ばれたわけである。「かくて御霊は臨んだ。御霊の臨むとき、それはみことばのお臨みである。主のことばは約束であり、啓示であり、激励である」(小島伊助全集第6巻)。

15 これはあなたがたの戦いではなく、主の戦いだ

からである。主なる神が戦いの主体であり、主導権を握っている。

17 あなたがたと共におられる主の勝利を見なさい。「主の勝利を傍観せよ」とも表現できる。自分の力を誇らせないためであろう。

18 ヨシャパテは地にひれ伏した。ユダの人々およびエルサレムの民も主の前にひれ伏して、主を拝した。王と長老たち、一般会衆がこぞって主なる神に降伏し、その絶大な主権宣言を受諾した。いにしえのヨシユアが軍勢の将の前に靴を脱いだように(ヨシユア5・15)。ヤハジエルの預言によって、ヨシャパテとユダの民はどんなに勇気づけられたかわからない。

21 彼はまた民と相談して人々を任命し、聖なる飾りを着けて軍勢の前に進ませ、主に向かって歌をうたい、かつさんびさせ。これはヨシユアがエリコ攻めに際して7人の祭司にラッパを吹き鳴らせた故事にならったものか。しかし国の存亡を賭けるような決戦に際して、聖歌隊を前面に立てるという発想や余裕は人間的な知恵からは生まれ得ない。やはり主の霊から出た知恵であろう。聖歌隊奉仕者のレビびとヤハジエルが、預言者として選ばれたことと関係があるのかもしれない。

22 そして彼らが歌をうたい、さんびし始めた時、主は伏兵を設け。明らかにヨシャパテの用意していた伏兵ではなく、彼も彼の軍隊もあずかり知らないものであった。敵を不利に陥れる何らかの自然現象、あるいは超自然現象、連合軍の利害の不一致や疑念などではないかと考えられている。

23 アンモンとモアブの人々は立ち上がって、セイ

ル山の民に敵し…彼らもおのおの互に助けて滅ぼしあった。連合軍のお互いが、ユダを侵略するという目的を忘れて、同士討ちを始めた。互いの間に疑心暗鬼が起きたのかもしれない。もともと大義名分がなく、欲心だけでつながっている連合だから、わずかな出来事で崩れやすい。

24 地に倒れた死体だけであって、ひとりものかれた者はなかった。ユダは敵の同士討ちによって一兵も失わなかっただけでなく、むしろ集めるのに3日もかかる莫大な戦利品を得た。まさに「主の勝利」、主の奇跡による徹底的な勝利である。またそれはヨシャパテと民の、信仰による勝利でもあった。

26 四日目に彼らはベラカの谷に集まり、その所で主を祝福した。ベラカは「祝福」の意。そこで圧倒的な勝利のゆえに主を賛美した。それはまた主に寄り頼んだ者への祝福でもある。それでその所の名を今日までベラカの谷と呼んでいる。「谷」とは言うが、「平野」の意。記念の土地に名前をつけることによって、この勝利と教訓を子々孫々、記憶にとどめようとしたのだろう。

29 そしてもうもろの国の民は主がイスラエルの敵と戦われたことを聞いて神を恐れた。近隣諸国はイスラエルの神の強大さに恐れをなし、あえて攻め入るものがなかった。反対に攻め滅ぼされるのではないかという恐怖をいだいた。

30 こうして神が四方に安息を賜ったので、ヨシャパテの国は穏やかであった。ユダの王と人々は、平和が神の賜物であることを体験的に知った。しかしそれを次代に継承させることは容易ではない。だから歴史は繰り返すのかもしれない。

聖書 歴代下20・13〜30

タイトル ヨシャパテ王

暗唱聖句 これはあなたがたの戦いではなく、主の戦いだからである。

く、主の戦いだからである。

歴代下20・15

目標 ベラカの谷の勝利の秘訣をさぐる。

導入 (松浦み)

本日は、アサ王の子ヨシャパテ王について学びます。副教材として、王の系図を図式化し、お話をすると理解しやすいでしょう。

6代目 ヨシャパテ王

病死したアサ王の後継者となったのは、その子ヨシャパテでした。「主はヨシャパテと共におられた」(歴代下17・3)と記されているように彼は父王アサと同じように、神に寄り頼んでユダ王国を治めました。彼のした第一のことは、アシラ像など偶像と、偶像礼拝の場所を取り除くことでした。第二に、ヨシャパテ王は、国の指導者、レビびと、祭司たちを用いて、ユダの国中の町々を巡回させて、主の律法を教えさせました。第三に、ヨシャパテ王は、ユダの国中の町ごとに裁判人を置いて、正しい裁きが行われるようにしました。その結果、周囲の国々は、主を恐れてヨシャパテと戦うことをしませんでした。国は安定し、人々は王と共に神を恐れて平和な日々を過ごしていました。

試練の中で日頃の信仰が試される

ある時、試練のように戦いが外から仕掛けられてきました。「海の向こうのエドムからおびただし

い大軍があなたに向かって攻めてきました」と王に告げる者がいました。突然の知らせに驚いた王は、「大変なことになった!」と恐れつつも、すぐさま主に助けを求め、ユダ全国に断食を布告しました。するとどうでしょう。日頃から律法の教えを聞きつつ歩んでいたユダ国の人々は、町中から出てきて、主の助けを求めました。

主の宮の新しい庭の前でヨシャパテ王はユダとエルサレムの会衆の中に立つてこう祈りました。「われわれの神よ、われわれはこのように攻めて来る大軍に当たる力がなく、またいかになすべきかを知りません。ただ、あなたを仰ぎ望むのみです」。会衆の中には、幼な子、妻、および子どもたちもいて、家族ごと主の前に立つて祈ったのです。すばらしい信仰の姿ですね。常日頃から言葉に蓄えて生活をするならば、試練のときも迷わず主を求めることができるのです。私たちも事あるごとに教会に行つて祈る、家族そろつて主を信じる、そんな歩みをしたいものですね。

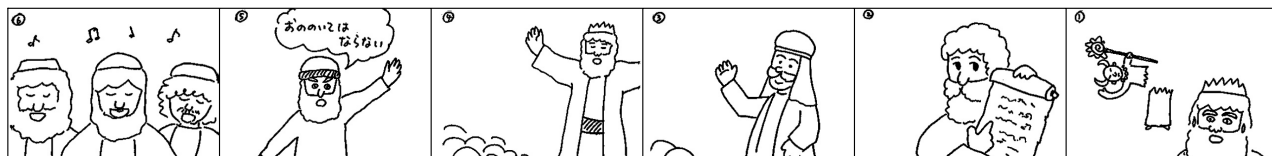
賛美は力

ヨシャパテ王が人々と主の前で祈っている時、会衆のひとりでレビびとヤハジエルに主の霊が臨みました。彼は「ユダの人々、エルサレムの住民、ヨシャパテ王よ、聞きなさい。主はあなたがたにこう仰せられます。『この大軍のために恐れてはならない。おののいてはならない。これはあなたがたの戦いではなく、主の戦いだからである。この戦いには、あなたがたは戦うには及ばない。あなたがたと共におられる主の勝利を見なさい。主はあなたがたと共におられるからである』』と言いました。この預言の言葉に励まされて、王も民も主

の前に伏して、主を礼拝したのです。それと共に、ある人々が立ち上がり、大声でイスラエルの神、主を賛美しました。ヨシャパテ王は、次の朝早く戦いに出て行くとき、あなたがたの神、主を信じなさいと励ますと共に、軍隊の前には、聖なる装いをした人々を進み行かせ、主に向かって歌をうたい「主に感謝せよ、そのいづくしめは絶えることがない」と言わせました。彼らが賛美し始めたとき、ユダ王国に敵対する連合軍は打破られ、最後には仲間の同士討ちで全滅してしまいました。ユダの人々はベラカの谷に集まり、主が勝利を与えてくださったことを感謝し、主をほめたたえました。戦いの谷はベラカ(祝福)の谷と変えられたのです。エルサレムに帰った後も人々は主の宮に集まり、堅琴、ラツパと共に主をほめたたえました。マルチン・ルターは、賛美は悪魔の軍隊をけちらす神の進軍ラツパであると言ったそうです。賛美は力ですね。

M子さんは幼い頃の思い出を忘れることはできません。M子さんの両親は共に結核という病気で長い間入院していたので、祖父母の家で育てられました。ある時、さびしくて、こわくてどうしようもない気持ちで震えていました。そんな時、ふと日曜学校で習った歌が思い出されて小さい声で口ずさみました。「ただ一人、野原を歩いている時にも、イエス様は私の力です、城です」。歌っているうちに神様の力が注がれて、心から不安が消えて、心が明るくなった体験をしました。賛美は力です。賛美しながら歩む者になりましょう。

♪ハ、ハ、ハレルヤ♪ (リビングプレイズー)



聖書 列王下19・1～19 テーマ ヒゼキヤ王の態度

序論

(鎌野)

ヨシヤパテ王の死後、南ユダ王国でも北王国と同様に悪王が続いた。そして約120年がたち、南王国15代目の王となったのが、今週学ぶ善王ヒゼキヤである。彼は「先祖ダビデがおこなったように主の目になう事を行」った(18:3)。しかしこの頃、中近東一円にその勢力を拡大していたアッシリヤ帝国はまず北王国を滅亡させ(紀元前722年頃)、その後、南王国にも迫ってきた。そして將軍ラブシャケを南王国につかわし、圧倒的な軍事力を背景に、無条件で降伏するように言い渡したのである(以上の詳細は18章を参照)。この国家的危機の中でヒゼキヤ王がとった態度を学び、彼の信仰がどんなものかを探ってみよう。

一、預言者に対する態度

ラブシャケの言葉を聞いたヒゼキヤは、「衣を裂き、荒布を身にまとい」その苦しみを表し、祈るために主の宮に入った。また、信賴する人々を預言者イザヤにつかわして、「祈をささげてください」と懇願した。ヒゼキヤは、この危機的状況の中で最も必要なのは祈りであると確信していたからこそ、自分で祈るだけでなく、預言者にも要請したのだ。「胎児がまさに生れようとして、これを産み出す力がない」というのは、胎児にとっても母親にとっても非常に危険な状態である。彼は王のプライドを捨て、預言者に祈りを求めた。

神はそのような謙遜な者に答えられる。イザヤは祈りの中で神の言葉を聞いた。それは、①アッシリヤ王が一つのうわさによつて国に帰り、②自分の国でつるぎに倒れることである。①は、エチオピア王侵攻の風聞(9節)を予告するものであったし、②は王の予らによるクーデターによつて文字通り成就した(36～37節)。ヒゼキヤは、神の御旨を自分に伝えてくれる預言者を深く信賴していた。彼の信仰を示す一面である。

二、敵に対する態度

ラブシャケは、前の章の末尾で、傲慢にも「主がどうしてエルサレムをわたしの手から救い出すことができる」と言ったが、ヒゼキヤは「彼に答えてはならない」と命じていた。それが「生ける神をそしった」言葉であり、「主はその聞いた言葉をとがめられる」方であると確信していたからである。さらにアッシリヤ王は、エチオピア王の攻撃に備えるため、早く南王国を降伏させておきたいので、再度使者をつかわし、過去に占領した国々の例をあげて「その国々の神々は彼らを救ったか」と豪語し、降伏を迫った。

ヒゼキヤは、敵の力がどれほど強いかわっていた。それで最初は大量の銀を貢ぐことによつて攻撃を避けようとした(18:14～15)。それでも敵は向かってくる。彼はもはや自分の力で敵に対応できないことを認めざるをえなかった。信仰とは、自分の力の限界を知ることである。そのときこそ、自分の力で敵にあたるのではなく、神に委ねることができるようになる。

三、神に対する態度

ヒゼキヤは使者がもつてきた手紙を携えて主の宮に行き、主の前にひろげて祈った。その祈りは、「地のすべての国のうちで、ただあなただけが神でいらせられます」という言葉に集約されるだろう。確かに、多くの国々はアッシリヤ王に滅ぼされた。それは、彼らの信じる神々が「人の手の作ったもので、木や石だから」である。しかし「天と地を造られた」あなたは、今、この祈りに「耳を傾けて聞いて」くださり、この手紙を「目を開いてごらん」くださる方だ。だから「われわれを彼の手から救い出してください」。(そうすれば地の国々は皆、主であるあなただけが神でいらせられることを知ることになる)。

ヒゼキヤは、主なる神だけが今も生きておられる真の神であるから、自分たちを救い出せることを確信していた。彼のこの態度こそ信仰の表現である。神はその信仰にこたえて、イザヤを通して21～34節の預言を与えられた。そして「その夜、主の使がでて、アッシリヤの陣営で18万5千人を撃ち殺した」(35節)。奇跡的な大勝利だった。

結論

私たちに、この信仰はあるだろうか。聖書の言葉こそ、現代の預言者である。祈りをもつてみ言葉を読む態度は養われているか。私たちの直面する問題を、自分の力では解決できないことを認め、今も生きておられる全能の主に寄り頼もう。謙遜に祈り求めるなら、主は不思議な方法で大勝利を与えてくださる。

研究資料

(石田)

ヒゼキヤとは、「主はわたしの力」という意味。25歳で即位し、54歳まで29年間、国を治めた。ユダ王国中興の祖とも言うべき敬虔、かつ知略に富んだ王であった。アッスリヤの侵略とその將軍ラブシャケとのやり取りは、イザヤ書36章に詳しい。

テキスト

1 ヒゼキヤ王はこれを聞いて、衣を裂き、荒布を身にまとい主の宮に入り アッスリヤの將軍ラブシャケが、イスラエルの神、主を冒瀆する言葉を聞いて義憤を覚えた。その気持ちをそのまま主の前に訴えようとした。ヒゼキヤは事あるごとに主の宮に走り込んで祈るという敬虔の訓練を身に付けていたようである。彼はまた、国難に際して、重臣たちと共に国全体の悲しみと責任を担おうとしている。リーダーシップの鑑である。

2 アモツの子預言者イザヤのもとにつかわした

このときすでに北王国イスラエルはアッスリヤに滅ぼされ、ユダもエルサレム以外の都市は陥落して、風前の灯であった。王は重臣を遣わして、滅亡から救われることを祈るように懇願した。王が預言者に頼り、また自ら祈りに専念したことは大正解であった。

4 この残っている者のために祈をささげてください ヒゼキヤの言葉には、以下の内容がある。

①国は難産で子どもが死に瀕しているような状況である、②イザヤの神が敵によって侮辱されている、③イザヤを信頼して祈りを要請している。

6 わたしをそしった言葉を聞いて恐れるには及ばない ヒゼキヤは、主の名が汚されることは、国や自分が辱められることと感じた。それほど主に熱心であったということである。

7 見よ、わたしは一つの霊を彼のうちに送って、一つのうわさを聞かせ、彼を自分の国へ帰らせて、自分の国でつるぎに倒れさせるであらう 主の答えは速やかであり、明快であった。主はすでにユダの解放と勝利、そしてアッスリヤ王の暗殺を予告している。翌日には、アッスリヤ軍18万5千人は、疫病のため全滅した(35)。一つのうわさとは、エチオピア軍の北上のこと。アッスリヤ国内の反乱であるという説もある。事実アッスリヤ王は、息子たちに暗殺された(37)。

11 あなたはアッスリヤの王たちがもろもの国々にした事、彼らを全く滅ぼした事を聞いている アッスリヤの王と將軍は、エチオピアの大軍が自分たちを攻めようと北上しているという噂を耳にしたので、エチオピアとユダにはさみ撃ちされなため、また戦力を消耗させないため、ユダを降伏させようと急いだ。

12 その国々の神々は彼らを救ったが ユダを憐れみ、降伏を迫っている。この言葉の背後には、戦争の勝敗は、その国を守護する神の力の強弱によるという古代一般の思想がある。ヒゼキヤは、主なるまことの神が、偶像神と一緒にされたことに義憤を感じた。

14 ヒゼキヤは使者の手から手紙を受け取ってそれを読み、主の宮にのぼっていった、重臣たちと小田原評定に明け暮れたのではなく、神殿に走り

込んで祈りに専念した。三十六計祈るに如かず、である。主の前にそれをひろげ 王は、敵の手紙を主の前に広げて見せるという行動によって、自分の祈りの切実さを表現している。(空の財布を広げて経済のために祈ったというクリスチャンの証も聞く)。

15 イスラエルの神、主よ、地のすべての国のうちで、ただあなただけが神でいらせられます これはラブシャケが主の名を冒瀆したことに対しての言葉である。王は、主なる神が栄光に輝くイスラエルの神である、天地創造の唯一の神である、生きている神であることを賛美して祈っている。

16 主よ、耳を傾けて聞いてください。主よ、目を開いてください。もちろん、ヒゼキヤは神には聞こえているし、見えていることがわかっているが、切迫した状況の中で、切実な祈りとなっている。セナケリブが生ける神をそしるために書き送った言葉をお聞きください アッスリヤは、わが国ではなく、あなたを敵に回したのですと神に訴えている。

18 それらは神ではなく、人の手の作ったもので、木や石だから滅ぼされたのです 唯一まことの生ける神と、偶像の死んだ神との根源的な違いを際立たせている。

19 そうすれば地の国々は皆、主であるあなただけが神でいらせられることを知るようになるでしょう 王はグローバルな視点で、主の御名が異邦人に畏れ敬われることまで願っている。主の霊のとりなしによる祈りであらう。

聖書 列王下19・1〜19
タイトル ヒゼキヤ王
暗唱聖句 主よ、地のすべての国のうちで、ただあなただけが神でいらせられます。列王下19・15

目標 国の危機の時のヒゼキヤ王の姿から教えられる。

導入

(松浦み)

ヨシヤバテ王の死んだ後、15代目の王となったのが、ヒゼキヤ王です。その頃、アッシリヤ帝国が勢力を広げ、二つに分裂していた北イスラエル王国はアッシリヤに滅ぼされてしまいました。南ユダ国はアハズの子ヒゼキヤが王となりました。

15代目 ヒゼキヤ王

ヒゼキヤ王は先祖ダビデ王のように、神様に信頼し、神様に従う良い王でした。主が共におられたので、ヒゼキヤが戦いに出かけると、いつも主が勝利を与えてくださったので、堅固な町を築いていました。ところが、ヒゼキヤ王の14年目のことです。北王国を滅ぼしたアッシリヤの王セナケリブが南ユダ王国にも攻め上って来ました。それだけでなく、將軍ラブシャケをつかわし、ヒゼキヤ王にアッシリヤへの全面降伏を迫り、こう言うのです。「アッシリヤの王はこう仰せられる。『わたしと和を結び、私に降参せよ。そうすれば、豊かな生活が保証されるのだ』。国々のすべての神々のうち、だれが自分たちの国をアッシリヤの王の手から救い出しただろうか。イスラエルの神であ

ろうと、ごこの国の神であろうと同じことなのだ」と挑戦してきました。ヒゼキヤ王は民衆に、どんな言葉を聞いてもひと言も答えてはならないと命じました。それは、ヒゼキヤが大きな信仰の決断をもって主のために立ち上がり、アッシリヤに降伏する道を拒んだからです。

絶体絶命のピンチに立たされる

そう言うものの現状のヒゼキヤ王の姿は、巨人の前になすすべを知らない人のようでした。丁度、かまきりが、迫ってくる列車に向かって力マを張り広げるような姿でした。

ヒゼキヤ王はすぐ王服を脱ぎ捨て、自分の衣を裂き、荒布をまとって主の宮に行きました。それと共に、家来たちにも自分と同じように荒布をまとわせ、預言者イザヤの所に急使として遣わしました。「イザヤ先生、大変です。国は危機に陥っています。どうぞ私たちのために祈ってください」。すると、イザヤは主の言葉を伝えました。「アッシリヤ王の家来たちが私をそしった言葉を聞いても恐れるな。私はアッシリヤに、ある一つのうわさを聞かせ、彼を自分の国に帰らせ、彼は自分の国で殺される。だから、恐れるな」。その主の言葉のとおり、ラブシャケは引き返して行きました。しかし、アッシリヤ王は再び使者に手紙を持たせ、ヒゼキヤ王に挑戦してきました。「あなたは、エルサレムはアッシリヤの手に陥ることはない、と言うあなたの信頼する神にごまかされるな。そんなことはあり得ないのだ。国々のどの神もアッシリヤを負かすことはできなかった。だから、おまえの信頼する神も同じだ。無力な神に頼る愚かを知れ!」。このような激しい言葉をもって迫ってきた

ので王は絶体絶命のピンチに立たされたのです。

その時、王は手紙を携えて、迷わず心を定め、主の宮にのぼって祈りました。「イスラエルの神、主よ。あなたは天地を造られた方、地のすべての国のうちで、ただあなただけが神です。主よ、目を開いてご覧ください。耳を傾けて聞いてください」と。ヒゼキヤ王は、使者からの手紙を主の前に広げて祈ったのです。さらに、「主よ。アッシリヤの王たちが国々を滅ぼし、その神々を火に投げ入れたことは事実です。それらは神でなく、人の手の作ったもので木や石だから滅ぼされたのです。われわれの神、主よ、どうぞ、われらを救ってください。そうすれば国々は、あなただけが神であることを知るでしょう」。王の必死の祈りに神は応えられ、その夜、神の使いが出て、アッシリヤ陣営の18万5千人を撃ち殺し、アッシリヤ王は立ち去りました。神様への祈りの大勝利ですね。

マザー・テレサの映画を見ましたか。その中でこんな場面がありました。一人の女性がマザーの働きに加わるためにインドに渡ってきました。しかし、体調をくずし働けません。マザーは帰国を勧めるのですが、ここにいさせてくださいと懇願するのです。そのとき、マザーは、「私の働きの武器は祈りです。あなたは祈る奉仕に専念してください」と頼みました。ある時、マザーの働きが暗礁に乗り上げ道が閉ざされてしまいました。すぐさまマザーはあの女性に連絡し祈りを要請するのです。まもなく道が開かれ事業を再開できました。祈りこそ困難を打ち砕く最強の武器ですね。

♪こころをつくして♪ (教会学校せいしか110)



聖書 列王下22・1～20 テーマ ヨシヤ王の改革

序論

(鎌野)

ヒゼキヤ王の死後、王位を継承した子マナセはまれに見る悪王で、偶像の神々や天の万象のための祭壇を主の宮に設け(21・3～7)、その悪政は55年も続いた。その子アモンも父と同じ道を歩んだが、治世2年目に家来に暗殺された。その後を継ぎ、紀元前640年、8歳で即位したのが、18代目の王ヨシヤである。彼は「主の目になう事を行い、先祖ダビデの道に歩んで右にも左にも曲らなかつた」(このように記されるのは、ヨシヤ王が最後であることに注意)。特に、治世の18年目から始まった宗教改革は、10年余り、この国に信仰復興(リバイバル)をもたらした。そのきっかけになつた3つの出来事に目をとめよう。

一、律法の書の発見

ヨシヤ王は、26歳になつたとき、主の宮の修復を思ひだした。マナセとアモンの2代にわたる悪政で、宮はかなり荒れていたのである。修復の資金として、宮に置かれていた箱の中に人々が献げた銀が用いられ(12・9～16参照)、久しぶりに開けられた箱から銀が取り出された。そのとき、箱の底から一つの書物が発見されたのである。これこそ律法の書だつた。悪王マナセの時代に、この巻物が燃やされることを恐れた心ある人が、隠していたのかもしれない。この発見は決して偶然ではない。深い神の摂理があつた。

書記官がその書を読んだとき、王は自分の衣を裂いた。「われわれの先祖たちがこの書物の言葉に聞き従わず、すべてわれわれについてしるされてゐる事を行わなかつたために、主はわれわれにむかつて、大いなる怒りを発しておられる」と思つたからである。祖父も父も悪王だつたことから推測すると、ヨシヤはそれまで律法の書を読む機会がなかつたのかもしれない。そんな王が、例えば申命記28章などを聞いたなら、主の怒りを実感するのは当然だ。彼はすぐに行動をとつた。

二、預言者の尊重

王は自分の側近5名を(女預言者ホルダ)につかわした。彼女の夫は王室か宮の関係者の(衣装べやを守る者)だつたので、彼女はよく知られていたのである。有力者が多数、一介の平民の妻のところ意見伺いに行くとは、通常では考えられないことである。しかし、これこそヨシヤ王の信仰を示す行動だつた。彼は王としての権威を振り回すことなく、神の御旨を教えてくれる預言者を尊重し、謙遜にその助言を求めたのだ。これは、すでに学んだヨシヤパテ王やヒゼキヤ王にも共通して見られたことである。

預言者ホルダは、齒に衣きせることなく、主の言葉を伝えた。「わたしは、災いをこの所と、ここに住んでいる民に下そうとしてゐる。わたしはこの所にむかつて怒りの火を発する」。その原因は、ひとえに真の神を捨て、偶像の神々を礼拝したからにほかならない。5名の側近は、このことを正直に王に報告した。

三、み言葉への服従

ホルダの預言には、後半部があることに注目したい。それはヨシヤ王に対するものだつた。律法を聞いたとき、「あなたは、心に悔い、主の前にへりくだり、衣を裂いてわたしの前に泣いたゆえ、わたしもまたあなたの言うことを聞いた」という言葉は、王に大きな励ましを与えたことだろう。だが、「あなたは、わたしがこの所に下すもろもろの災を目に見ることはない」との言葉は、王に平安を与えたのだろうか。王が自分だけのことを考えていたなら、そうかもしれない。

しかし、これ以後の王の行動は民を悔い改めに導くものだつた。王は、主のみ言葉に服従し、次章に記されているように、次々と宗教改革を行つていった。まず民にも律法を読み聞かせ、主に従うとの契約に加わらせた。次に様々な偶像を打ち砕き、祭壇をこわした。また古い師なども取り除いた。王は、民が悔い改めるなら、主はその怒りをおさめられると期待していたに違いない。

でも残念ながら、この改革はヨシヤ王が戦死した後挫折した。彼の後継者たちはまたしても主の目の前に悪を行ひ続けたのだ。その結果、ヨシヤの死後20年余りで、南王国はバビロニア帝国に滅ぼされることになる。

結論

主の目になう事を行うか。行わないか。それは私たち一人一人が決断すべきことである。聖書のみ言葉を聞き、教会での説教を聞いただけで終わってはならない。それに従うことが重要なのだ。

研究資料

(石田)

テキスト

1 ヨシヤは八歳で王となり ヨシヤは、その誕生する30年も前から名前が挙げられ、宗教改革者として預言されていた(列王上13・2)。

2 ヨシヤは主の目にかなう事を行い、先祖ダビデの道に歩んで右にも左にも曲がらなかった 先祖ダビデの道とは、主なる神を畏れ敬いつつ、まつりごとを行うことである。「ヨシヤのように心をつくし、精神をつくし、力をつくしてモーセのすべての律法にしたがい、主に寄り頼んだ王はヨシヤの先にはなく、またその後にも彼のような者は起らなかった」(23・25)と賞賛されている。エレミヤは彼の死を悼んで歌を作ったとされている(歴代下35・25)。彼は治世8年目の16歳で回心し、12年の20歳のとき、国中の偶像とその祭壇を破壊した(歴代下34・2〜8)。このきっかけが何であったかは記されていないが、禁教下も信仰を保ち続けた老臣が宮中にいて、青年王を導いたのかもしれない。あるいは同世代の預言者エレミヤの力か。

5 宮の破れを繕わせなさい ヨシヤは治世18年の26歳のとき、主の神殿の修復を命じた。神の家を思う熱心には、並々ならぬものがあった。

8 わたしは主の宮で律法の書を見つけました 定冠詞がついており、「あの律法の書」という意味合いになるので、モーセ五書(トーラー)を指していると思われる。これは神殿に大切に保管されていた律法の写しで、聖所が汚される前に心ある祭司によって隠されたものかもしれない。マナセ、

アモンの二代にわたる背信の後(マナセは晩年に悔い改めるが。歴代下33・12、13)、約60年ぶりに発見された。大祭司ヒルキヤの言葉にはその驚きと感激がある。

11 王はその律法の書の言葉を聞くと、その衣を裂いた ヨシヤ王は、このときまで律法の書(聖書)を見たことがなかったと思われる。父、祖父の偶像礼拝によって、主の裁きは避けられないとの聖書の言葉に、衣を裂いて真剣な悔い改めの心を表した。具体的には申命記28〜30章ではないかと考えられている。

12 祭司ヒルキヤ、アヒカム、アクボル、書記官シャパン、王の大臣アサヤ 彼らは祭政一体のユダ王国における、王の信頼する側近たちである。アヒカムは命を張ってエレミヤの命を救い(エレミヤ26・24)、その子ゲダルヤは預言者エレミヤを保護し、エルサレム陥落後はバビロン王よりユダ州の総督に任命されている。

13 われわれの先祖たちがこの書物の言葉に聞き従わず、すべてわれわれについているされている事を行わなかったために ヨシヤ王は先祖の背信がいかに深刻な結果を子孫に及ぼすか、その罪の結果を負わされていることを知った。主はわれわれにむかって、大いなる怒りを発しておられる。主の大いなる怒りは、何世紀にもわたって、忍耐に忍耐を重ねてきた末のことである。ヨシヤ王は律法の書の言葉が、直接自分と国に向けて語られていることを真剣に受け止めた。彼は聖書が現在の自分に適用される神の言葉であることを受け入れていた。

14 シャルムの妻である女預言者ホルダ 女性の預言者は多くはないが、時代の節目に用いられている。ミリアム(出エジプト15・20)、デボラ(士師記4・4)、ノアデヤ(ネヘミヤ6・14)、など。重臣たちがどういう理由でホルダのもとに遭わされたのかは記されていないが、彼女がすでに預言者として名前が知られていたことは確かだろう。夫のシャルムは、祭司、あるいは王の衣装部屋を管理する役人だから、神殿や王宮での信用がものを言ったのかもしれない。王はこの女預言者の言葉を真剣に受け入れる謙遜さがあつたと言うべきだろう(23・1)。

16 わたしはユダの王が読んだあの書物のすべての言葉にしたがって、災をこの所と、ここに住んでいる民に下そうとしている 神は聖書の言葉を通して、現実生き働こうとしておられる。

20 わたしがこの所に下すもろもろの災を目に見ることはないであろう もろもろの災いとは、エルサレムの陥落とバビロン捕囚のことである。ヨシヤ王はその忠信の報いとして王国の破壊を見ないで済んだが、先代のマナセ、アモン、後代のエホアハズ、エホヤキム、エホヤキン、ゼデキヤの背信と悪政の罪は累積して、ついに救われることができないまでになった(23・26、歴代下36・16)。こうしたヨシヤの忠信と善政にもかかわらず、その死後20年でユダ王国は滅亡する。

参考図書 『旧約聖書講解(上)』、『実用聖書注解』、『キリスト者学生会聖書注解』、『新聖書注解』、『新聖書辞典』、『小島伊助全集(第6巻)』など。

聖書	列王下22・1〜20
タイトル	ヨシヤ王
暗唱聖句	ヨシヤは主の目になう事を行い、先祖ダビデの道に歩んで右にも左にも曲らなかった。
目 標	列王下22・2 ヨシヤ王の時代のリバイバルにならう。

導入 (松浦み)

ヒゼキヤ王の死んだ後、王となったマナセやアモンは主の目の前に悪を行い、主の道を歩みませんでした。アモンの子ヨシヤが18代目の王となりました。

18代目 ヨシヤ王

ヨシヤ王は先祖ダビデ王のように、神様を信じ主の目になう事を行い、右にも左にも曲がらなかった王でした。ヨシヤが王になったのは8才で、31年間国を治めました。父も祖父も神様に従わない王であつたにもかかわらず、ヨシヤがどのようにして神様に信頼するようになったのか聖書に記されていないのでわかりません。しかし、歴代下33・21〜25を見ると彼の父は24才で亡くなっています。母子家庭で育てられた彼は、母が信仰深い人だったかもしれませんね。彼はまれに見るすばらしい少年でした。16才の時、ヨシヤは信仰に目覚め、先祖ダビデの神を求め始めました。そして、自分は初代の王ダビデのように、神を恐れ、神に喜ばれる王として歩むのだという自覚と使命が与えられたのです。20才の時、ヨシヤはユダ國中の偶像

を打ち砕き、偶像礼拝の場を取り除いてユダとエルサレムをきよめました。26才になった時、彼は主の宮の修復を思い立ちました。宮の修理の工事資金として、宮の箱の中に保管されていた銀が取り出され、大工や建築士、石工に手渡されました。彼らがその資金で宮を繕う材料を買ったためでした。

思わぬ発見

彼らが銀を取り出したとき、一つの書物を発見しました。それを見たとき、大祭司ヒルキヤは驚きの声をあげました。「わたしは主の宮で律法の書を見つけました」と。さっそく書記官シャパンに手渡し、王の前でその書を読みました。ヨシヤ王は、その律法の言葉を聞いた時、すぐさま自分の衣を裂き、神の前に悔い改め、神を恐れて大祭司や書記官に命じました。「行って、この見つかった書物の言葉について、主のみこころを求めなさい」。また、彼は「われわれの先祖たちがこの書物の言葉に聞き従わず、すべてわれわれについて記されている事を行わなかったために、主はわれわれにむかって大いなる怒りを発しておられるからです」と言いました。

預言者の声に耳を傾ける王

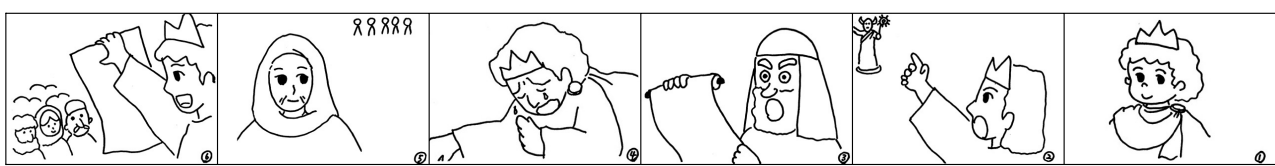
ヨシヤ王は主の前に出て、自分自身のため、民のため、ユダ全体のために、神の深いあわれみを求めました。彼は神の激しい怒りを実感し、改めて罪の自覚が与えられました。み言葉に映し出された自分たちの真実の姿を見せられ、彼の胸には信仰復興の篤い思いが満ちてくるのでした。彼はリバイバルの器と変えられて国を治めました。王は命じて、側近5名を女預言者ホルダのもとに遣わしました。エルサレムの下町に住んでいた預言

者ホルダは、ヨシヤ王に適切に神のみ心を説き明かしました。「民が神を捨て偶像礼拝に走り、神を怒らせた結果、神のみ心は、災いをこの地と民に下し、消えることのない怒りの火を発する」と。それと共に、ヨシヤ王に対しては、「あなたは律法を聞いた時、心に悔い、主の前にへりくだって衣を裂き、わたしの前に泣いたゆえ、わたしもまたあなたを顧み、あなたは安らかに墓に葬られ、わたしがこの地に下すもろもろの災いを目に見ることはないであろう」と、告げました。ヨシヤ王は、人々に熱心にみ言葉を読み聞かせ、心をつくし、精神をつくして主の戒めとおきてを守り、主に従うように導きました。ヨシヤ王もユダの人々も自分たちの罪を一つ一つ数えるようにして悔い改め、神を恐れて生きる者へと変えられて行き、リバイバルのわざがユダ王国になされていったのです。

私たちの住む世界

私たちの世界はどうでしょうか。人々は神様に目もくれず、自分勝手な生活をしています。毎日、新聞やテレビのニュースでは、目や耳を覆いたくなるような事件が次々と起っています。小学生が友だちを殺したり、中学生や高校生が様々な事件を起こしています。悲しいことですが、私たちはこんな現状から、目をそらしてはいけません。「悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武器で身を固めなさい」(エペソ6・11)と教えられているように、み言葉に堅く立ち、神様の守りと助けを祈り求めましょう。ヨシヤと同じく、神様の喜ばれる道を選び取って歩みましょう。

(教会学校せいか82)



聖書 列王上18・30〜40

テーマ エリヤ

序論

(鎌野)

先月学んだ王たちのうち、後半の3人はみな、預言者と関わりをもっていたことに気づかれただろうか。その延長線上で、今月は「信仰を導いた預言者」という単元のもと、3人の預言者に焦点をあてる。まず今週学ぶエリヤと来週のエリシャは、先月扱わなかった北王国の王たちに神の御旨を語った預言者である。ヨシヤパテが南王国を治めていた紀元前9世紀の中頃、エリヤは、偶像を崇拜していたアハブ王に、神が干ばつという裁きを下されることを宣告した。3年間雨がなかった後、エリヤはアハブ王のもとに現れ、バアル礼拝の中心地だったカルメル山上で、王が信じていた偶像バアルの預言者と対決した。ここに描かれているエリヤの姿の中に、信仰とはどのようなものが3つの面で示されている。

一、謙遜な悔い改め

エリヤは、切り裂いた供え物の牛をたぎぎの上に載せ、集まった民に「火をもって答える神を神としましょう」(24節)と言った。バアルの預言者も同意し、まず彼ら450人が朝から夕方までバアルの名を呼んだ。答えがないので、自らを傷つけて踊ったけれども、火はくだらなかった。

次はエリヤの番である。彼は最初に、「こわれている主の祭壇を繕った」(バアルの預言者が造った26節の祭壇とは別で、偶像崇拜の影響によって長

く顧みられていなかった祭壇であろう)。また、「ヤコブの子らの部族の数にしたがって十二の石を取り、その石で主の名によつて祭壇を」築いた(『新聖書注解』は、これは修復した祭壇と同じものであると説明している)。エリヤは、それまで主の祭壇がおろそかにされていたこと、また本来は一つであるはずの12部族が南北両国に分裂していることを悔い改めて、このことをしに違いない。真の信仰者には、たとい国の罪であっても、それを悔い改める謙遜さがある。

二、強固な信頼

エリヤは、祭壇の周囲にみぞを作った。(種二セヤ)(約15リットル)を時々(単に入れるのではなく)ほどの溝となると、深さも長さも相当あったと思われる。そして、バアルの預言者に命じて、たぎぎと牛を載せた祭壇の上から、かめ12杯分の水を注がせたのである。かめの大きさによつて違いはあるが、多量の水だったことは間違いない。近くに干上がりかけた池でもあったのだろうか。水はたぎぎや牛をびっしり濡らし、またみぞの中にも満ちた。

エリヤがこんな奇妙なことをしたのはなぜか。こんな状態では、たぎぎや牛が燃えるはずはないことを、バアルの預言者や民に示すためだったと思われる。神が介入されて、超自然的なことが起こらない以上、不可能なのだ。そこには、神に強固な信頼をおいていたエリヤの姿が表れている。全能の神を信じていたからこそ、エリヤはこのような行動をとることができた。

三、熱心な祈り

その後エリヤは、「アブラハム、イサク、ヤコブの神」と祈り始めた。(ヤコブの神)は、原語では「イスラエルの神」である(新改訳、新共同訳参照)。北の10部族だけでなく、イスラエルの全12部族の神である。さらに、「主よ、わたしに答えてください、わたしに答えてください」と、その切実な願いを表すために、二度も繰り返す。祈りに答えて火がくだるなら、この民は、「あなたが神であること」を知り、また、あなたが(彼らの心を翻された)ことを知るからである。

エリヤは謙遜に悔い改め、また主が火を下される神であると信頼してはいたが、それでも熱心に祈ったことを忘れてはならない。信仰があれば、祈らなくてもやっていけるといえるのは、全くの誤解である。信じているから祈るのだ。主のみわざは、祈り求めるときに現される。確かに、エリヤが祈った(そのとき主の火が下って燔祭と、たぎぎと、石と、ちりとを焼きつくし、またみぞの水をなめつくした。民は皆見て、ひれ伏して言った、「主が神である。主が神である」)。

結論

「エリヤは、わたしたちと同じ人間であった」(ヤコブ5・17)。私たちの周囲にも偶像の神々を信じている人々がたくさんいる。でもエリヤのように、彼らを恐れず、悔い改めと信頼とをもって熱心に祈ろう。私たちの信じる神は真の神であるから、必ず祈りに答えて、驚くべき方法で主が神であることを示してくださる。

研究資料

(石田)

テキスト

18、19 イゼベルの食卓で食事する者たち アハブ王の妻イゼベルは、主の預言者たちを殺した上に(4)、バアルの預言者450人、アシラの預言者400人を雇い、養っていた。

20 預言者たちをカルメル山に集めた カルメル山には、主の祭壇が築かれていたが、バアル礼拝が盛んになると、その祭壇も築かれるようになった。偶像の預言者との決戦にはふさわしい所。

21 いつまで二つのものの間に迷っているのですか イスラエルの民に、主なる神に従うか、偶像に過ぎないバアルやアシラに従うかの選択を迫る。彼らは、主なる神にも、偶像にも未練があり、どっちつかずの状態であった。民はひと言も彼に答えなかった。潔く主なる神だけにひれ伏すことができないでいる。

22 わたしはただひとり残った主の預言者です エリヤはまだ知らなかったが、実は主の預言者7千人が主によって隠されていた(19・18)。しかし、エリヤが一人で千人もの敵に立ち向かっていたのは事実である。神の召しでもあるが、それに対して勇敢に答えることができたのは彼一人であったのかもしれない。

24 火をもって答える神を神としましょう 「生ける神は祈りに答えてくださる」との、エリヤの確信に満ちた言明。今も神は、信じる者の祈りに答え、聖霊の火を降しにく下さる(マタイ3・11)。

民は皆答えて「それがよからう」と言った。彼らは傍観者ではあり得ず、エリヤから二者択一を迫られ、信仰の挑戦を受けたのである。

28 彼らのならわしに従って、刀とやりで身を傷つけ、血をその身に流すに至った 自分の熱心や真面目さや献身によって神に受け入れられようとする心の表れで、形はどうあれ、行いによって義とされようとする人間的な宗教の典型を見る。

29 しかしなんの声もなく、答える者もなく、また顧みる者もなかった 偶像神は生きていないことを露呈した。「わたしたちは、偶像なるものは実際は世に存在しないこと、また、唯一の神のほかに神がないこと、を知っている」(1コリント8・4)。

30 彼はこわれている主の祭壇を繕った 主の祭壇は、バアル礼拝が盛んになったため、なおざりにされ、廃墟となっていた。あるいは積極的に破壊されたのかもしれない(19・10)。その祭壇を繕うことは、イスラエルに主なる神への信仰を復興させることの象徴的な行為。

31 ヤコブの子らの部族の数にしたがって十二の石を取り バアル礼拝によって霊的にも分裂しているイスラエルの12部族が、主なる神への信仰によってやがて一つとされることを、エリヤは預言者としてすでに見ている。

33 牛を切り裂いてたきぎの上に載せて この牛は「燔祭」つまり、全焼のいけにえとして用意された(33、38)。エリヤの捨て身の献身を込めたものでもあろう。彼は主なる神より火が降されることを信仰によってすでに見ている。四つのかめに

水を満たし、それを燔祭とたきぎの上に注げ どう考えても水びたしのいけにえに火がついて燃えることはあり得ない事態で、エリヤは自ら背水の陣を敷いたようなもの。しかし彼には信仰による勝算が十分にあった。

36、37 あなたの言葉に従ってこのすべての事を行ったことを、今日知らせてください。主よ、この民にあなたが神であること、またあなたが彼らの心を翻されたのであることを知らせてください 主なる神を離れて、偶像神に心を奪われている人々を悔い改めさせてくださいという祈り。

38 そのとき主の火が下って燔祭と、たきぎと、石と、ちりとを焼きつくし、またみその水をなめつくした 祭壇の上にあるどんな小さいものも、みぞの水までが火で燃えるという超自然的な出来事で、エリヤのより頼んだ主なる神の生きていることは、誰の目にも疑いようがなかった。

39 民は皆見て、ひれ伏して言った、「主が神である。主が神である」 少し前にはエリヤの前に沈黙していた民が、奇跡を見て主なる神への信仰を告白した。さらに火のみならず、3年半ぶりの大雨が降ったことで、エリヤの立場は立証された。

40 そこで彼らを抑えたので、エリヤは彼らをキシオン川に連れくだった、そこで彼らを殺した これは偶像礼拝を根絶するための律法に準じた行為である(申命記17・2、5)。火を呼び下したエリヤと回心した民の勢いの前に、偶像信者のアハブ王もバアルの預言者が殺されるのをなすすべもなく見ているほかなかった。この後、彼は一時的ではあるが主なる神にひれ伏している(42)。

聖書 列王上18・30〜40
 タイトル エリヤ（勇敢な預言者）
 暗唱聖句 火をもって答える神を神としましょう。
 目 標 エリヤの大胆な信仰からチャレンジを受ける。

導入

(光田)

これまで信仰に生きるというテーマで進んできましたが、今月は信仰を導いた預言者の姿を見ていきます。預言者というのは、神様からみ言葉を聞いて人に伝える御用をする人のことです。未来のことを言い当てる人のことではありません。イチロー選手はアメリカで活躍している野球界のスーパースターですが、今日は神様に用いられたスーパースター、預言者エリヤの大胆な信仰に学びましょう。

干ばつの預言

北王国イスラエルがアハブ王様の時のことです。王は后イゼベルの影響を受けてバアルを礼拝していました。バアルとは農作物の神様と言われていました。イスラエルをまことの神様に立ち返らせるために、神様は預言者エリヤを遣わされました。突然エリヤはアハブ王の前に行き、「私が再び預言をする時までイスラエルには雨も降らず、露も降らない」と神様のみ言葉を伝えました。干ばつが起こって作物ができなくなれば、バアルに力がなくなることが分かるからです。

エリヤの挑戦

それから3年後、エリヤは再びアハブ王の前に姿を現しました。預言のとおりに大変な水不足になっていたのですが、アハブ王はどつちつかずの信仰で、真剣にまことの神様に帰ろうとはしていません。そこでエリヤは、アハブ王に一つのチャレンジをします。エリヤの仕えるイスラエルの神様とバアルの神様のどちらが本当の神様であるかを対決させようというのです。カルメル山に集められたバアルの預言者は450人。これに立ち向かうエリヤはたった一人です。しかしエリヤは、まことの神様に立てられた勇敢な預言者の代表でした。エリヤの提案は「火をもって答える神を神とする」というものでした。対決の方法はこうです。別々の祭壇に、一頭ずついけにえの牛を薪（たきぎ）と共に置き、それぞれが信じる神様の名前で祈ります。人は火をつけません。直接火を下される神様をまことの神様だと認めるのです。集まった人々は皆、これに賛成しました。

天からの火

まずバアルの預言者たちからです。彼らは朝から昼まで、祭壇の周りでバアルの名を呼んで祈ったり叫んだり踊ったりしました。しかし、何も起こりません。エリヤは「バアルの神は旅行に出ていくか、それとも寝ているんじゃないか」などと嘲りました。あせったバアルの預言者たちは、剣で自分の体を傷つけるほど必死になって、バアルの神に火を下してくれるように求め続けましたが、やはり、何も起こりませんでした。

とうとう夕べの供え物の時間になり、いよいよエリヤの出番です。皆を近くに集め、イスラエルの部族と同じ12の石で、壊れていた主の祭壇を築き直し、周りに種まきをするときのような溝を掘らせました。いけにえと薪を置いてから、4つのかめに水を入れて2度、3度と水をたっぷり注がせたので、祭壇の周りまで水浸しになりました。そこでエリヤは「アブラハム、イサク、ヤコブの神、主よ、イスラエルでは、あなたが神であること、私があなたに従ってすべての事を行ったことを今日知らせてください。この民にあなたが神であることを知らせてください」と祈りました。するとどうでしょう、アツという間に天から火が下り、いけにえは勿論、石もちりも溝の水までも全部なめつくしてしまったのです。

これを見ていたすべての民は驚いて「主が神である、主が神である」とそこにひれ伏してしまいました。この後エリヤは、バアルの預言者たち全員をキシヨン川に連れて行って滅ぼしてしまいました。エリヤの神様の大勝利です。

まとめ

エリヤが信じた神様は、私たちの信じる神様です。そして御子イエス様は、十字架で死と悪魔に勝利された私たちの救い主です。むなしい偶像や、占い、まじないなど、当てにならないものに惑わされず、私たちはまことの生きておられる神様だけを信じ従い抜きましょう。

♪歌えイエスの勝利を♪ (プレイズワールド45)



聖書 列王下4・157 テーマ エリシャ

序論

(鎌野)

預言者エリシャは、エリヤの後を継ぎ、紀元前9世紀の後半から8世紀の初頭にかけて、北王国で活動した。彼もエリヤと同様、王や民に対して大胆に神の言葉を語ったが、今週注目したいのは、あちこちで「預言者のともがら」を助けていることである。「預言者のともがら」とは、当時、各地に設けられていた預言者の共同体に属する人々のことだろう。彼らはエリヤの昇天に関心をもっていたし、エリシャにエリヤの霊がとどまっていることも認めた(2・3、5、7、15)。経済的に貧しかった彼らに対して、その指導者だったエリシャが、信仰をもつて行ったことの一例が、今週のテキストに描かれている(4・38と6・1)にも別の例が記されている。

一、訴えを聞く

「預言者のともがらの、ひとりの妻」がエリシャのもとに来て、彼女の窮状を訴えた。夫の死後、借金の返済ができないので、子どもが奴隷に売られようとしているとのことである。神に仕える預言者であっても、こんな悲惨なことがあった。4章や6章の例を見ても、生活するのが大変だったことは容易に理解できる。指導者であったエリシャは、そのたびに彼らの訴えを聞いていた。神を信じて従っていても、「なぜこんな辛い事が起こるのか」と訴えたいことが時にはある。その

時、その訴えを聞いてくれる人がいることは、何と幸いなことだろうか。信徒にとつての牧師、あるいは子どもたちにとつての教会学校教師は、まさにそういう立場の人である。様々な悩みや苦しみを聞くのを嫌がってはならない。主がそうであられるように、悩む人々の話を真剣に聞いてあげることが、信仰者の大切な側面である。

二、訴えに答える

訴えを聞いた後、エリシャは彼女に「あなたのために何をしましょうか」と言った。でも彼女は、どう答えて良いかわからなかった。そこでエリシャは自分のほうから、「あなたの家にどんな物があるか、言いなさい」と尋ねた。「一びんの油のほかは、はしための家に何もありません」と言う彼女に、できるだけたくさん、「隣の人々から器を借り」、(そのすべての器に油を) つぐようにと指示したのである。女は、何が起こるか見当もつかなかっただろうが、言われたとおりに従った。しかしエリシャは、師であるエリヤが過去にしたことを知っており(列王上17・8と16)、主は同じことをしてくださると信じていた。

現代の私たちは、色々な悩みを聞いても、それに明確な答えを出せない場合が多い。人々の訴えに答えることができないと、本当に残念である。しかし、主は生きておられる。聖書が示している信仰とは、御心ならば、主は過去になされたみわざを再びなしてくださるお方であると堅く信じることに他ならない。訴えに答えるのは、自分ではなく、全能の神ご自身だからである。

三、訴えは解決される

彼女は、命じられたとおり、「子供たちと一緒に戸の内に閉じこもり、子供たちの持つて来る器に油をついだ」。後半部を忠実に訳すと、「彼らは持ち運び続け、彼女は注ぎ続けた」となる(『新聖書注解』)。エリシャは、ここでは何の働きもしていない。そしてすべての器に「油が満ちたとき、彼女は子供に「もつと器を持ってきなさい」と言ったが、子供が「器はもうありません」と言ったので、油はとまった」。彼女はその油を売って負債を払い、その残りで充分暮らすことが出来た。訴えは見事に解決したのである。

人が何もなくても、神のなさることに限界はない。もし、もつと多くの器があつたなら、油はとまらなかつたであろう。「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイ7・7)とは信仰の原則である。求めるのは物質だけではない。油は聖霊の象徴としてよく用いられることに注目したい。聖霊の実である「愛、喜び、平安」などは、私たちの求めに従って与えられることを忘れてはならない。求め続けるとき、与えられ続ける。そこにこそ、全ての解決があるのだ。

結論

エリシャはエリヤに、「あなたの霊の二つの分をわたしに継がせてください」と求めた(2・9)。信仰者には、このような霊的食欲が必要である。特に、悩みをもつ人々からの訴えに答えるため、私たちも全能の神に訴え続けよう。そして与えられたものを他の人々に分かちあおう。

研究資料

(石田)

本章には、貧しい預言者の妻、裕福な婦人、預言者たちそれぞれに、エリシャを通してなされた3つの奇跡が記されている。この他にも多くの奇跡があったことだろうが、それらの内の代表的なものが取り上げられていると考えられる。奇跡を行うことは、預言者としての必要条件ではないが、エリヤもエリシャも奇跡の賜物を与えられていた。それは目に見えない神が確かに生きておられることを示す方法の一つである。それはまた、彼がエリヤの正統的な継承者であることを裏付けてもいる。エリヤがバプテスマのヨハネなら、エリシャは主イエスのひな形である。今やエリヤは昇天し、エリシャがその跡をついで預言者活動を始めた。

テキスト

1 預言者のともがら アハブ王によって主に従う者は一掃されたかのように見えたが、野に隠れていた者が7千人もいた(列王上19・18)。彼らはエリヤの宗教改革とアハブ王の死によって復権し、エリシャの指導の下で預言者活動を行う者も出てきた。彼らは必ずしも権力者の保護や支援を受けていたわけではなく、家業を持ちながら活動を行っていたので、経済的な困難に陥ることもあり得た。今、債主がきて、わたしのふたりの子供を取って奴隷にしようとしているのです この婦人は夫に先立たれて経済的支柱を失っただけでなく、頼みとするふたりの子どもまで借金のかたに奴隷として売られようとしている。あなたのしもべで

あるわたしの夫が死にました 死んだ預言者は、主とエリシャに忠実に従ってきたようである。それなのに、なぜ窮地に陥らなければならぬのかという気持ちと、このようなピンチを主は見過ごされるはずはないという期待がある。そもそも彼女がエリシャのもとに來たことが、救いの始まりであった。神は、人目を気にせず、格好をつけず、遠慮せず、大胆に願うことを求めておられる。

2 あなたのために何をしましょうか 彼女の本当の必要、心底からの願いが何であるかを明らかにするための質問。神の憐れみと恵みが、どんな家族に注がれている。言いなさい 口に出して言うことによって、自分の心の底が自分に見えてくるものである。一びんの油のほかは、はしための家に何もありません 暑さを防ぐため、体に塗るためのオリーブ油を入れた小さな瓶である。もし油が大量にあれば、それを売って食糧を買い、命をつなぐことができる。しかしエリシャが奇跡を行うためには、1びんの油で十分だった。ちょうど主イエスが5千人を養うのに、5つのパンと2匹の魚だけで十分だったように。預言者の妻は、具体的に何が起るのかはわからなかったが、何か自分たちのためになることをしてくれるという期待があった。頼りになるものはみな失われたが、ただ主への信仰だけは残っていた。エリシャが奇跡を行うためには、それで十分であった。

3 「ほかへ行って、隣の人々から器を借りなさい…少しばかりではいけません」 このように命じることによって、エリシャは、預言者の妻が信仰を働かせることができるように導いている。ち

ようど主イエスが、カナの婚宴で、僕たちに水を汲ませたように。

4 あなたの子供たちと一緒に戸の内に閉じこもり エリシャは、奴隷に売られようとしている子どもたちをも、主のみわざの証人として用いようとしている。

5 彼女は彼を離れて去り、子供たちと一緒に戸の内に閉じこもり… 彼女はエリシャの言葉にすぐ従った。子どもたちも疑わないで、本気になって器を借りてきたところに、亡き父の信仰を受け継いでいることがうかがえる。子供たちの持つて来る器に油をついだ 彼女の家に残っていたわずかなオリーブ油を、ほかの器に注ぐと止まらなくなった。神の力に目を丸くしたことだろう。

6 子供が「器はもうありません」と言ったので、油はとまった 預言者の妻が借金を返済し、一家が食べて行く以上に十分な油が満ちたので、油は止まった。主の供給は、人の必要を満たして余りある。

7 彼女は神の人のところにきて告げた 預言者の妻にとつて、エリシャは神の人、すなわち神から遣わされた人であることがはっきりした。神の實在感があつたからである。「神の人」という表現がそれを暗示している。「わたしたちの福音があなたがたに伝えられたとき、それは言葉だけによらず、力と聖霊と強い確信によつた」(1テサロニケ1・5)。

参考図書 『新聖書注解』、『小島伊助全集第6巻』、『エリヤとエリシャ』(藤本満) など。

聖書 列王下4・1〜7
 タイトル エリシャ(いっばいになった油)
 暗唱聖句 もつと器を持てきなさい。
 目標 エリシャの信仰による奇跡に学ぶ。

導入

(光田)

皆さんは、困ったときドラえもん「何でもポケット」があるといいのになあと思いませんか。今日のお話には、とても不思議な油の瓶が出てきます。先週のエリヤに続く有名な預言者エリシャの話です。エリシャをとおしてなされた奇跡から、神様がどんなにすばらしいお方を学びましょう。

やもめの訴え

皆さんには友だちが何人ぐらいいるでしょう。エリシャにも預言者の仲間がいました。ある日、一人の女の人がエリシャの元に来てこう訴えたのです。「あなたの預言者仲間であった私の夫は、私と子どもたちだけを残して死んでしまいました。お金を借りているので、それが返せなければこの子どもたちは奴隷に売られてしまいます。ほかに私たちを助けてくれる人はありません。お願いですエリシャさん、どうか、神様に祈り、私たちがどうすればいいのかを教えてください。」

わずかな油

このかわいそうな女の人の話を聞いてエリシャは早速神様に祈りました。それから「私はあなたのために何をしてあげたら良いでしょうか。あなたの家にあるものを教えてください。何か一つぐ

らい残っていませんか」とやさしく尋ねました。するとこの女の人は「瓶に油が少し残っています。でも、ほかの物は私の家には何もありません」と答えました。するとエリシャは「そうですか。それでは出かけて行って、隣りの人たちから空の器を借りてきてください。一つや二つではいけませんよ。できるだけたくさんさんの器が必要ですから、子どもたちに手伝わせない。集めて来たら、あなたと子どもたちと一緒に家の中に閉じこもって、器に油をいっばいになるまで注いで、一つずつ取りのけるようにしなさい」と答えました。

充分な油

母親と子どもはなぜそんなことをするのか理由は全然分かりませんでした。エリシャが命じられたようにしました。子どもたちは、すぐに外に出て行きました。「こんにちは。すみませんが、空の器があったら何でもかまいませんから、できるだけたくさん貸してもらえませんか」と、次々と近所中から借りられるだけの器をいっばい借りて戻ってきました。母親のほうは子どもたちが持つてくる器に、油を注ぎ始めました。するとどうでしょう、すぐ済んでしまうと思っていた油は、後から後から出てくるのです。一つ、二つ、三つ：どんだん器はいっばいになって、テーブルの上、棚の上、ベッドの上、床の上と、部屋中に置かれました。とうとう器のほうが足りなくなってしまうしました。母親は「早く器を持てきなさい」と言いましたが、子どもは「お母さん、器はもう一つも残ってないよ」と答えました。すると油はぴたりと止まってしまいました。

それから母親はエリシャの所に出かけました。

エリシャは、器に入った油を売ってきてお金に換え、借りているお金を返すようにと言いました。そして、余ったお金で生活していくようにとも教えてくれたのです。もう子どもが奴隷に売られる心配はなくなりました。そればかりか、これからの生活費まで与えられたのですから、この家族はどんなに神様に感謝したことでしょう。

まとめ

子どもたちが集めてきた空の器は、残らず油でいっぱいになりました。神様は今も生きておられ、私たちに必要なものを備え、困ったときには助けてくださいます。私たちは、神様からすべての良いものを受ける空の器のようなものです。いつでも、どんなときにも神様にお祈りしましょう。

例話

ある女子神学生(伝道者になる勉強をしている人)の話です。彼女は授業で使う文法の教科書を持つていませんでした。無理をすれば買うこともできたのですが、まず神様にお祈りをしました。すると神様が少し待つようにおっしゃいました。そこで、一週間、二週間、三週間：と待ちました。が、本もお金も与えられません。毎回毎回、図書館で本を借り続け、貸し出しカードは上から下まで自分一人の名前で埋まりそうでした。二ヶ月ほど経ったある土曜日、いつものように教会に奉仕に出かけました。するとその教会の先生から「この本を使いませんか？」と差し出されたのは、祈って待っていたあの文法書だったのです。これは、2年前の出来事です。神様は、今も私たちに必要なものをよくご存知です。

♪主のちからを♪

(プレイズワールド25)



聖書 エゼキエル 37・1～14

テーマ エゼキエル

序論

(金井)

一八九〇年(明治23年)11月24日にバークレー・バックストーン師は来朝して日本宣教を開始された。バックストーン師はリバイバル運動の大きな流れの中で回心し、海外宣教のビジョンを持って、それを実行された。私たちの教団はいわばリバイバル運動の所産なのである。今日は、主が預言者エゼキエルにお与えになったメッセージを通して、神の民のリバイバルについて学びたい。

一、枯れた骨

エゼキエルはブジの子で、エルサレム神殿に仕える祭司であったが、紀元前597年にエホヤキン王らと共にバビロンに捕囚とされた(第1回バビロン捕囚)。その捕囚生活の5年目(前593年)に主の言葉がエゼキエルに臨み、彼は預言活動を開始した(1:1～3)。本書は、彼が主から受けた預言の言葉と幻を自ら書き記したものである。

エホヤキンに代わる王として立てられたゼデキヤはバビロニアに背き、エジプトに頼った(17:15)。そこで、バビロニアは大军をもってエルサレムに押し寄せ、前587年にエルサレムの城壁と神殿を破壊して、町を焼き払った。王と上層階級の人々はバビロンに捕囚とされて(第2回バビロン捕囚)、ユダ王国は滅亡したのである。その滅亡が、ユダの人々の背信に対する主の裁きであることを、エゼキエルは告げている(5～7章)。

37章に記されている甚だ多くの(枯れた骨)は、国が滅亡し、捕囚とされたイスラエルとユダの象徴である。(見よ、彼らは言う、「われわれの骨は枯れ、われわれの望みは尽き、われわれは絶え果てる」と)。実に彼らの魂は絶望して、乾き切っていたのである。

二、息を与えて生かす

しかし、この死に絶えたようなイスラエル民族に対して、主なる神はエゼキエルを通して希望のメッセージを語られた。(これらの骨に預言して、言え。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。主なる神はこれらの骨にこう言われる、見よ、わたしはあなたがたのうちに息を入れて、あなたがたを生かす。わたしはあなたがたの上に筋を与え、肉を生じさせ、皮でおおい、あなたがたのうちに息を与えて生かす)。

エゼキエルが骨に向かって預言すると、(動く音があり、骨と骨が集まって相つらなかつた)。そして、(その上に筋ができ、肉が生じ、皮がこれをおおった)。しかし、(息はそれの中になかつた)。主は彼に言われた、(人の子よ、息に預言せよ、息に預言して言え。主なる神はこう言われる、息よ、四方から吹いて来て、この殺された者たちの上に吹き、彼らを生かせ)。エゼキエルがまた預言をすると、(息はこれにはいつた。すると彼らは生き、その足で立ち、はなはだ大いなる群衆となつた)。

この枯れた骨が生き返る幻は、イスラエル共同体の再建を預言している。主は選民を完全に絶やすことはされず、残りの民を生かしておられる(6・

8)。事実、バビロニアを倒したベルシャ王クロスが前538年に出した勅令によって、ユダヤ人は嗣業の地に帰還することができたのである。ただし、神の民であるイスラエル共同体の再建は人の力によって成し遂げられるものではない。彼らを神の民として生き返らせるのは、神の(息)である。神の(息)こそ人間を生かすものである(創世記2:7)。(息)(ルアハ)は(霊)とも訳すことができる。

三、わたしが主であることを悟る

神が、背く民を裁かれるのも、残りの民を回復されるのも、すべては(わたしの主である)ことを彼らに悟らせ、主の聖なる栄光を諸国の民に示すためである。(わたしはわが霊を、あなたがたのうちに置いて、あなたがたを生かし、あなたがたをその地に安住させる時、あなたがたは、主なるわたしがこれを言い、これをおこなったことを悟ると、主は言われる)。神は預言者を通してみ言葉を語り、御霊の力によってみ業を進めておられる。この原則は今も変わらない。

結論

地方には、高齢化が進み、若者や子どもが少なく、将来に不安を感じている教会が多い。常駐の牧師がおらず、兼牧の教会もある。しかし、主が私たちに希望を与え、聖霊によるリバイバルを起こしてくださることを信じよう。この地に主の栄光が輝くことを信じて、熱心に祈り、み言葉を語り続けよう！

研究資料

(石田)

エゼキエル(イエヘズケール)は、「神が強めてくださる」の意。彼は神殿とエルサレム破壊、そしてバビロン捕囚というイスラエルの暗黒時代に、預言者として働くという困難な仕事をした。エレミヤと同時代人で、彼より後に生まれ、長く生きる。神は艱難時代に偉大な預言者たちを起こされた。彼の預言活動の内容は大きく二つあり、ユダ王国が破局に至る数年前に、エルサレムが陥落し神殿が破壊されることを予見し、警告した。そして捕囚の民の中から、「残れる民」が起こされ、国が復興するという神の約束を語って民を励ました。この滅亡と復興という二つのテーマは、ヨハネの黙示録に通じるところがある。

テキスト

1 主はわたしを主の霊に満たして出て行かせ
11章から途絶えていた幻による預言が再開される。エゼキエルは、幻の中である谷(平原)に連れて行かれた。そこには骨が満ちていた。骨とは、捕囚の恥辱の中にあるイスラエルの民のことである。国民的絶望感が表れている。新約的には、罪と咎によって魂の死んでいる人々のことであろう。エゼキエルは、おびただしい戦死者が野ざらしになつて白骨化した光景を見たことがあるのかもしれない。常識的に、骨は骨以外の何ものでもなく、そこから生命的、建設的、積極的なものは何も引き出せない。その骨が自ら動き出すことがあるとすれば、それだけでも大事件である。

2 見よ、谷の面には、はなはだ多くの骨があり、皆いたく枯れていた。バビロンによつて神殿とエルサレムの都は徹底的に破壊され、イスラエルは信仰の拠り所を失った。またいったん捕囚となつたら、祖国に帰還できる可能性は全くなかつたので、彼らは生きる希望を失った。そういうことでイスラエルは、自らを干からびた骨のようだと感じていた(11)。神は、彼らが生きているのは名ばかりで、墓の中にいるような者であると見ている(12)。特に礼拝の場所である神殿が破壊されたことの精神的ダメージは小さくなかつた。

3 人の子よ、これらの骨は、生き返ることができるのか。全能の神が否定的な答えを期待しているとは考えられない。わたしにそれができると信じるか、とチャレンジしていると見るべきだろう。これは主イエスがたびたび試みたことでもある。主なる神よ、あなたはご存じです。あなたにはそれができると信じますという信仰告白である。

4 これらの骨に預言して、言え。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。目も耳もふさいで絶望の底に座り込んでいる人々には何を言っても無駄のように思われるが、それだからこそ、人を生かす命の言葉が必要である。死んだような人々には、まず聞かせることから始める。語る前には、その魂のために十分祈ることが欠かせないから、この場合、祈ることも預言に入ると言つてよいだろう。

5 見よ、わたしはあなたがたのうちに息を入れて、あなたがたを生かす。神の「息」(ルーアハ)は、神の「霊」(ルーアハ)である。霊的に死んでいるような捕囚の民を復活させるものは、神の言

葉による神の霊である。

6 わたしはあなたがたの上に筋を与え、肉を生じさせ、皮でおおい。このような再生は、自然界ではありえない。霊的に死んだ人が神に立ち返つて、生まれ変わるときのプロセスを表現しているのかもしれない。

7 わたしが預言した時、声があつた。見よ、動く音があり、骨と骨が集まって相つらなつた。野に一面のおびただしい骨が動いてガタガタと鳴る音が響き渡つた。預言者のひと言に、神の力は想像をはるかに超えて働く。

8 息はそこになかつた。肉体的、物質的回復だけでは真の復興(リバイバル)にはならない。

9 人の子よ、息に預言せよ、息に預言して言え。息、つまり神の霊が働くように宣言すること。神が語れと言われたことを語つた。息よ、四方から吹いて来て、この殺された者たちの上に吹き、彼らを生かせ。エゼキエルは、神の霊の自由で強力な働きを確信して語るように教えられた。口に出すことによつて、信じられるものである。

10 そこでわたしが命じられたように預言すると、息はこれにはいった。すると彼らは生き、その足で立ち、はなはだ大いなる群衆となつた。エゼキエルはイスラエルの霊的復興(リバイバル)を見せられ、それを確信したので、民に対して希望を大胆に語ることができた。預言者が語るためには、自らが幻を見せられる必要があつた。

参考図書 『旧約聖書講解(下)』、『実用聖書注解』、『キリスト者学生会聖書注解』、『新聖書注解』、『新聖書辞典』、『デインダル聖書注解』など。

聖書	エゼキエル 37・1～14
タイトル	エゼキエル（いのちの息）
暗唱聖句	人の子よ、息に預言せよ、息に預言して言え。
目 標	エゼキエル 37・9 霊の人エゼキエルの幻から学ぶ。

導入

(光田)

去年、愛知万博でマンモスの標本が展示されましたが、見た人はいますか。あの骨はいつか生き返って動き出すでしょうか？預言者エゼキエルは、とても不思議な幻を神様から見せられました。それは、枯れた骨の谷です。今日は、絶望を希望に変える預言から学びます。

バビロンへの捕囚

私たちが何か悪いことをすれば、先生やお家の人に叱られ、間違っていたら正されるように、私たちが正しく生きるために、懲らしめを与えられることがあります。

イスラエルの民は偶像礼拝や不信仰の罪で神様を大変悲しませていました。そのために70年間、バビロンという強く大きな国に、ほとんどの人が無理に連れ去られ、神殿も壊されてしまいました。しかし神様は、イスラエルの人々を憎まれたわけではありません。神様はイスラエルの人々を選んでおられ、彼らが滅びることを惜しまれていました。バビロン行きは懲らしめを与えて、立ち返らせるためだったのです。

枯れた骨の谷の幻

このような時代にエゼキエルは神様に不思議な幻を見せられました。神の霊に満たされて連れて行かれた所は、枯れた骨がいつばい重なっている谷でした。骨はどれも大変傷んでいます。エゼキエルは神様から、この骨は生き返るかどうかと尋ねられましたが、エゼキエルは神様がご存知ですと答えて、神様のお言葉を待ちました。

すると、神様はエゼキエルに、枯れた骨に向かって預言せよと言われました。「枯れた骨よ、主の言葉を聞け。神様はあなたがたの中に息を吹き入れて、あなたがたを生かす。骨の上に筋、筋の上に肉、その上を皮膚で覆って、息を与え、生きたものにする。そうして、あなたがたは私が主であることを知るようになる」と。

エゼキエルは神様のお言葉通りに骨に向かって預言をしました。するとどうでしょう、カタカタと動く音が始まりました。骨と骨が集まってつながりだしました。そしてその骨に筋、そして肉が付き、皮膚で覆われたのです。しかしまだ生きてはいません。続いて神様は言われました。「息に預言せよ。四方から神様の息である霊が吹きつけるなら、この殺された人たちは生き返るのだ」と。エゼキエルはまた神様に命じられたように預言しました。すると、たちまち神様の霊が彼らの内に入り、生き返って、自分の足で立ち上がり、大きな生きた人々の集団となったのです。

回復の預言

この幻は一体何を示しているのでしょうか。神様はこの枯れた骨がイスラエルの民全体を表わしているのだと教えてくださいました。イスラエル

の人々はバビロンに捕囚されたことで信仰も希望も失って何の役にも立たず、まるで枯れた骨の集まりのように命のない状態になっていたのです。神様を信じないで従わない人々は、神様にとっては死んでいるのと同じことなのです。聖霊の息を吹き込まれ、新しいいのちに生き返らなければなりません。

この幻は、枯れた骨を墓から出すように、神様がイスラエルの民をもう一度母国に帰し、安心して住むことができるまでに回復させる、という希望の預言なのです。この預言は、イスラエルの人たちが良くなったために与えられたものではありません。ただ、神様がイスラエルの人々を愛しておられたからです。

まとめ

罪は私たちを神様から引き離してしまいます。自分勝手な生き方をしているなら、神様の目に私たちは枯れた骨のように見えるでしょう。けれども、イエス様は私たちの罪を背負って身代わりに十字架で死んでくださいました。誰でも、悔い改めてイエス様を信じるなら、罪が赦され、新しく生れ変わって、神の子とされ、永遠のいのちをいただくことができます。神様に背を向けている人間を悔い改めに導き、生かそうと計画なさるのが、私たちの神様の愛です。

たとえ苦しいことや悲しいことに出会ったとしても、失望しないでイエス様を信じ続けましょう。聖霊は私たちの助け主、慰め主です。神様が味方なら、どんなことが起こっても乗り越えられます。♪よろこびひろげよう♪ (プレイズワールド 26)



聖書 詩篇126・1〜6

テーマ 喜びの収穫

序論

(金井)

今日は収穫感謝日である。これは信仰の自由を求めて新大陸アメリカに渡ったピューリタンが、大変な苦難を経て農作物を収穫した時に持った礼拝と感謝祭が、その始まりとされている。私たちも苦難の中で主に信頼する信仰を学びたい。

一、帰還した民の喜び

バビロンに捕囚とされたユダヤ人は、紀元前538年にペルシャ王クロスが出した勅令によって、故国への帰還が許された。詩篇126篇の前半はそのときの歓喜を歌っている。

〈主がシオンの繁栄を回復されたとき、われらは夢みる者のようであった。その時われらの口は笑いで満たされ、

われらの舌は喜びの声で満たされた〉。

〈シオン〉は神殿の建っていた丘の名であり、全エルサレムまたはその地の住民を表す名である。バビロニア軍によって侵されたあの都に帰ることは、捕囚民の〈夢〉であった。それを実現してくださったのは、イスラエルの神〈主〉である。

〈その時

「主は彼らのために大いなる事をなされた」と言った者が、もろもろの国民の中にあつた。主はわれらのために大いなる事をなされたので、われらは喜んだ。

〈主〉の栄光は異邦の人々に対しても表された。

二、挫折した民の祈願

しかし、初めにエルサレムに帰還した民は少数であり、大部分のユダヤ人はバビロンにとどまっていた。帰還民が取り組んだ神殿と城壁の再建は、まもなくサマリヤ人の妨害によって挫折してしまつた(エズラ4章)。帰還民の〈笑い〉は〈涙〉に変わった。彼らはエルサレムの〈繁栄〉が回復されることを願つて、切に主に祈つた。

〈主よ、どうか、われらの繁栄を、

ネゲブの川のように回復してください〉。

〈ネゲブ〉はユダの南に広がる乾燥地帯であり、春から夏にかけて〈川〉に水は無い。秋から冬にかけて雨季になると、乾いたワディ(水路)に雨水が流れ込んで、激流の〈川〉となる。この祈りには、当時のユダヤ人の渴ききつた心情と、主なる神の絶大な力に対する期待が込められている。

三、種まく者への報い

捕囚民が帰国してからしばらくパレスチナでは日照りが続き、凶作が続いた。それは、自分の家の事だけに忙しくて、主の家である神殿の再建をおろそかにする民に対する主の裁きであつた(ハガイ1・9〜11)。

〈涙をもつて種まく者は、

喜びの声をもつて刈り取る。

種を携え、涙を流して出て行く者は、束を携え、喜びの声をあげて

帰ってくるであらう〉。

パレスチナでは11月と2月〜3月に雨が降つた後に種まきをする。主から懲らしめを受けたときに

悔い改めて主に従い、努力を続ける者には、主が恵みの雨を注ぎ、豊かな報いを与えてくださる。

ペルシャ王大流理オスの治世第2年(前520年)に預言者ハガイとゼカリヤがイスラエルの神の御名によって預言したので、ユダヤ人は神殿建設工事を再開し(エズラ5・1〜2、ハガイ1章、ゼカリヤ1章)、前515年に完成させた(エズラ6・15)。ペルシャ王アルタシャスタの治世第7年(前457年)には律法学者エズラがバビロンから帰還して、エルサレムで宗教改革を開始した(エズラ7章)。アルタシャスタ王の治世第20年(前445年)には、ペルシャ王に仕える高官であつたネヘミヤがエルサレムに帰還して、城壁の再建工事を指導し、これを完成させた(ネヘミヤ2〜6章)。

このようにして、神の都エルサレムは再建され、神の民イスラエルは回復されたのである。

結論

一六二〇年にメイフラワー号に乗つてアメリカに渡つた清教徒はビルグリム・ファーズと呼ばれる。彼らの大半は都会出身の知識人であつた。慣れない土地での開拓は困難を極め、翌年の夏までに彼らの半分が死んだ。親しくなつた先住民の人たちが種を分けて、まき方を教えてくれたおかげで、彼らは秋には野菜を収穫することができた。その時、彼らは教会に集まつて感謝の礼拝をささげ、先住民の人たちを招いて共に食事をした。

日本の教会は、宣教の困難な地にあつて苦勞が絶えない。けれども、夢を現実としてみてください。主に期待して、涙の祈りをもつて種をまき続けよう。

研究資料

(石田)

詩篇120篇から134篇までには、エルサレムに巡礼する人たちによって歌われた「都もうでの歌」という表題がついている。類型上は、民衆の嘆きの歌に分類される。

この詩篇が作られた年代は、イスラエルの民がバビロン捕囚より解放されてエルサレムに帰還したときであると考えるのが自然であろう(1)。本篇は、困難な状況から救われることを確信し、その喜びを望みながら読まれ、あるいは歌われるのがふさわしい。

テキスト

1 主がシオンの繁栄を回復されたとき、われらは夢みる者のようであった バビロンに捕囚されていた民は、バビロンを滅ぼしたベルシャ王クロスによって解放されることになった(エズラ1・1〜4)。これは50年ぶりの帰還となる。いったん捕囚となったら、二度と故国に戻れない定めであったが、それが王の命令で神殿の財宝を持って帰国し、神殿を再建できることになった。このことは単なるクロス王の温情ではなく、無から有を生み出す神の奇跡である(歴代下36・22)。神が異邦の王の心を感動されたからである(エズラ1・1)。まさに「荒野に道を設け、さばくに川を流れさせる」出来事であった(イザヤ43・19)。このとき、民の一部、四万二千三百六十人が応答してエルサレムに帰還した(エズラ2・64)。「夢みる者」という表現から、想像もしていなかった

主のみわざへの驚きと感激の気持ちがかかる。

2 その時われらの口は笑いで満たされ、われらの舌は喜びの声で満たされた 捕囚からの解放と母国への帰還命令は、耳を疑う朗報であった。にわかには信じられなかったであろうが、それが確かであることがわかると、イスラエルの民の喜びは爆発し、賛美がわきあがった。神は信じて従う者を笑わせてくださる方である(創世記21・6)。その時、「主は彼らのために大いなる事をなされたと言った者が、もろもろの国民の中にあつた」バビロンにはイスラエルだけでなく、征服された諸国民が捕囚となっていたが、彼ら異邦人の中にイスラエルの解放を見て、その神のみわざであることを悟った者が大勢いた。イスラエルにとって捕囚それ自体は屈辱であったが、そこからの解放は、かえって主の御名が諸国民にあがめられる証(あかし)の機会となった。

3 主はわれらのために大いなる事をなされたので、われらは喜んだ 2節は異邦人の驚きの声だが、主に感謝し、その御名をほめたたえることは本来異邦人ではなく、神の民の仕事である。3節では自分たちこそ主を喜び、ほめたたえなければならぬという気持ちだめられている。これはイスラエル自身の喜びである。

4 主よ、どうか、われらの繁栄を、ネゲブの川のよ
うに回復してください 作者は、3節まで解放と帰還の喜びを謳歌(おうか)しているが、一方では手放しで喜べない現実を前にして祈り始める。この祈りには二つの解釈が成り立つ。第一は、帰還した民は自分たちの自由を感謝しただけでなく、バビロンでの生活に

安住して、まだ残っている民の帰還のためにも祈った。ネゲブはユダ南部に広がる荒野のことで、その川(ワディ)は乾季には干上がるが、雨季には奔流となる。そのようにまだ残っている民が勢いよく、おびただしく帰ってくることを祈ったものである。第二は、帰還した民が直面した国土の荒廃、近隣諸国の介入と妨害という問題を乗り越えて、捕囚前の独立と繁栄の回復を祈るものでもある。

5 涙をもって種まく者は、喜びの声をもって刈り取る よいものをまけばよいものを刈り取るという原則、あるいは収穫の前には種まきがあり、喜びの前には涙があるという教訓が述べられる。類似するものに「あなたは泣く声をとどめ、目から涙をながすことをやめよ。あなたのわざに報いがある」(エレミヤ31・16)がある。実際、種まきの時期は、一年で最も食料の少なくなるときだから、刈り入れの時よりも苦しみがある。これは今の苦難を耐え忍んで主のために働けば、天においてだけでなく地においても必ず報われることを教えている(1コリント15・58、ガラテヤ6・7〜10)。祈り、他者への愛のわざ、献金、証や伝道の働き、教会形成など、あらゆる主のわざについて適用できるであろう。

6 種を携え、涙を流して出て行く者は、束を携え、喜びの声をあげて帰ってくるであろう 出て行くことと帰ってくることに、イスラエルの捕囚と帰還が想起される。

参考図書 『旧約聖書講解(下)』、『実用聖書注解』、『キリスト者学生会聖書注解』、『新聖書注解』、『新聖書辞典』、『新聖書講解シリーズ』など。

聖書 詩篇126・1〜6
タイトル 喜びの収穫（天国の刈り入れ）
暗唱聖句 涙をもって種まく者は、喜びの
声をもって刈り取る。

目 標 豊かな収穫のために多くの涙を
流そう。 詩篇126・5

導入

(光田)

11月の第四木曜日は収穫感謝の日です。一六二〇年、信仰の自由を求めてイギリスからアメリカに船で渡った102名の人たちがいました。彼らは、自分の家を建てるよりも先に、教会を建ててから生活を始めたそうです。到着してから一年、半数あまりの人々が亡くなり、穀物を育てるのにも苦勞をしました。そんなときに先住民の人たちが、とうもろこしや大麦の育て方などを教えてくれたので、辛く悲しみの多かった次の年の秋には、多くの収穫が得られました。そこで、神様に感謝し、先住民の人たちを招いてお祝いをしたことが収穫感謝祭の始まりです。今日は収穫の話です。

豊かな種まき

さて、皆さんはもう新米を食べましたか。農家の人たちが少ししかお米を作らなければ、お米は高くてなかなか食べることができないでしょう。でも、私たちは毎日ご飯をいっぱい食べることができて感謝ですね。お米を作るためには、田を耕して水を入れ、籾を蒔いて苗を育て、田植えをします。夏の間に雑草を抜き、害虫や水枯れから守

るなど、刈り取るまでは、汗を流し、暑さも我慢しなければなりません。農家の人は大変です。

今日のみ言葉は、種を持って出かけて行く、そうするとたくさんさんの収穫がありますよ、と教えています。神様の種まきとは何でしょう。それはみ言葉の種まきです。み言葉の種まきをするとなんが実りますか。イエス様を信じて罪が赦され、永遠のいのちをいただく人々が起こされるのです。もし、ある人が良い種を家にいっぱい持っていたとしても、少しも蒔かないでたくさんさんの種を残しておいたとしたら、どんなに長く待ったとしても何も実りません。だから、あるだけ全部、残さないで蒔いたほうが賢いですね。私たちが教会にお友だちや家族を誘うことも種まきです。トラクトを配ることも種まきをすることです。

涙の種まき

農家の人は収穫まで汗を流し苦労しますが、み言葉の種まきをする人は、涙を流しながら種を蒔き続けます。あなたはどんなときに涙がでますか。いじめられたとき、けんかしたとき、叱られたとき？

イエス様は人々の不信仰をご覧になって涙を流され、毎日お祈りしながら泣かれました。イエス様の目は涙でいっぱいでした。それは多くの人がイエス様を信じなかったからです。イエス様を信じなければ、最後は罪のために滅んでしまうことを良く知っておられたからです。

イエス様は、罪を赦し永遠のいのちを与えるために、十字架で身代わりに死んでくださいました。イエス様の十字架が自分の罪のためだったと分かる

なら、これを知らない人に伝えたいではない気持ちになります。み言葉の種まきは、イエス様と同じように涙を流してとりなしのお祈りをするでもあります。

豊かな収穫

イエス様は「収穫は多いが、働き人が少ない」（マタイ9・37）、また「目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを待っている」（ヨハネ4・35）とも話しておられます。このように、イエス様は、たくさんの方が救いを待っていると言われました。神様の畑で働く人を神様は今も求めておられます。私たちも祈り、福音の種を持って出かけましょう。

例話

今から約250年前、アメリカでのことです。デイビッド・ブレイナードという青年がイエス様の愛に満たされ、先住民たちに福音を伝えるために出かけました。ブレイナードは人目に隠れた森の中で、何ヶ月も、涙を流しながら神様の前に一人ひとりなしの祈りをささげました。

彼の体は結核に犯されて弱っていましたが、心はイエス様の愛に燃えていました。言葉が通じないので通訳を探しますが、あるときは、お酒に酔った人しか頼めませんでした。けれども、心を込めてイエス様の愛を伝えたブレイナードをとおして、聖霊が働かれました。彼の話を聞いた人たちは涙を流して罪を悔い改め、イエス様を信じる大勢の人々が起こされたのです。彼は29歳で天国に帰りましたが、彼の涙の種まきは、豊かな収穫となつて神様の蔵に納められたのです。

♪歌い続けよう主の愛を♪

(友よ歌おう28)



聖書 ヨハネ1・1～12

テーマ 人類の希望

序論

(金井)

今日からアドベント(待降節)に入る。今年度の学びは今日から第3期に入り、「希望に生きる」の期題のもとに学びを続けていく。今月は神の御子キリストが地上に降って来られたことによって私たちに与えられた希望について学んでいこう。

一、神の言であるキリスト

神は被造物を通して、預言者を通して、あるいは歴史の展開を通して、御自身の存在と力と意志を人類に伝えてこられた。しかし、人類は神を認めず、神に従わないで滅びに向かっている。そこで、神は人類に対する究極の啓示として独り子を人間として世にお遣わしになった。そのお方がイエス・キリストである。彼を見つめ、彼の言葉を聴くことによって、私たちは真に神を知ることができる。イエス・キリストの歴史的事実は、神の完全な自己啓示なのである(1・18、14・9)。

〈初めに言があつた〉。この〈言〉とは啓示者なる御子イエス・キリストを指している。御子は天地創造の〈初め〉にすでに存在しておられた。

〈言は神と共にあつた。言は神であつた〉。御子は父なる神とは別の人格者であるが、御父と同じく永遠の〈神〉であられる。三位一体は神秘であつて、私たち人間の存在する次元では理解し難い。しかし、私たちは神が啓示された真理をそのままに受けいれなければならない。「位格を混同するこ

となく、本質を分離することなく」(アタナシオス信条4)、これが三位一体論の大原則である。

〈すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった〉。神は言葉によつて天地を創造された(創世記1・3)。父なる神の御計画に従つて、実際に働かれたのは御子である。御子は天地の創造者であり、万物の主である(コロサイ1・15～17、ヘブル1・2～3)。創造主と被造物には絶対的な相違がある。被造物を礼拝することは創造主に対する冒瀆である。キリストこそ「わたしの神、わたしの主」と礼拝すべきお方なのである(20・28)。

二、神の光であるキリスト

〈この言に命があつた。そしてこの命は人の光であつた。光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかつた〉。クリスマスは一年で最も日照時間の短い季節にある。これは、暗い世界を照らす〈光〉として来られたキリストの降誕を祝うのにふさわしい時である。クリスマスを過ぎると、日照時間は少しずつ長くなっていく。光が闇を駆逐するのである。

〈ここにひとりの人があつて、神からつかわれていた。その名をヨハネと言つた。この人はあかしのためにきた。光についてあかしをし、彼によつてすべての人が信じるためである〉。パプテスマのヨハネは、キリスト降誕の半年ほど前に生まれた(ルカ1・26、57)。彼は荒野で生活し、民衆に悔い改めの洗礼を授けて、キリストの宣教の道備えをした。彼をメシヤ(キリスト)と見なす人

々もあり、彼の死後も信奉者が地中海世界に広がった(使徒18・25、19・3)。しかし、ヨハネ自身は、自分がメシヤではなく、メシヤを証しするために神に遣わされた者であることを自覚しており、それを公言していた(1・19～27)。

三、人類の希望であるキリスト

〈すべての人を照すまことの光があつて、世にきた。彼は世にいた〉。預言されていたとおり、時至つてキリストは世に來られた。しかし、この世はキリストの所有物であるのに、世の人々は彼を認めず、〈受けいれなかつた〉。今やキリストによつて全人類の罪の贖いは成就しており、誰も自分の罪のために滅びる必要がない。キリストを受けいれないがために人は滅んでいくのである。

〈しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである〉。霊的新生の経験には〈血すじ〉も〈肉の欲〉も〈人の欲〉も関係がない。私たちキリスト者はただ〈神によつて生まれた〉のである。キリストにあつて私たちに永遠の希望がある。

結論

キリスト教信仰の基礎は、神の御子イエス・キリストの歴史的事実にある。キリストはその身をもつて神を啓示し、人類の罪の贖いを成し遂げられた。その事実の故に、彼に信頼する者は永遠の希望を持つことができる。キリストは私たちに神の子となる特権を与えてくださった。ヨハネのように私たちも世の光なるキリストを証しよう。

研究資料

(足立 宏)

テキスト

1 初めに言があった これは天地創造(創世記1・1)以前に「言」(ホ・ロゴス＝御子キリスト)がおられたこと、すなわち御子の先在性を福音書記者ヨハネが断言していると考えられる参照コロサイ1・15)。ヨハネは1節で「言」(ホ・ロゴス)を3回繰り返している。これはヨハネが、今から自分が伝えることは「言」(ホ・ロゴス)すなわち御子キリストについてであることを強調し、明確にしていると考えられる。ではなぜ記者ヨハネは、このように書き始めたのだろうか。これはある意味でキリスト論的ではない。つまりヨハネは「人の子」があったとか、「キリスト」があったとは書かなかった。事実彼は同じ1章で救い主としてのタイトルを数多く使っている。「神の子」(1・34・49)、「キリスト」(1・41)、「イスラエルの王」(1・49)、「人の子」(1・51)。

この福音書の直接の読者は、一世紀のギリシャ世界で生きていたユダヤ人と考えられる。彼らは当然のことながら旧約聖書に精通していた。そこで記者ヨハネは、旧約聖書を多数引用し、また旧約聖書に依拠しつつ筆を進めている。ユダヤ人にとって「ことば」(ヘブル語 ダバール)はきわめて重大なものである。神の「ことば」は創造において、神の力強い行為と結びついている(創世記1・3以下、詩篇33・6)。また啓示(エレミヤ1・4、イザヤ9・8、エゼキエル33・7、アモス3・1、8)や救済(詩篇107・20、イザヤ55・11)において主からの「ことば」は絶対である。このように天地創造、救いと審判、いやし

と回復という旧約聖書の歴史的出来事において力強く働かれる神は、これらすべてを「主のことば」において成された。端的に言って、旧約聖書において「神のことば」は、創造、啓示、そして救いにおける力強い神ご自身の自己表現である。そこで記者ヨハネは最初の読者を意識して、神の究極的な自己表現である御子キリストを「言」(ホ・ロゴス)と表現したのである。ヨハネはキリストのすべての称号を「言」(ホ・ロゴス)一言で要約し、イエス・キリストこそが至高のみ言葉であると主張している参照ヘブル1・1～2)。**言は神と共にあった** 御子キリストと神との関係を示し、共存性を意味すると考えられる。**言は神であった** 御子キリストの神性を明示している(ヨハネ1・18、20・28)。

9 すべての人を照すまことの光があつて、世にきた まことの光(キリスト)は、創造とは違った意味でこの地上に到来されようとしていたことは間違いない。「まことの」(アレシノス)という言葉は、本福音書ではしばしば「本当の」、「真正正銘の」という意味である。そしてここでは特質として光に適用されていて、「究極的なもの」を含んでいる参照6・32、15・1)。これは単に間違っている、間違っていない、のレベルではない。ヨハネが言わんとすることは、世に來た「言」(ホ・ロゴス)が、その真正正銘の光であつて、人間に対する神の究極的な自己表現であることにある。

記者ヨハネは本福音書で「世」(コスモス)という言葉を用いている。この言葉を考察すると、一握りの節は中立を提示しているが、大多数の場合は決定的に否定的な意味を示している。「世」(コ

の世)(例8・23、9・39、11・9、18・36)は、天地万有ではなく、その創造者に敵対している被造の秩序である(例1・10、7・7、14・17、22・27、30、15・18～19、16・8、20、33、17・6、9、14)。したがってヨハネが「神は世を愛された」(3・16)と言うとき、それは世が全く逆の(愛されるべきでない)存在であり、その愛とは神ご自身の性質を証明している。神の愛は世が偉大だからではなく、徹底的に悪いから、賞賛されるべきもの。

照らすと訳されている動詞(フォーティゾー)は、「照明する(内的に)」という意味を持つ。内的な照明は肉眼では見えないものである。しかしその内的に照明される「光」が目に見える姿で、この地上に到来されようとしている。そして記者ヨハネは本福音書において、光(キリスト)が、すべての人を照らし、また区別を強いることを繰り返して主張している(例3・19～21、8・12、9・39～41)。

12 彼を受け入れた者 とは、「その名を信じた人々」と言うこと。つまりキリストへの信仰は、キリストに信頼し、キリストが主張することや彼が成すことを感謝して認めること。このことが「彼を受け入れる」ことを意味する。本福音書において信仰者は神の「子(テクノン)」となるが、イエスだけが神の「子(ヒュイオス)」である。しかし養子縁組によって信仰者はみな、「神の子どもたち」となる。神による新生(3・3～8)。

参考図書 山下正雄『ヨハネの福音書』『実用聖書注解』(いのちのことば社)、Carson, D.A.: The Gospel According To John (Erdmans), Morris, L.: The Gospel According To John (Erdmans)

聖書
タイトル
暗唱聖句ヨハネ1・1〜12
いのちの光
すべての人を照すまことの光が
あって、世にきた。目 標
まことの光なるキリストこそ人
類の希望であることを信じる。

導入

(光田)

12月はうれしいクリスマスです。今週からイエス様のご誕生を待ち望むアドベントに入り、今日は第一アドベント礼拝です。光り輝くものは私たちの周りにたくさんありますが、今日は太陽や星以上に輝いて、私たちの心を照らすイエス様のことを学びましょう。

心を照らす光

真っ暗な道や濃い霧の中を歩いたことがありますか。夏に肝試しをしたお友だちがいるかもしれませんね。暗いところにずっといるのは気持ちが悪いです。暗い所では、何が待っているかわからないし、どちらへ進んだらいいのかわからなくて不安になります。しかし懐中電灯や、ろうそくの光があるなら、何があるのかわかって危険なものを避けることができます。

これと同じように、私たちには心を照らす光が必要です。何が良いことで何が悪いことなのかを知ることができる光です。神様に喜ばれることが、何で、神様を悲しませることが何かわかって、行うことができる心の光です。戦争や殺人、盗み

が悪いことは分かってても、^{だれ}誰にも知らない心の中で誰かを憎むことは、神様の前に罪であり殺人と同じだと教えてくれるのは、み言葉の光です。私たちの心にある罪を分かせてくださるのが、神様のいのちの光の働きです。そして、私たちが罪から救われる道を教えてくれるのも、神様からの光です。この光は目には見えませんが、暗い心を照らして明るくきよい心を造り出す、いのちの光です。

バプテスマのヨハネ

イエス様がお生まれになる6ヶ月前にバプテスマのヨハネは生まれました。ヨハネは人々が自分の罪を認めて、悔い改めるように勧めていました。イエス様をお迎するのにふさわしく、一人一人の心が整えられなければならないからです。多くの人は、力強く悔い改めを迫って語るヨハネの言葉に従い、バプテスマを受けました。このときのヨハネは皆の目には特に目立つ存在でした。けれどもヨハネは、イエス様が来られる前の準備のために闇を照らす、ともしびのような人物でした。

まことの光

暗い夜も、夜が明け始めると、電気の光も、ろうそくの明かりもいなくなるように、ヨハネの仕事も終わる時が来ました。朝日が昇るように、イエス様が来られたからです。罪のために暗くなっていた私たちの世界に、本当の神様の愛を知らせ、神様との仲直りの道を造るために、イエス様が来られたのです。

私たちはどうしたら神様に喜ばれるのか、どうしたら天国に行けるのかという大切なことを、学

校では教えてもらえませんか。多くの人は、良い行いをたくさんすれば、天国に入れるだろうと考えています。また、自分を訓練して心をきよめ、良い人間に変わろうと一生懸命努力する人もいます。しかし私たちは、わがままを言うし、うそもついてしまいます。自分の努力では自分を変えることはできません。では、一体どうすれば良いのでしょうか。天国に入るためには神様が決められた道があるのです。

まとめ

イエス様こそ天国に住むことができる人の見本として、輝いた模範を見せてくださったのです。イエス様は本当の「光」です。もし、天国に入ることができるのが、イエス様のように罪を1回も犯したことの無い人だけなら、私たちはとても行くことができません。私たちは、うそをついたりけんかをしたり、人を憎んだり、うらやましがったりと罪を犯して、神様を悲しませるだけでなく、神様から罪の罰を受けなければならないからです。けれども、イエス様が私たちの罪の身代わりに十字架にかかって死なれ、よみがえってくださいました。ですから自分の罪をお詫びして、イエス様の十字架と復活を信じてイエス様に従う人は、誰でも天国に行くことができます。命の光であるイエス様は、私たちを罪と滅びから救うために来られた私たちの本当の希望の光です。暗い心の罪を神様に一つ一つお詫びして、イエス様の血で洗いきよめられ、本当の喜びに輝いたクリスマスを迎える準備をしましょう。

(新聖歌79)



聖書 ルカ2・1〜7 テーマ 希望の夜明け

序論

(金井)

世界の歴史はキリストの降誕によって紀元前 (BC: Before Christ「キリスト以前に」の意) と紀元後 (AD: Anno Domini「主の年に」の意) に二分されている。バプテスマのヨハネの父ザカリヤはこう預言した、「そのあわれみによって、日の光が上からわたしたちに臨み、暗黒と死の陰とに住む者を照し、わたしたちの足を平和の道へ導くであろう」(1:78〜79)。霊的暗黒の時代を終わらせたキリスト降誕の意義について学ぼう。

一、力が支配する世において

ルカはこの福音書において、キリスト降誕の歴史的事情について詳細に記している。

今からおよそ二千年前、主イエスが誕生された頃、地中海世界はローマ帝国が支配していた。英雄力エサルが暗殺された後に覇権を握った力エサルの養子オクタヴィアヌスは、ローマにおいて100年続いた内乱を収め、前27年に「アウグスト」(尊厳者)の称号を得て、初代皇帝として君臨した。それから約200年間は「ローマの平和」と呼ばれる。〈皇帝アウグスト〉は全世界の人口調査をせよとの勅令を出した。人民をローマ帝国の徴税システムに組み込んで、支配するためである。

ローマの貴族〈クレニオ〉は前12年頃から軍事的にキリキヤ地方とシリヤ地方を制圧していた。口語訳で〈総督であった時に〉と訳されている部分は

分詞であり、その直訳は「支配権を掌握していた時に」である(クレニオがシリヤ総督に着任したのは紀元6年である)。

イドマヤ人のヘロデは、ローマの後盾を得て王となり、シリヤ州の一部であるユダヤ、ガリラヤとその周辺を前40年から前4年まで支配していた。キリストの降誕を知って、ヘロデは幼子キリストを殺害しようとしているので(マタイ2:16)、キリストが降誕された年は紀元前7〜4年頃と思われる。紀元と降誕年のずれは、525年に西暦が作られた時の誤算によるものである。

二、無力な者たちのうちに

さて、このような権力者たちの多重支配の下では、民衆は実に無力であった。人々は命じられるままに、人口調査のため自分の出身地に行かなければならなかった。

〈ヨセフ〉は〈ダビデの家系〉であり、またその血統であったので、ガリラヤの町ナザレを出て、ユダヤのベツレヘムまで、百数十キロの旅をしなければならなかった。〈ベツレヘム〉は〈ダビデ〉の出身地であり、キリストはダビデの子孫として生まれると預言されていた(イザヤ11:1)。

この旅には、(いいなづけの妻マリヤ)も一緒だった。彼女は出産間近い大きなお腹を抱えていた。起伏の多い道を旅するのは、彼女にはつらかっただろう。しかも、ベツレヘムでは人々の大移動のため、〈客間には彼らのいる余地がなかった〉。ヨセフとマリヤは家畜部屋に泊まる他なかった。ベツレヘムは人口数百人の小村であったから、宿屋

は無かっただろう。当時の農家では、家族の居室と客間と家畜部屋が一つ屋根の下にあった。家畜部屋は居室と客間の間にあり、土間であった。

〈彼らがベツレヘムに滞在している間に、マリヤは月が満ちて、初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせた〉。〈飼葉おけ〉は石灰石か、しっくいで作られていた。この冷たい小さなベッドの中で、ロバや牛などに囲まれて、新生児イエスはこの世の生活を始められたのである。

イエスの母マリヤはこのように言った、

「主はみ腕をもって力をふるい、

心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし、

権力ある者を王座から引きおろし、

卑しい者を引き上げ、

飢えている者を良いもので飽かせ、

富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます。」

(1:51〜53)

天上の栄光の座にいます神の御子キリストが、無力な乳飲み子として〈飼葉おけの中に〉寝ておられる姿は、神の国において成就する大どんでん返しを象徴している。

結論

神の御子は、大いなるあわれみとへりくだりをもって、無力な者たちのうちにお生まれになった。今もキリストは、無きに等しい者をあえて選んで、近づいてくださっている。暗く、汚れた家畜部屋に生まれたキリストは、罪深き私たちの心にも宿ってください。心の戸を開いて、主を迎えよう。

研究資料

(石田)

この個所は、なぜ主イエスが郷里のナザレではなく、ユダヤのベツレヘムで生まれたかという理由を説明し、その出来事の詳細を伝えている。ルカが直接マリヤにインタビューして記した個所の一つであると思われる。

テキスト

1 皇帝アウグスト 皇帝の名前を挙げるのは、福音書の中でルカだけである。アウグストの本名はガイウス・オクタヴィアヌス。彼はカエサル(シーザー)の姪の子で彼の養子となり、その死後政敵アントニウスを倒して1世紀にわたる内乱を収めてローマの支配者となった。しかしカエサルのように独裁者となることを避け、元老院と権力を分割する道を選んで、自らを「第一の市民」と称した。これに対して元老院は彼にアウグストゥス(尊厳者)という称号を与えた。しかし彼は軍を統率しており、その後ろ盾で政権を握っていたので、その実体は皇帝である。こうして帝政ローマはアウグストに始まる。彼の、前27年から後14年という41年にわたる治世を通して、地中海世界に軍事的な安定と政治的な秩序、経済的な繁栄がもたらされた(いわゆる「ローマの平和」は、前31年から後180年の2世紀あまり続き、この間に福音は急激に、広範囲に拡大した)。彼はより公平な税金を属州(ローマの直接支配地)に課するため、14年ごとに人口調査をするように命じ、これが3世紀まで続いたことがわかつている。

2 クレニオがシリアの総督であった時 ルカは当時の歴史的記録を入念に調べ、できる限り正確

に記述しようと努めた(1・1〜4も参照)。彼の福音書には、歴史的背景を示す記述が多数ある。たとえば皇帝テベリオ、ユダヤの総督ポンテオピラト、ガリラヤの領主ヘロデ、イツリヤ・テラコニテ地方の領主ピリポ、アピレネの領主ルサニア、大祭司のアナナスとカヤパ、など(3・1、2)。福音を史実の裏づけを取って証言しようとした姿勢の現れである。

3 登録をするために、それぞれ自分の町へ帰って行った ユダヤ人は系図を重んじ、熟知していたので、父方の先祖の本籍地は、何代そこから離れていようとも忘れられることはなかった。

4 ヨセフもダビデの家系であり、またその血統であつたので…ベツレヘムというダビデの町へ上って行った 皇帝の勅令とヨセフの行動は、計らずも共に旧約の預言を成就している。その預言とは、キリストはダビデの子孫として生まれ(サムエル下7・12、13、誕生より約一千年前)、ベツレヘムに生まれる(ミカ5・2、誕生より約700年前)というものである。世が世ならばヨセフはユダヤの王であつたはずであるが、彼の数代前には一介の庶民に零落していた。

5 身重になつていたいいなづけの妻マリヤ 住民登録の対象は成人男子に限られていたが、ヨセフは婚約中に妊娠したマリヤを村人の中傷や嫌がらせから守るためにも、ナザレからベツレヘムまで140キロの道連れて行くことに決心した。これは考えてみれば流産や早産を伴う危険な行動である。しかしわれらの救い主は月が満ちて、お生まれになることができた。いいなづけの妻 とは、

不思議な呼び方であるが、当時の習慣として、婚約すると法律上は妻として扱われたことによる。

6 月が満ちて 臨月に入ったという肉体的なことだけでなく、「神によって満たされた、神の時がついに満ちた」という意味が込められている。

7 初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせた ベツレヘムがヨセフの先祖の出身地であるといつても、何代も前のことで、すでに親戚づきあいも途絶え、他の大勢の人々と同じく、宿屋に滞在するしかなかった。宿屋といつても1階を家畜用にし、2階を客間にした建物である。飼葉おけはふつう石で造られた。この言葉によって、産まれた場所が家畜小屋であつたことがわかる。

客間には彼らのいる余地がなかった おそらく登録のための宿泊客であふれ、ヨセフとマリヤは1階で家畜と一緒に泊まらなければならなかったであろう。全時代全世界の救い主にして王の王であるお方、永遠にして全能の神であるキリストが、客間から追い出され、家畜小屋で産まれたことは象徴的である。この啞然とするほどのコントラストは、私たちの生き方にチャレンジを与える。最低の生まれ方をしたことは、主イエスが、信じる者を最高の人生に生まれ変わらせるためではなかったか。また客間から締め出されたことは、神を邪魔者扱いにして生きようとする人間の本性を浮き彫りにしている。「彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった」とあるとおりである(ヨハネ1・11)。

参考図書 『実用聖書注解』、『ウエスレアン聖書注解』、『新約聖書注解(マクドナルド)』など。

聖書
タイトル
暗唱聖句

ルカ2・1-7
飼葉おけのイエス様
マリヤは月が満ちて、初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせた。ルカ2・6、7
真の希望の源泉なるキリストの誕生を感謝しよう。

導入

(光田)

アドベント第二週です。クリスマス・ツリーやクランツ、リースなどきれいな飾りと、プレゼントの用意で私たちの心もウキウキしてきました。今日はイエス様のお誕生の目的を学びましょう。

人口調査

今から約二千年前、ローマの皇帝アウグストは、「全国の住民をそれぞれ生まれ故郷に帰らせ、登録をさせて人口を調べなさい」と命令を出しました。そこでヨセフさんはマリヤさんと一緒に、生まれ故郷のベツレヘムに出かけることになりました。住んでいたガリラヤのナザレからユダヤのベツレヘムまで出かけることになりました。電車や自動車はないので、歩いていくか、せめて口バに乗るしかありません。ヨセフさんは荷物をまとめて旅の用意をしました。マリヤさんは、赤ちゃんを産む日が近づいていたので、ゴトゴトゆらゆら揺れる口バの背に乗って行きました。この旅行はなんだか始めから大変そうに思えます。けれども、神様に守られて旅はスタートしました。

二人がベツレヘムに着いた時には、町は住民登録

の旅人で混雑していて、どこもかしこも人でいっぱいです。ヨセフさんは早速宿を捜し始めました。

ドアをトントントン。「こんばんは。今日ここに泊めていただけますか」。宿屋の主人は「すみませんね。今夜はお客さんがいっぱいなんです。他の宿屋に聞いてみてください」。ヨセフさんは少しがっかりして、次の宿屋のドアをたたきます。「こんばんは。今夜泊めていただけますか」。すると、この宿でも断られてしまいました。ヨセフさんはがっかりして次を尋ねるとまた同じ答えです。しかし、あきらめずしていられます。マリヤさんともう赤ちゃんが生まれそうで、苦しうにしていたからです。そこでヨセフさんは「あの、普通の部屋でなくてもいいんです。体を横にするところさえあれば、妻に子どもが生まれそうなんです」。それを聞いた宿屋の主人はかわいそうに思って、ちよつと考えました。そして気の毒そうに言いました。「そう、家畜小屋ならあるんだけどね。くさいし、汚いですよ」。ヨセフさんは「いいえ、どんなところでもかまいません。休めたらいいんです」。こうして、やつとのことで屋根の下に入ることができました。

イエス様の誕生

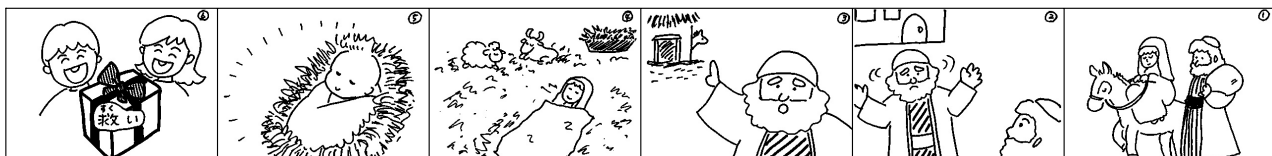
そこは薄暗くて、牛や羊の息の音が聞こえます。でも動物たちがいるのでなんだか温かいです。そしてその夜、ここでマリヤさんは初めての赤ちゃんを産みました。約束された救い主イエス様のお誕生です。赤ちゃんにふさわしいベッドや産着はありません。ヨセフさんは、馬や牛がえさを食べる飼葉おけの中にわらを敷いて、布でくるんだイエ

ス様を寝かせました。大変な旅行でどうなることかと思いましたが、赤ちゃんが無事に生まれたので、ヨセフさんもマリヤさんもほっとしました。赤ちゃんはすやすやと眠っています。忙しい大変な一日でしたが、今は、とても幸せな気持ちです。御使いがヨセフとマリヤに告げた神様の約束を、今、本当に目の前に見えています。約束されて生まれたのは、神様のお子イエス様なのです！

神様の約束

預言者のイザヤさんが約700年も前から預言をし、ユダヤの人たちが長い間待っていた、神様の約束が本当のことになったのです。神様が贈ってくださった救い主は、小さな人間の赤ちゃんでした(イザヤ9・6)。救い主は突然天から降りてこられるのではなく、私たちが生まれるのとまったく同じ赤ちゃんとしてお生まれになりました。そして、ベツレヘムのダビデの町でお生まれになるという預言も実現しました(ミカ5・2)。神様が人間の姿になられてこの世に来てくださったのは、世界の歴史の中でこの時だけです。イエス様はインマヌエルと呼ばれますが、それは神様が私たちと共におられるという意味です。神様が、私たちの世界にお生まれになられただけでなく、十字架で死なれ、私たちを罪と滅びから救うために来てくださったのです。イエス様は、神様からの愛のプレゼントです。神様はすべての人が救われて永遠の命をいただくことを願っておられます。私たちを神様の子どもにするために、神様が人となって来られた救い主イエス様に、感謝しましょう。

(Ⅱ讃美歌127)



聖書 ルカ2・8〜20

テーマ 貧しい人の希望

序論

(金井)

いま世界は激しい競争の時代に突入し、人々の貧富の格差が拡大している。わが国でも「ふつうの人」がホームレスに転落している現実がある。この暗き世を照らすキリストの光について学ぼう。

一、貧しい羊飼いたち

キリストが降誕された時、ベツレヘムの町の喧騒をよそに郊外の野原で野宿している者たちがいた。羊飼いたちである。同一地域の羊飼いたちは夜間、石を積み上げて作ったおりの中に羊の群れを一緒に入れて、交代で見張りをした。所有者自身が羊を牧することもあったが、通常、町の人々は雇い人に牧羊をさせた(ヨハネ10・12)。羊飼いは牧羊のために神殿礼拝に行くことができない。野宿するために家の女性たちを守ることができない。他人の土地に生えている草を自分の羊に食べさせている。このような理由で、羊飼いはユダヤ教会から罪人として蔑視され、疎外されていた。町では大勢の人が住民登録のために、にぎやかに動き回っている。それなのに、俺たちは蚊帳の外。人の数にさえ入れられないのか。深い暗闇は彼らの心情を象徴しているようである。

二、天使が告げた福音

そこに突然、天使が現れ、「主の栄光が彼らをめぐり照した」。羊飼いたちは非常に恐れた。聖所で

仕えていた祭司ザカリヤでさえ恐れたのだから(1・12)、罪人と見なされてきた羊飼いたちが極度に恐れたのは当然であろう。

しかし、天使は彼らに「恐れるな」と言う。天使は「大きな喜び」を伝えた。彼らのために「救主がお生れになった」のである。天使が最初にキリスト来臨の福音を伝えたのは、宮殿にいる王でも、神殿にいる祭司でも、会堂にいる律法学者でもなく、野原にいる羊飼いたちであった。キリストは、神のもとから失われた罪人を尋ね出して救うために、地に降られたのである(ルカ19・10)。当時、皇帝は「ローマの平和(パクス・ローマ・ナ)」をもたらした「救い主」、「主」、「平和の君」、「国父」、「神」であると教えられ、人々は崇拜を強要されていた。ユダヤ人はこれに激しく反発し、軍事的政治的解放者として「キリスト」を待望していた。しかし、天使は告げた、「あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉桶の中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」。(飼葉おけ)は農民たちも出産によく利用していたものだが、それにしても、これがキリストの「しるし」とは！

栄光に輝く「主」(ヤハウェ)なるキリストは、実に貧しい姿で人の世に降られた。イエス・キリストは社会の底辺にまで至る「すべての民」と「共にいます」(マタイ1・23)「救主」である。

三、キリストが与えた希望

天使の告知が終わると、「おびただしい天の軍勢が現れ」て神を賛美した、「いと高きところでは、

神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」。

天使たちが帰り、再び闇に包まれた後も、羊飼いたちの心に希望の光が残った。彼らは言った、「さあ、ベツレヘムへ行つて、主がお知らせ下さったその出来事を見てみようではないか」。羊飼いたちは「急いで行つて、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を探しあてた」。

キリストに会った羊飼いたちは「この子について自分たちに告げ知らされた事を、人々に伝えた。人々はみな、羊飼いたちが話してくれたことを聞いて、不思議に思つた。これまで羊飼いたちは町の人々の交わりから疎外されていた。しかし、今や彼らは町の人々に積極的に関わっている。キリストの福音は信じる者に、霊的な変化ばかりでなく、心理的・社会的な変化をももたらす。孤独の殻は破られて、新しい交わりが生まれる。福音は地上に「平和」をもたらすものである。

こうして羊飼いたちは大きな喜びを感じ、「神をあがめ、またさんびしながら帰つて行つた」。

結論

神の御子イエス・キリストは、神から離れ、社会から疎外された心寂しき罪人の友となられた。そして、キリストは人と人の間にある隔ての壁を破り、新しい交わりを生み出しておられる。そのみ業は、イエスが生まれたばかりの「幼な子」の時から始められていた。なんとすばらしい、驚くべき救い主だろうか！人類に希望の光を与えてくださったキリストを、私たちも隣人に伝えよう。

研究資料

(石田)

救い主誕生というイスラエル民族と人類への歴史的に重大な告知が、野宿をしていた数人の羊飼いに伝えられたことは、不思議である。人間的には、エルサレムのご真ん中で、指導者たちをはじめ多くのエリートたちに対して伝えられたほうが効果的ではないかと思われる。しかし神のなされることはいつでも、人の思いをはるかに超えており、しかも時になつて美しい。これは、営々と自分の仕事にいそしんでいるとき、神がみ心を示してくださることの良い例ではないか。

テキスト

9 彼らは非常に恐れた 文字どおりには「大きな恐れを恐れる」、これは10節の「大きな喜び」と対句になっている。人間が天来の聖い光にさらされたときに感じる恐れであるが、ここに人の恐れを喜びに変えてしまう神の恵みを見る。

10 すべての民に与えられる大きな喜び 降誕の知らせを最初に受けたのは、たった数人であったが、そこから全世界の民族に伝えられることが計画されていた。**大きな喜びを、あなたがたに伝える** 直訳すると「大きな喜びの良い知らせ(福音)を伝える」。福音を伝える(ユーアンゲリゾマイ)の原意は、伝令が戦争に勝ったことを本国に伝えることであった。

11 ダビデの町 ベツレヘム(パンの家の意)は、ダビデの生まれ故郷であることからこう呼ばれていた。メシヤがダビデの子孫から出ることになつ

ていたことにふさわしい。しかしダビデは約千年後に自分の故郷で起こる歴史の重大事件を知る由もなかった。ベツレヘムはダビデ輩出だけでなく、救い主誕生の光栄に与つた。

救主…主…キリスト 御使いはイエスを三重の称号で呼んでいる。オクタヴィアヌスに対してローマの元老院が与えた称号アウグスト(尊厳者)などは、足元にも及ばない。この三重の称号はイエスが地上の絶対権力者もひれ伏すべき、人となられた神であることを余すことなく表現している。時の皇帝も**救主**(ソーテル)と呼ばれたが、御使いはイエスこそ唯一まことの救い主であることを証言している。その名前も「主は救いである」という意味の「イエス」(ヘブル語ではヨシユア)と名づけるように指定されていた(1:31)。主キユリオスは、ヘブル語の「ヤーウエ」をギリシヤ語に訳したもので、わたしは在つて在る者という永遠の自存者にして創造主なる神を表す言葉である。つまり御使いはみどりこのイエスを、旧約聖書に啓示された神の名前で呼んでいるわけである。永遠の神が人として生まれるなどということは、驚天動地の出来事であり、ユダヤ人には想像すらできないことであつた。事実、「人々はみな…不思議に思つた」(18)、あり得ない話と思つたのである。**キリスト**(クリストス)は、ヘブル語のマーシアアハ(油注がれた者)いわゆるメシヤ)のギリシヤ語訳である。旧約聖書に預言され待望されてきたメシヤが、時満ちてイエスとして現れたことを示している。ユダヤ人の悲願である。ところが彼らがこれを拒み、イエスを十字架にまで追い込んだことは、ま

さに「彼らは何をしているのかわからずにいる」とであつた(23:34)。**主なるキリスト**(キユリオス・クリストス)いう二つの称号を並列しているのは、新約中ここだけに出てくる。ヘブル語的に言い直せば「ヤーウエであるメシヤ」となる。

12 それが、あなたがたに与えられるしるしである 飼葉おけの中に赤ん坊が寝かされていることは普通ありえないので、羊飼いたちが救い主を見つけ出すための「しるし」となりえた。

14 いと高きところでは、神に栄光があるように ラテン語で言い慣わされてきたグロリア・イン・エクスセルシス・デオ。天地創造のときにも、「神の子たち(天使たち)はみな喜び呼ばわつた」(ヨブ38:7)。これによつて私たちも、救い主誕生のゆえに主の御名をあがめるように招かれている。地の上では、**み心にかなう人々に平和があるように** み心にかなう人々とは、神が喜ばれる人々のこと。救い主がこの世界に來られたことによつて、信じる人に神との平和と人との平和が約束されることになった。自動的な平和ではない。

15 さあ、ベツレヘムへ行って…見てこようではないか 羊飼いたちが御使いの言葉にすぐ反応したこと、普段から神を畏れ敬つていたことがうかがえる。

19 マリヤはこれらの事をことごとく心に留めて、思いめぐらしていた ルカがマリヤから直接聞いたことを示唆する箇所の一つ(1:29)。

20 神をあがめ、またさんびしながら帰って行った 羊飼いたちは、神が生きて働いておられることを体験して、神との新しい交わりに入つた。

聖書
タイトル
暗唱聖句

ルカ2・8〜20
羊飼いの喜び
きょうダビデの町に、あなたが
のために救主がお生れになっ
た。
ルカ2・11
卑しく貧しい羊飼いたちに一番
に福音が届けられたことを知る。

目 標

導入

(光田)

先週は、家畜小屋でイエス様がお生まれになったときのことをお話しました。今日はその知らせを初めて聞いてイエス様にお会いできた、幸せな羊飼いたちの出来事です。イエス様は貧しい人たちにとっても救い主です。

暗い夜

羊飼いは大変な仕事です。いつも羊と一緒にいて、えさや水を与えるだけでなく、くまやしに奪われることから守る命がけの仕事です。イエス様がベツレヘムでお生まれになった頃、羊飼いたちはいつものように、夜番をしていました。今日も羊たちを守ってやらねばなりません。少し眠い人もいましたが、その日の夜空はなんだかとてもきれいです。まだ寒かったので、たき火を囲んで一日のいろいろな出来事を話し合っていたかもしれません。星を見つめながら、一日の感謝や明日の守り、そして約束の救い主が早くおいでになるようにと、神様にお祈りをしていましたでしょう。

御告げ

ところが突然、そこにまぶしい光がパーツと輝き、

彼らをめぐり照らしました。御使いが現れたのです。羊飼いたちはびつくりして、思わずひれ伏してしまいました。こんなことは今まで見たことがありません。恐れている彼らに向かって、御使いが言いました。「恐れなくてよいのです。すべての人に、すばらしい喜びのニュースをお知らせします。今日、ダビデの町で、皆さんのために救い主がお生まれになりました。この方が主イエス・キリスト様です」。そして印として、その赤ちゃんが飼葉おけに寝かされている、と伝えました。この御告げは、ユダヤ人が長い間待ちに待っていた救い主誕生の知らせだったのです。すると天の大軍勢が夜空に一齐に現れて、御使いと共に神様を高くかに賛美し始めました。「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上ではみ心にかなう人々に平和があるように」。力強く美しい賛美が夜空に響きました。そして彼らは天に帰って行きました。

羊飼いの喜び

羊飼いたちは腰が抜けるほどびつくりしましたが、今聞いたことを急いで確かめようとすぐに走り出しました。胸がどきどきしています。心当たりのある家畜小屋を手分けして捜しました。そしてとうとう、飼葉おけに寝かされている赤ちゃんイエス様を捜し当てました。御使いの告げたことは、みな本当でした。

イエス様は、王宮やお金持ちの家ではなく、人の住むところでもない、家畜小屋でお生まれになりました。ベツレヘムの町には大勢の人が集まって、皆宿屋に泊まっていたが、イエス様は人が住むと

ころではない家畜小屋の、それも冷たく堅い飼葉おけが最初のベッドでした。飼葉おけは、牛や馬がえさを食べる入れ物です。その上、イエス様が寝かされていたのは、ふわふわの布団の中ではなくて、飼葉おけのわらの上でした。これを見た羊飼いたちは驚いたでしょう。御使いのお告げのとおりのは出来事です。しかもそこは、羊飼いたちが毎日見慣れた家畜小屋でした。こんな近くに救い主がお生まれになるなんてだれも考えもしなかったことです。

まとめ

このようにイエス様の誕生を最初に知らされたのは、国の王様でもなければ、大臣でもありませんでした。そうではなくて、貧しい普通の羊飼いたちでした。しかし彼らは、救い主の誕生を心から待ち望んでいた、心のへりくだった信仰深い人たちだったのでしょう。イエス様は今も、イエス様を喜んでお迎える、心のへりくだった人と共にいてくださるのです。

例話

H先生が、ヨーロッパの伝道会議に出席されたとき、ベッドも古いし、ほかの設備も悪いホテルに割り当てられたことがあったそうです。そこで同室の先生と一緒に、他のよいホテルに変えてもらおうと相談しました。けれどもそのとき、イエス様が飼葉おけで最初の夜を過ごされたことを思い出したのです。そして苦情を言うのは止めて、その部屋で神様にお祈りをし、心から感謝して休まれたそうです。

♪むかしユダヤの人々は♪ (教会学校せいか18)



聖書 マタイ2・1〜12 テーマ 異邦人の希望

序論

(金井)

旧約聖書に預言されたメシヤ(キリスト)が地上に來られた。これは歴史上最大の事件である。それにも関わらず、その時、このお方に会いに行つた者はごくわずかであった。これは他人事ではない。私たちもまたキリストの再臨に備えなければならぬのである。神のご計画について学び、私たちの霊の目を開いていただきたい。

一、キリストを尋ねる異邦の博士たち

「マタイによる福音書」は、イエスの弟子マタイが、50年代の終わるか60年代の初めに書いた文書である。宛先はユダヤ人を中心としたキリスト教会である。この書がイエスの系図から始まり、律法の問題を詳細に扱うのは、そのためである。

ところがマタイは、キリストの降誕を察知して喜び、礼拝に行つたのはユダヤ人ではなく、異邦人であったという事実を明記している。その異邦人とはバビロニアあるいはペルシャの「博士たち」である。この原語「マゴス」は本来ゾロアスター教の祭司を指すものであり、天文学(占星術)や薬学などに長けた知的エリートを意味している。彼らはいつも夜空を観測しつつ、メシヤのしるしの星を待ち望んでいた(民数24・17)。そして、彼らは「その星を見たので」、砂漠を越えて一千キロ以上の旅をして、(そのかたを拝みに)來たのである。

キリストに親しく接見できるのは、キリストの

來臨を待ち望む人だけである。私たちはキリストの再臨を待ち望み、備えているだろうか。世の難事に追われながらも、預言の言葉に心を留めて、そのしるしを確かめつつ、主の日に備えたい。

二、キリストを恐れるユダヤの王

「博士たち」はエルサレムに行き、(ヘロデ王)に「ユダヤ人の王としてお生まれになったかたは、どこにおられますか」と尋ねた。(ヘロデ王はこのことを聞いて不安を感じた)。

ヘロデはユダヤ人が輕蔑するエドム人であったが(マラキ1・4)、ローマの後ろ盾を得て前40年にユダヤの王位を与えられた。その頃エルサレムでは、ハスモン王家のアンティゴノスがバルティア人の支持を受けて大祭司・王となっていた。ヘロデはローマ軍の助力によって前37年にアンティゴノスを倒し、以降、前4年までユダヤに君臨した。実権を握るとヘロデは、富裕者の富を強奪し、ヘレニズム的な都市を建設して異教の文化を持ち込み、反対者を虐殺した。その暴虐のため、ユダヤ人は彼を憎んでいた。このような事情ゆえ、ユダヤの正統的な王が出現することを、ヘロデは非常に恐れたのである。

「そこで王は祭司長たちと民の律法学者たちとを全部集めて、キリストはどこに生れるのかと、彼らに問いただした」。彼らは、(それはユダヤのベツレヘムです)と答えた。彼らはミカ書5章2節を読み上げた。エルサレムの人々はキリストが降誕された場所を知っていたのである。しかし、彼らはキリストのもとへ行こうとはしない。

キリストは神の光である。光の中を歩む者は光を愛し、闇の中を歩む者は光を憎む。

三、実現した希望

神は博士たちの熱心に応えて、(星の導きを彼らにお与えになった。(見よ、彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで、幼な子のいる所まで行き、その上にとどまった)。これは超自然的な神のみ業であろう。(彼らはその星を見て、非常な喜びにあふれた)。彼らの希望は実現した！

(そして、家にはいつて、母マリヤのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏して拝み、また、宝の箱をあけて、黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた)。(乳香)は南アラビアとソマリランドを原産地とする白色の樹脂で(岩波版参照)、神に献げる薫香とされていた(出エジプト30・34・36)。これはオードロンとして今も使用されている。(没薬)はアラビヤ産の樹脂で、強い殺菌力と芳香があり、死体を葬る時に塗った。これらの贈り物はいずれも、異邦の地で産出された貴重な物である。この宝物はヨセフ一家のエジプトでの避難生活を経済的に支えたことであろう。

結論

博士たちは心を尽くし、力を尽くしてキリストを求め、礼拝した。最高のお方には最高のものがふさわしい。キリストは人類に最高の希望を与えてくださったのである。私たちもキリストにまみえる希望をもって喜び、最高のものを献げよう。

研究資料

(石田)

テキスト

1 イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき 同時代のユダヤ人の歴史家ヨセフスによれば、ヘロデは、その治世34年目に死んでおり、これは紀元前4年に当たる。ヘロデは2歳以下の男の子を殺すように命じ(16)、聖家族がエジプトに避難している間に死んでいるので(19、20)、イエスの誕生はそれをさかのぼること2年以内になる(16)。したがってイエスの誕生は、紀元前5年から6年と考えるのが妥当だろう。お生れになった 不定過去受動形で書かれているということは、イエス誕生が、博士たちのヘロデ訪問より前であったことを意味する。博士たち(マゴイ) これはもともとペルシャのゾロアスター教の祭司を指す言葉であった。古代中東一帯に、メシヤがユダヤに現れることを待望する気運があり、その中で博士たちが星の出現をおして、星とメシヤを結びつけることのできる何らかの啓示を受けたのだろう。東とは、ペルシャ、バビロン、アラビアが考えられ、エルサレムまで1、2ヶ月の旅程であった。メシヤ誕生にめぐり合わせた羊飼いたちはユダヤ人であったが、博士たちは異邦人であった。これはメシヤが全人類の救い主であることを示唆している。エルサレムに着いて言った ユダヤ人の王として生まれた方なら、当然首都、しかも王宮に行けば会えると考えるのは自然である。

2 ユダヤ人の王 これはユダヤ人にとって、単

にユダヤの国を統治する王という意味ではなく、全世界を治めるメシヤなる王という意味を持っていた。博士たちもその意味で使っている。お生れになったかたは、どこにおられますか ヘロデを前にして聞いた質問であるとすれば、うかつで危険な行為であった。そのかたを拝みにきました 政治的な意図ではなく、礼拝だけを望んで大旅行をしてきた。

3 ヘロデ王はこのことを聞いて不安を感じた ヘロデはエドム人で、ローマ政府からユダヤ王に任命されていたに過ぎない。正当なダビデ王家の世継ぎが出現していたことを知ったヘロデは、そのライバル出現に敵対心をいだいたのは当然である。エルサレムの人々もみな、同様であった。メシヤ出現に不安をいだいたのは、エルサレムの全住民と言うよりも、ヘロデの側近や宗教家たちである。これが事実とすれば、ヘロデは黙っていないし、事の成り行きによってはローマ政府が介入してくることも予想された。そういう政治的混乱から生まれる不安をいだいたのである。

4 キリストはどこに生れるのかと、彼らに問いだした 博士たちの「ユダヤ人の王」という言葉を、ヘロデは「キリスト(メシヤ)」と言い換えている。ヘロデにとってのメシヤは、政治的な意味を持っていたので、見過ごすことができず、すぐに抹殺する計画を立てた。

5 預言者がこうしている 宗教家たちは即答することができた。

6 ユダの地、ベツレヘムよ ミカ書5・2の引用。キリストがベツレヘムから出ることは、当時

のユダヤ人の常識であった(ヨハネ7・42)。

7 ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、星の現れた時について詳しく聞き これによって、幼な子の年齢を知ろうとした。

8 わたしも拝みに行くから 殺意を隠すための方便である。

10 彼らはその星を見て、非常な喜びにあふれ 直訳は「偉大な喜びとともに大いに喜んだ」。

11 ひれ伏して拝み 明らかな礼拝行為。異邦人であるから人を神として拝むことに違和感はないが、唯一神教のユダヤ人マタイはこれを否定せずに記している。宝の箱をあけて、黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた イエスの生まれた家では手に入らない高価な品であり、高貴な人になさわしい贈り物であって、博士たちが幼な子のイエスを礼拝すべき方として崇めていることがわかる。黄金は王に、乳香は祭司に、没薬は死者にふさわしい贈り物でもあるので、私たちがイエスをそのような方として礼拝すべきことを教えられる。それは自分の全権を明け渡して、イエスをわが心の王として迎え、神に執り成してくださる大祭司としてイエスを仰ぎ、私自身の罪をあがなうために死者となってくださったことを感謝することではないか。

12 夢でヘロデのところに帰るなどのみ告げを受けた 神はメシヤ礼拝のために遠路やって来た博士たちを、帰り道も安全に守ろうとされた。

参考図書 『実用聖書注解』、『マタイの福音書注解(中澤啓介)』、『新聖書注解』、『バークレー聖書注解』、『新聖書講解シリーズ』など。

聖書	マタイ2・1～12
タイトル	博士たちの喜び
暗唱聖句	彼らはその星を見て、非常な喜びにあふれた。 マタイ2・10
目 標	遠くからキリストを捜し求めた異邦人のためにも、救い主が生まれたことを知る。

導入

(光田)

クリスマスおめでとうございます。心の貧しい羊飼いに救い主の誕生の知らせが届きましたが、ユダヤ人以外にもこの良い知らせが届いていました。イエス様はイスラエルの国だけでも、ヨーロッパの国のためだけでなく、世界中の人のために救い主としてお生まれになりました。今日は、ペルシャからやって来た博士たちの出来事から、学びましょう。

ユダヤ人の王

ペルシャの方から星の研究をしている博士たちが集まって話しています。「あの星は救い主のお生まれを示すものに違いない。さあ支度をして出かけ、世界の救い主を拝むことにしよう。おさげする品物もちゃんと準備しなければ」。こうして東方の博士たちは、星に導かれながら遠い遠いイスラエルの国までやってくるのが出来ました。しかし、救い主の居場所が分かりません。王様なら救い主の誕生のことを知っているだろうと思い、ヘロデ王のところに尋ねて行きました。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおられるのかどうぞお教えください。私たちはその方

を拜みに、遠い旅をしてここまで来たのです」。これを聞いたヘロデ王はびっくりしました。「ユダヤの王は自分なのに、この人たちが言っているのは誰(だれ)のことだろうか。そんな人間が生まれたのなら、私の王座を奪われてしまう。なんとかしなければ」と心の中で考えました。エルサレムの人たちもそのニュースを聞いて、心配になりました。そこでヘロデ王は祭司長と律法学者を集めてキリストが生まれるのはいつか、どこでか聞いたできました。すると彼らは「ユダヤのベツレヘムです。聖書にそう記してあります」と答えました。これを聞いたヘロデ王は、その王を見つけ出したら殺してしまおうと考えました。そして、博士たちに「詳しく調べ、見つかったら私に知らせてくれ。私も後から必ず拜みに行くから」とうそをついて博士たちを送り出しました。

真心からの礼拝

博士たちを初めから導いていたのは一つの星でした。明るい星は博士たちをどんどん導いて、ある一軒の家の上で止まりました。そこで博士たちはその家を訪ねました。「トントントン、すみません。ユダヤ人の王としてお生まれになった方はここにおられますか」。ヨセフさんはびっくりしました。それというのも、尋ねている人たちがとても立派な服装をした身分の高そうな人たちだったからです。しかし、イエス様のことを捜している良い人たちのようなので、家の中に入ってもらいました。

家の中には、幼な子イエス様がマリヤさんに抱かれていました。博士たちは、星の導きが本当であつたことに感謝しました。そして、旅行中大切

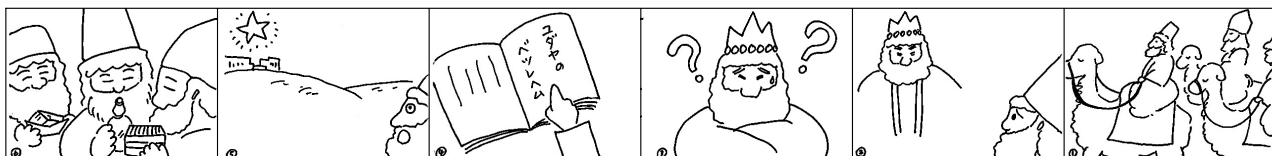
に持ってきた宝物の箱を開けて、黄金、乳香、没薬などの贈り物を、感謝と喜びをもって幼な子イエス様におさげし、礼拝しました。「おお、このお方が私たちの救い主なのだ。この方に本当にお目にかかれるとは、なんと光栄なことだろう」。旅の目的が終わった博士たちは、御使いからヘロデ王のもとに帰るなど知らされたので、来たときとは別の道を通って、喜びにあふれて自分の国に帰って行きました。

まとめ

異邦人の博士たちは、神様の導きに従って、願ひどおりイエス様にお会いすることができました。東の博士たちが遠くて苦労の多い旅をしてでも、お会いしたかったイエス様は、彼らが大切に持ち運んでさげした高価な黄金、乳香、没薬でも、なおさげ足りないと感じたほど素晴らしいお方でした。なぜなら、イエス様は、偉大な神のみ子、全世界、全宇宙の主であり、すべてのものを治めておられる王様だからです。そして、幼な子イエス様も東方の博士たちの礼拝をお受けになられたのは、イエス様が救い主、本当の王様だからです。私たちは東方の博士たちよりもっと東、イスラエルから遠い日本に住んでいます。この良いニュースが最初に日本に届くまでには千五百年もかかりました。そして今も神様はすべての人が救い主イエス様に会えるように導いてくださっています。イエス様は世界中の人の救い主であることに感謝しましょう。そして、私たちもこのビッグ・ニュースをお友だちに伝えましょう。

♪ 遠い空のかなたから♪

(Ⅱ 讃美歌215)



聖書 ルカ2・21〜38

テーマ 実現した希望

序論

(金井)

この一年、国内外で様々な出来事が起こったが、主の守りの中にこの年を閉じられることを共に感謝したい。今や「夜はふけ、日が近づいている」(ロマ13・12)。キリストの来臨を待ち続け、キリストにまみえた喜びをもって世を去った人たちの信仰に学び、キリストの再臨に備えたい。

一、実現した希望

主イエスの両親として神に選ばれたヨセフとマリヤは、敬虔なユダヤ教徒であった。彼らは「律法」の規定どおりに幼な子イエスに「割礼」(男子の性器の包皮を切る。契約の印)をほどこし、40日の(きよめの期間)が過ぎた時、(幼な子を主にささげるため)にエルサレムの神殿に行った。

その時、(シメオン)という(正しい信仰深い人)が神殿に入ってきた。(正しい)とは、律法を忠実に守って、神を畏れ敬っているという意味である。シメオンは(イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた)。それはイザヤを始め旧約の預言者たちが語ってきた神の約束であり(イザヤ61・1〜3)、ユダヤ人の希望の拠り所であった。

シメオンは、(主のつかわす救主に会うまでは死ぬことはない)、聖霊の示しを受けていた。そして、彼は(御霊に感じて)、その時そこに来たのである。

(シメオンは幼な子を腕に抱き、神をほめたた

えて言った、

「主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおりにこの僕を安らかに去らせてくださいます、わたしの目が今あなたの救を見たのですから。」

この救はあなたが万民のまえにお備えになったもので、異邦人を照す啓示の光、

み民イスラエルの栄光であります」。

(シメオン)という名の意味は、「主は聞かれた」である。まさに主はユダヤ人の願いを聞かれて、ふさわしい時にメシヤをお遣わしになった。長年待ち続けてきたメシヤに出会ったシメオンの喜びは、どれほど大きなものであっただろう。

二、実現した裁き

ただし、この時シメオンは、イスラエルに対する神の裁きについても預言している。彼はイエスの母マリヤにこう言った、(この幼な子は、イスラエルの多くの人を倒れさせたり立ちあがらせたりするために、また反対を受けるしとして、定められています。——そして、あなた自身もつるぎで胸を刺し貫かれるでしょう。——それは多くの人の心にある思いが、現れるようになるためです)。

キリストの来臨はユダヤの人々に重大な選択を迫る出来事であった。彼に信じ従うか、それとも彼を拒絶するか。キリストは地上に「分裂」(12・51)をもたらされたのである。結局、ユダヤ人はキリストを拒絶し、殺した。そして、その罪のために彼らは神に裁かれ、亡国の憂き目に遭った。

エルサレムの都と神殿は紀元70年にローマ軍によって徹底的に破壊されたのである。

三、実現した救い

シメオンは、キリストによる救いが(イスラエル)(ユダヤ人)に限定されたものではなく、(異邦人)を含む(万民)に与えられたものであることを預言した。

(ちょうどそのとき)、(アンナという女預言者)も幼な子イエスに近寄ってきた。彼女は84歳のやもめであったが、(宮を離れずに夜も昼も断食と祈りをもって神に仕えていた)。アンナはメシヤにまみえたことを喜び、(神に感謝をささげ、そしてこの幼な子のことを、エルサレムの救を待ち望んでいるすべての人々に語りかされた)。

(イエス)(ヘブル語では「ヨシヤア」という名の意味は「主は救い」である。この福音書の著者ルカは異邦人であるのに、(律法)や(エルサレム)、(宮)を重視して主イエスの生涯を記している。それは、主イエスご自身が完全な犠牲として献(ささ)げることにより、「律法と預言者」(旧約)を完成して(4・21、16・16、24・25〜27、44)、異邦人を含む全人類に開かれた新しい契約を打ち立てられたからである(22・20、24・46〜48)。

結論

神の計画は着実に実現している。霊の目を覚ましてキリストの再臨を待ち望む人は、シメオンの如く喜びと平安をもってこの世を去り、御国に凱旋(がいせん)できる。主を待ち望み、主の慰めを受けよう。

研究資料

(石田)

シメオンという敬虔な人物に与えられた預言をとおして、イエスが将来どういう人格を持ち、どんな働きをするかが見えてくる。

テキスト

22 ユダヤ人の通過儀礼を知らない異邦人のために、ルカは丁寧な解説を施している。

22 モーセの律法による彼らのきよめの期間。そのために男児の場合は40日間が定められていた(レビ12・2～4)。この表現は、イエスが「女から生まれさせ、律法の下に生まれさせ」られたことを思い起こさせる(ガラテヤ4・4)。イエス自身は罪を受け継いで生まれてきたわけではないので、きよめを必要とはされなかったが、信じる者を義とするために、生涯の最初の段階から律法の義を満たすにすぎたのである。これ以下、そのことが強調されている。主の律法に(23)：また同じ主の律法に(24)：律法に定めてあることを行うため(27)：主の律法どおり(39)。

23 長男は主に聖別されたもの：主にささげるため。つまりエジプトの初子がイスラエルの身代わりとなつて撃たれたことの代償として、神の所有となるべく、いけにえとして献げられなければならない(出エジプト13・2)。しかしその代わりに動物や鳥のいけにえを当てるべきこと(それも無理なら小麦粉)が定められていた(レビ12・6～8、5・7～11)。主イエスの両親は、山鳩ひとつがい(家)はとのひな2羽をささげたことから、裕福ではなかったものの、貧窮状態というほどで

もなかったことがわかる。

25 この人は正しい信仰深い人で。正しいは、外に現れた生活態度を示し、信仰深い人は、神に対する内的な態度を示している。敬虔なヨセフとマリヤが律法どおりに事を行っていると、同じく敬虔なシメオンが居合わせたというのは、決して偶然ではない。イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた。当時のイスラエルでは、4世紀にわたつて預言の言葉が与えられていなかったもので、ほとんどの人はメシヤ来臨には無関心になつていった。慰められるとは、メシヤ来臨によつて霊的、経済的、政治的繁栄が回復されることであつた。当時、メシヤは慰め主とも呼ばれていた。聖霊が彼に宿っていた：聖霊の示しを受けていた(26)：御霊に感じて(27)。霊的無関心に覆われていた時代であるが、神に選ばれた少数の敬虔な人々がいた。

28 シメオンは幼な子を腕に抱き。靈感を受けなければメシヤが赤ちゃんとして生まれてくることもわからず、ヨセフとマリヤの連れている子がそれであることもわからなかったであろう。

29 ユダヤ人の賛歌で、ラテン語で「ドミトウス」と呼び慣らされてきた。特に異邦人の救い主でもあることが強調されている。

30 わたしの目が今あなたの救を見たのですから。メシヤの来臨は、神の救いであるという認識、つまり神の救いは目に見える形で実際に現れることを示している。

31 この救はあなたが万民のまえにお備えになつたもの。メシヤによる救いがイスラエルの民だけ

でなく異邦人まで包括することは、御霊による啓示なしにはわかりえなかったはずである。

32 異邦人を照す啓示の光。ユダヤ人以外の異邦人は、暗黒の中に住んでいると考えられていた(イザヤ9・1、2)。その彼らにとつて、メシヤの誕生は、心を照らす世の光となる(ヨハネ8・12)。み民イスラエルの栄光であります。ユダヤ人にとつてのメシヤ誕生は、神との契約に基づいており、これほど光栄なことはいはず。しかしこれを受け入れたユダヤ人は殆どいなかった。

33 父と母とは幼な子についてこのように語られたことを、不思議に思った。マリヤからルカが直接聞いたことを伺わせる個所のひとつ。あまりに壮大な預言であるために、にわかには信じがたかつたのであろう。

35 あなた自身もつるぎで胸を刺し貫かれるでしょう。マリヤが、やがてわが子が十字架にはりつけにされるのを見て、悲しみに打ちひしがれることを預言している言葉(ヨハネ19・25)。それは多くの人の心にある思いが、現れるようになるためすべての人間が、キリストの十字架に対して、どのような心の態度を示すかによつて救いか滅びかに選別される。

37 宮を離れずに夜も昼も断食と祈とをもつて神に仕えていた。断食と祈りの生活の中で、生きている間に、メシヤ来臨にあずかれたことは、アナにとつて生涯最大の喜びであつただろう。

38 エルサレムの救を待ち望んでいるすべての人々に語り聞かせた。長い間、メシヤ来臨を祈り続け、互いに励まし合つていた仲間がいた。

聖書
タイトル
暗唱聖句ルカ2・21〜38
神様に感謝
異邦人を照す啓示の光、み民イ
スラエルの栄光であります。

目 標

ルカ2・32
キリスト誕生の預言はみごとに
実現したことを学ぶ。

導入

(光田)

今日は年末感謝の礼拝です。神様に感謝をして今年の最後の礼拝をささげましょう。約二千年前イエス様がお生まれになられた時、エルサレムには、イエス様をその目で見なければ死ぬことはないという約束され、救い主の誕生を今か今かと待ち望んでいた人がいました。この人たちはもう年をとっていました。毎日神様の約束が本当になることを期待して生活をしていました。そして、神様が約束を全部守ってくださったことを見届けて感謝をささげました。心から喜んで感謝をささげた人々に学びましょう。

イエス様の献児式

皆さんは教会で献児式を見たことがあるでしょうか。生まれて間もない赤ちゃんが、神様の祝福を受けて育つように、神様におささげするときです。イエス様がお生まれになって、マリヤさんのきよめの期間が終わったので、ヨセフさんとマリヤさんはイエス様を抱いて、神様にイエス様をささげるために神殿に出かけました。お母さんのお腹から初めて生まれた子どもが男の子の場合には、神様におさ

さげなければならぬと定められていました。また、律法では山ばと一つがいかが、家ばとのひな二羽をささげるように定められていたのです。

シメオンのさんび

イエス様を抱いたヨセフさんとマリヤさんが、感謝しながら神殿に入ったちようどその時、救い主を待ち望んでいた信仰深いシメオンという人が聖霊に導かれて同じ場所に来ていました。この人は、救い主が来られることを心から待ち望んでいた人です。聖霊がシメオンさんに宿り、神様からは、救い主にお目にかかるまでは絶対に死ぬことがないという大きな希望を与えられていました。ですからこの日も、聖霊に導かれて、イエス様と家族が宮にいる時間に合わせるように入ってきたのです。

シメオンさんはそこで初めてイエス様とヨセフさん、マリヤさんに出会いました。神様が教えてくださったので、その赤ちゃんが救い主であるということがすぐに分かりました。そして神様の約束を見させていただいたことに感謝をしました。そしてイエス様を腕に抱きながら、目を細めて喜び、預言をしました。「神様、本当にありがとうございます。あなたは約束のとおり、私を救い主に会わせてくださいました。私はもう安心してこの世を去っていくことができます。この救いは神様あなたが準備してくださったことです。イスラエル人と全てのの人にとっても、神様の栄光です」。そしてヨセフさんとマリヤさんに向かって言いました。「この幼子はイスラエルの人を治める方です。また反対を受けるしとなりします。そして、マリヤさんあなたも剣で胸を刺されることになりま

す」。イエス様が後に苦しみを受けられることをも預言したのです。

アンナの喜び

ここには84歳になるアンナという女の預言者がいました。若いときにご主人を亡くして、残りの生活を祈りと断食をして、神様にだけ仕えていました。この人もちようどそこに導かれ、イエス様のことが分かり、神様に感謝をささげました。そして、エルサレムで救いを待ち望んでいた人たちに、「救い主がお生まれになったよ、私はこの目でそのお顔を見させていたんだよ」と話して聞かせました。アンナさんも長い間救い主の誕生を待ち望んでいましたが、信じ続けた甲斐がありました。イエス様にお会いできたアンナさんも、神様のご真実にどれほど感謝したか分かりません。

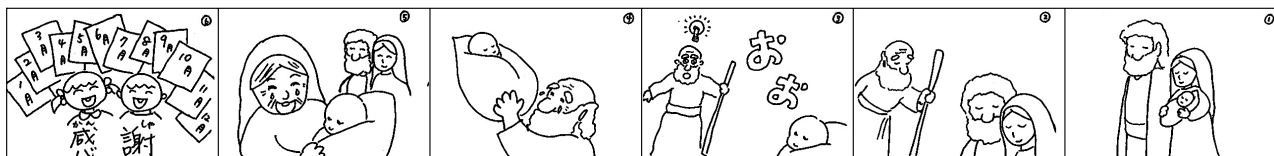
まとめ

このように救い主イエス様誕生の預言は、もうすでに実現しました。聖書にはそのほかに、もう一度イエス様がおいでになられるという約束が残されています。神様の約束を信じ続けて見事に応えられたシメオンさんやアンナさんの信仰にならって、私たちもみ言葉の約束を信じ続けて生活しましょう。

今年ももうすぐ終わります。一年を振り返り、病氣や怪我を治していただいたこと、お祈りがきかれたことなどを、一つずつ思い出して数え、神様にたくさん感謝をささげて、今年を締めくくります。う。そして、新年も教会学校に励みましょう。

♪みんなであたえましょう♪

(こどもさんびか1)



牧羊ひろば



ラミイクラブ & サマーキャンプ

をよく読んでいますよ!。初めてキャンプに参加したお子さんの保護者の方のお話です。辰野教会・教会学校二〇〇六年度サマーキャンプは、7月29日(土)〜30日(日)に教会を会場にして行われました。教師・スタッフ14名。子どもの出席は21名、このうち9人は、この5月からスタートした「ラミイクラブ」に集った子どもたちでした。「ラミイクラブ」は、毎月一回、土曜日の午後、教会で開催されています。

二〇〇六年3月から長谷川和雄師・ひさい師が辰野教会に着任されました。教会学校教師

「この教会には、お祈りにこたえてくださる神様がいらっしゃる」ことがわかったよ!。今年、サマーキャンプに参加したお友だちの声です。
「うちの子は、キャンプから帰って、毎日窓を開けて祈っているんです!」
「わたしたちも子どものころ教会学校に行っていたんですよ!」
「キャンプのしおり



サマーキャンプ集合写真

師会にて、「地域子どもたちにもイエス様のこととお話したいね」、「土曜日だったら教師も時間を共にして、ふれあい、お話をしたり、遊んだりもできるね」と、願いが出されました。ヨハネ10章16節「わたしにはまた、この囲いにはない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならぬ。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう」のみ言葉が与えられ、教師みんなで祈って「ラミイクラブ」と名前がつけられました。教師によりチラシが作製され、教会門柱にポスターが貼られました。
6月3日(土)には第1回ラミイクラブが開かれ、総勢15名で賛美し、「お祈りについて」や「命のパン」のお話を聴き、楽しいゲームの時間を過ごしました。神様は、教会の近くに住む子どもを5人送ってくださいました。

7月8日(土)には、前回初めて集った子どもや、いつも教会学校に来ている子どもが、友だちをさそって来たので、またまた嬉しい神様をほめたたえる時となりました(27名出席)。賛美、お祈り、「迷子の羊」のお話を聴き、みんなでミニ機関車の装置でポン菓子づくりを体験しました。



熱心に...お話ひろば

ラミイクラブに5回出席したもらえる「5回賞」や、お友だちをさそう「アンデレ賞」もあるので楽しみです。
サマーキャンプは、「賢い人ダニエルと三青年」のテーマで、「彼が神に信頼していたからである」(ダニエル書6章23節)の聖句により、第3回目の「ラミイクラブ」も兼ねて行われました。

キャンプ直前の7月19日には「平成18年7月豪雨」が辰野近辺の市町村をおそい、隣町では天竜川が決壊、橋が流され、辰野も一本しかない道路が寸断されました。また、教会員の中にも土石流が田畑をなめ尽くした方々、工場、家の一部に被害のあった方々、指示により避難し、危機一髪で罹災を免れた方々もいらっしゃいます。神様が守りくださったことを感謝し、教会員みんなで心を合わせ復興へのお祈りをささげました。

そのような中で、教師一同祈り合い、安全には万全の体制で臨み、無理のないプログラムに変更してのキャンプとなりました。
3回のお話ひろばと分級では、牧羊者のカリキュラムに沿って、ダニエル書のお話を聴き、み言葉を暗記しました。神様を信じて従ったダニエルたちから神様はどんなお方なのかを学びました。
1日目午後のレクリエーションは教会の駐車場広場で、風船わり、ドッチビーなどをしました。丸いフリスビーのような円盤を投げるのは大人も難

しいですね。白熱した試合になりました(楽しいプレイに、教会向かいの宮木駅で電車待ちしていた学生さんも吹き出していました)。子どもたちの希望で、「大人対子ども」の対戦もしました。次に、教会の1階ホールで「ヨナと魚」などのゲームをし、また、全員で自作紙ヒコーキを作り、競争をしました。

その後、近くの「湯にーくセンター」(辰野温泉浴場)に行きお風呂に入りました。教会に戻ると今度は夕食づくりです。メニューは、子どもたちの希望が一番多かったビーフシチューと野菜サラダ。2グループに分かれて分担を決めました。野菜の皮をむき、肉も包丁で切り、煮込みました。子どもたちが味付けをした2つのなべは、個性あふれる味でどちらもおいしかったです。また、男女に分かれて、お休みの前と朝起きてから子ども聖書日課でディナーションをしました。

キャンプ2日目の朝は、掃除をしている間に先生方と中学生が用意した朝食を、皆で感謝していただきました。この日は日曜日ですので、お話ひろばは教会学校の礼拝として行われました。その後は楽しい工作タイムです。写真たてのフレーム部分にめいめいの発想で装飾しました。ポンドでつけていったのは、金銀のスプレーで色づけされたマカロニ・色とりどりのボタン・ビー



ドッジビー。教会の裏が駅なんだ



写真たてを作ったよ



人形劇「ダニエルとライオン」

ズなどなど：個性あふれる作品が出来上がりました。大人の礼拝後、教会員の皆さんと一緒に、婦人会による手作りのカレーをいただきました。

一斉清掃の後、青年会のお兄さんお姉さん方によるダニエル6章からの人形劇が上演されました。皆さん練習を積み重ね、人形とはいえ迫力の演技でした。声の演出も役にびつたりです。一緒に観劇していた大人からも、驚きや感心の声が聞こえました。笑いもとっていましたよ。すばらしい上演に感謝して、涙していたお年寄りもおられました。

サマーキャンプにあたり、教会学校教師会では「子どもを導く上で必要なこと」を牧師夫妻から学びました。「子どもをイエス様のもとへ：神様の正しさだけでなく、神様の愛を伝えていく。子どもたちに、自分で考えさせることが大切。(教師自身も)従っていききたい、けれど自分の力では難しい。だから、神様からの恵みの信仰に生きていく。み言葉に生かされて：」貴重な資料をいただきました。今後も読み返しつついきたいです。

小さき者の祈りにも、神様はみ言葉を示し、み心によるみ業をもってお答えくださるお方です。この地での神様の教会学校の働きに、ますます神様のみ業が現われますように、み心がなされますように：。主にあるお互いが一致して祈りつつ、神様の名前を賛美しつつ、み言葉に生かされてまいるいと願わされております。

(漆戸啓江)

「おわりに」

『牧羊者』二〇〇六年度第Ⅲ巻をお届けできますことを感謝します。今回も執筆者の交代があり、夏期学校、各種のキャンプや聖会など大変あたたかい中で執筆していただきました。皆様の多大なご協力を心から感謝いたします。

「教師養成講座・旧約聖書丸ごと早わかり」は、今回のカリキュラムの個所です。鎌野直人先生がわかりやすく執筆してくださいました。また、「子ども聖書日課」も、出来るだけわかりやすい言葉にと心がけています。教会学校はもちろんのこと、礼拝や祈禱会、家庭集会などで「牧羊者」が大いに用いられ、各教会が祝福されるように引き続きお祈りください。

終わりに今号の執筆者を紹介いたします。

聖書講解 鎌野善三 金井望

研究資料 足立宏 石田高保

メッセージ例 松浦みち子 光田隆代

ワーク 木村純子 鎌野幸

長谷川ひさ子 長尾秀紀

上森恭子 杉山俊一

加藤清

中 高 科 小岩裕一

フッシャー 藤井洋美

子ども聖書日課 小野淳子

また、校正をしてくださった鎌野善三師、小岩裕一師、光田隆代師、巻頭言の福井文彦師、打ち込みをしてくださった小岩喜代美師、藤井正子師、楠淳子師、み言葉カードの陰山恭子師、陰で労された兄弟姉妹の方々、また、発送とワーク印刷をされたベラカ出版の方々、印刷会社の菱三印刷とアクトに心から感謝いたします。(長谷川和雄)

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇〇六年度 Ⅲ巻

二〇〇六年九月十日発行

発行所 有限会社 ベラカ出版

企画監修 日本イエス・キリスト教団教会学校局

神戸市兵庫区塚本通三―三―一九

電話(〇七八)五七五―一五五―一一

FAX(〇七八)五七五―一六六―一一

印刷所 菱三印刷株式会社

電話(〇七八)五七六―一三九―六一

*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み